京都府遺跡調査概報

第 33 冊

1. 休　場　古　墳
2. 下　畑　遺　跡
3. 長岡宮跡第 205 次
4. 平安京(左京近衛西洞院辻)
5. 木　津　遺　跡

1989

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

華南三彩盤（平安京出土）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは，昭和56年４月に設立され，本年３月をもって８年になります。この間，国・京都府及びこれらの設立した公社・公団の実施する公共的事業に伴う遺跡の発掘調査・研究，文化財保護の普及・啓発事業などを鋭意推進してまいりました。これらの諸事業の成果につきましては，『京都府遺跡調査報告書』をはじめ，『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を刊行し，利用に供してきたところであります。

本概報は，昭和63年度に実施した発掘調査のうち，下畑遺跡・休場古墳・長岡宮跡第205次・平安京(左京近衛西洞院辻)・木津遺跡に関する概要報告です。本書が調査地域の歴史を解明する上での一助になるとともに，ひいては京都府の地域文化の発展に寄与できることを願ってやみません。

最後になりましたが，本書を刊行するにあたり，調査を依頼された京都府教育委員会・京都府土木建築部・同総務部・建設省近畿地方建設局をはじめ，地元の野田川町教育委員会・向日市教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センターならびに，調査に直接参加し協力いただいた多くの方がたに深く感謝申し上げるとともに，今後とも当調査研究センターの事業に対し，御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成元年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は

　1.　休場古墳　2.　下畑遺跡　3.　長岡宮跡第205次　4.　平安京(左京近衛西洞院辻)　5.　木津遺跡

を対象としたものである。

2.　各遺跡の所在地・調査期間・経費負担者及び概要の執筆は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 休場古墳	与謝郡野田川町上山田	昭63. 7. 18 ～ 昭63. 9. 14	京都府土木建築部	森　正
2. 下畑遺跡	与謝郡野田川町三河内810	昭63. 7. 25 ～ 昭63. 8. 12	京都府教育委員会	中川　和哉
3. 長岡宮跡第205次	向日市鶏冠井町大極殿	昭63. 2. 12 ～ 昭63. 6. 29	建設省近畿地方建設局	竹井　治雄
4. 平安京（左京近衛西洞院辻）	京都市上京区下立売通り新町西入ル薮ノ内町	昭63. 1. 5 ～ 昭63. 8. 11	京都府総務部	伊野　近富
5. 木津遺跡	相楽郡木津町大字木津小字南垣外110	昭63. 8. 17 ～ 昭63. 10. 4	建設省近畿地方建設局	岩松　保

3.　本冊の編集には，調査第1課資料係が当たった。

目　　次

1.　休場古墳発掘調査概要…… 1

2.　下畑遺跡昭和63年度発掘調査概要……13

3.　長岡宮跡第205次発掘調査概要 ……17

4.　平安京(左京近衛・西洞院辻)発掘調査概要……31

5.　木津遺跡第6次発掘調査概要……75

挿 図 目 次

1. 休場古墳

第 1 図　周辺主要遺跡分布図…… 1
第 2 図　地形測量図…… 2
第 3 図　横穴式石室上面図及び石室掘形…… 3
第 4 図　横穴式石室実測図…… 4
第 5 図　墳丘土層断面図…… 5
第 6 図　遺物出土状況…… 6
第 7 図　横穴式石室出土遺物実測図(土器)…… 7
第 8 図　横穴式石室出土遺物実測図(鉄製品)…… 8
第 9 図　横穴式石室出土遺物実測図(玉類)…… 8
第 10 図　横穴式石室出土遺物実測図(金環・紡錘車)…… 8
第 11 図　小竪穴式石室実測図…… 9
第 12 図　小竪穴式石室出土遺物実測図…… 9

2. 下畑遺跡

第 13 図　調査地位置図……13
第 14 図　トレンチ配置図……14
第 15 図　トレンチ土層実測図……15

3. 長岡宮跡第205次

第 16 図　調査地位置図……17
第 17 図　溝ＳＤ20501断面実測図 ……19
第 18 図　遺構実測図……21
第 19 図　溝ＳＤ20501遺構実測図 ……21
第 20 図　建物ＳＢ20501遺構実測図 ……21
第 21 図　土坑ＳＫ20503実測図 ……23
第 22 図　出土遺物実測図(1) ……25
第 23 図　出土遺物実測図(2) ……26
第 24 図　出土遺物実測図(3) ……27
第 25 図　検出遺構・推定豊楽院比較配置図……29

4. 平安京(左京近衛・西洞院辻)

第 26 図　調査地位置図……31
第 27 図　平安京条坊図……31
第 28 図　トレンチ設定図……32
第 29 図　調査地平面図……34
第 30 図　調査地平面図(北西部)……35
第 31 図　土層断面図……37
第 32 図　道路(ＳＦ11)土層断面図……38
第 33 図　土坑ＳＫ134実測図……39
第 34 図　ＳＸ104・ＳＸ106遺構実測図(瓦溜り)……40
第 35 図　ＳＸ104・ＳＸ106遺構実測図(下層)……40
第 36 図　井戸ＳＥ147実測図……41
第 37 図　土坑ＳＫ22実測図……42
第 38 図　土壁ＳＸ36(木舞)実測図……43
第 39 図　調査地北部平面図……44
第 40 図　重圏文軒丸瓦実測図……45
第 41 図　ＳＤ135・ＳＤ142・包含層出土遺物実測図……46
第 42 図　ＳＤ99出土遺物実測図……47
第 43 図　ＳＫ22・ＳＤ96出土遺物実測図……48
第 44 図　ＳＤ96・ＳＤ108出土遺物実測図……49
第 45 図　ＳＫ58出土遺物実測図(1)……50
第 46 図　ＳＫ58出土遺物実測図(2)……51
第 47 図　包含層・ＳＸ104・ＳＸ105出土遺物実測図……52
第 48 図　泥面子・貨幣拓本図……53
第 49 図　金箔方形飾り瓦実測図……55
第 50 図　玩具・ミニチュア製品実測図……56
第 51 図　西洞院大路の断面概念図……58
第 52 図　主要遺構変遷図(1)……59
第 53 図　主要遺構変遷図(2)……60
第 54 図　洛中洛外図にみる便所……62
第 55 図　京都市調査地との合成図……63
第 56 図　銭貨分布図……66

5. 木津遺跡

第 57 図　調査地位置図……75
第 58 図　調査地土層断面実測図……77
第 59 図　検出遺構平面図……78
第 60 図　ＳＸ14・ＳＸ38実測図……79
第 61 図　出土遺物実測図(1) ……81
第 62 図　出土遺物実測図(2) ……82

付 表 目 次

4. 平安京(左京近衛・西洞院辻)

付 表 1　銭貨一覧表……57
付 表 2　ＳＸ104・ＳＸ106出土瓦点数表……64
付 表 3　遺物観察表……67

5. 木津遺跡

付 表 4　調査次数一覧表……76

図 版 目 次

1. 休場古墳

図版第１　(1)調査前墳丘全景(西から)　(2)調査後墳丘全景(南から)
(3)横穴式石室天井石及び墳丘上部(西から)
(4)横穴式石室及び墳丘築成状況(南から)

図版第２　(1)横穴式石室右側壁　(2)横穴式石室奥壁
(3)横穴式石室左側壁　(4)遺物出土状況(1)

図版第３　(1)遺物出土状況(2)　(2)遺物出土状況(3)(紡錘車)
(3)小竪穴式石室検出状況(東から)
(4)小竪穴式石室天井石除去後(東から)

図版第４　出土遺物(1)(土器)

図版第５　出土遺物(2)(土器)

図版第６　(1)出土遺物(3)(鉄製品)　(2)出土遺物(4)(装身具・紡錘車)

2. 下畑遺跡

図版第７　(1)トレンチ全景(西から)　(2)北東壁断面

3. 長岡宮跡第205次

図版第８　(1)調査前風景(東北から)　(2)トレンチ全景(南東から)

図版第９　(1)溝ＳＤ20501(東から)　(2)建物跡ＳＢ20501(南から)

図版第10　(1)土坑ＳＫ20503遺物出土状況(南から)　(2)井戸ＳＥ20504(東から)

図版第11　(1)溝ＳＤ20501断面(西から)　(2)井戸ＳＥ20505(西から)

図版第12　出土遺物(1)

図版第13　出土遺物(2)

図版第14　出土遺物(3)

4. 平安京跡(左京近衛・西洞院辻)

図版第15　(1)京都府庁旧館(北西から)　(2)調査前風景(北から)

図版第16　(1)江戸時代の状況(北から)　(2)幕末の倉跡？(西から)

図版第17　(1)江戸時代の北東部(南から)　(2)漆喰の設備(北から)
(3)漆喰溝の部分(北から)

図版第18　(1)漆喰溝の断面ａ(東から)　(2)漆喰溝の断面ｂ(北から)
(3)漆喰溝の断面ｃ(東から)　(4)漆喰溝の断面ｄ(東から)

図版第19　(1)江戸時代の漆喰排水溝(南から)　(2)江戸時代の土壁・ＳＨ36(西から)
図版第20　(1)近衛大路北側溝の断面(南東から)
(2)瓦溜りＳＨ36下層の礎石(西から)
図版第21　(1)室町時代以前の状況(北から)　(2)京都府庁新館と調査地
図版第22　(1)近衛大路南側溝ＳＤ135(西から)
(2)室町時代以前の西洞院大路(南から)
図版第23　(1)西洞院大路西側溝ＳＤ99(南西から)　(2)同上断面(北から)
図版第24　(1)近衛大路南側溝ＳＤ108(東から)　(2)同上断面(東から)
図版第25　(1)西洞院大路西側溝ＳＤ99(北から)
(2)近衛大路南側溝ＳＤ108・ＳＤ135(西から)
図版第26　(1)土坑ＳＫ134(東から)　(2)同上(南から)
図版第27　(1)土坑ＳＫ149掘削状況(西から)　(2)同上完掘(西から)
図版第28　(1)室町時代以前の北部調査地(西から)
(2)ＳＡ119検出状況(南から)
図版第29　(1)柱穴ＳＫ121(南から)　(2)柵ＳＡ119(北から)
(3)井戸ＳＥ147検出状況(東から)　(4)祭祀跡ＳＸ154検出状況(東から)
図版第30　出土遺物(1)
図版第31　出土遺物(2)
図版第32　出土遺物(3)

5.　木津遺跡

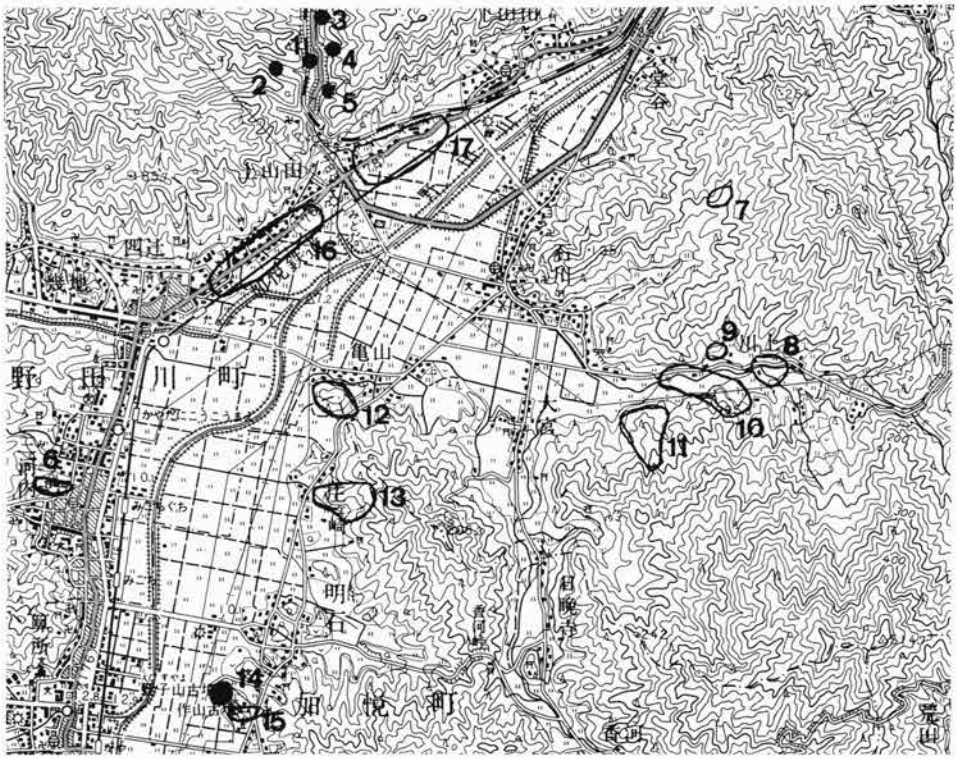
図版第33　(1)調査地全景(西南から)拡張前　(2)調査地東半全景(東南から)
図版第34　(1)調査地西半全景(西南から)　(2)４Ｇ区検出地震跡(南から)
図版第35　(1)ＳＸ14検出面遺物出土状況　(2)ＳＸ14・38全景
図版第36　(1)断ち割りトレンチ全景(南から)　(2)ＳＢ02基礎跡上層面

1. 休場古墳発掘調査概要

1. はじめに

休場古墳は，京都府与謝郡野田川町字上山田小字休場に所在する。野田川町は，大江山連峰に源を発し，北流して特別名勝天橋立の内海阿蘇海に注ぐ，野田川の中流域に位置する。現在の丹波地方から大江山の与謝峠を越えると，眼下に野田川の形成した谷平野，通称加悦谷が展開している。その南半が加悦町であり，北半が野田川町である。

今回の発掘調査は，京都府土木建築部の依頼を受けて，一般国道312号の道路新設改良事業に先立ち，実施したものである。本調査にかかる経費は，京都府土木建築部が負担した。



第1図　周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

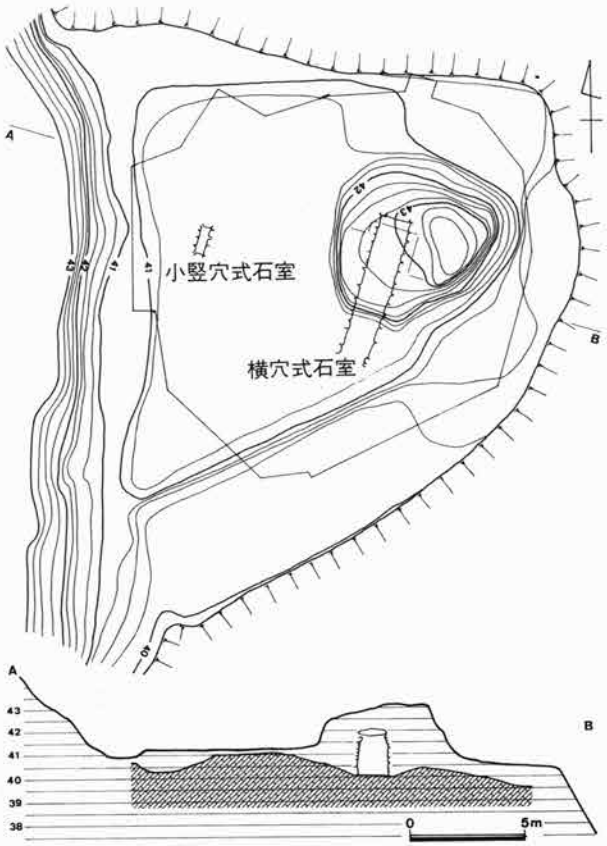
1. 休場古墳　2. 新道古墳　3. 柳谷古墳　4. チコラ古墳　5. シボラ古墳　6. 倭文神社古墳　7. 鞭谷古墳　8. 高浪古墳群　9. タベカニ古墳群　10. ヤンダ古墳群　11. 隠石古墳群　12. 玉峠古墳群　13. 入谷古墳群　14. 蛭子山古墳群　15. 作り山古墳群　16. 古宮遺跡(弥～古)　17. 山田黒田遺跡(弥～室町)

現地調査は，昭和63年７月18日から同年９月14日にわたり，調査第２課調査第１係係長辻本和美，同調査員森　　正が担当して行った。調査にあたっては京都府教育委員会・野田川町教育委員会をはじめ関係諸機関の協力を得た。また，作業員・調査補助員・整理員として地元有志の方々，学生諸氏に参加協力を願った。(注1) 記して謝意を述べたい。なお，本概要執筆は，森が行った。

2.　位置と周辺の遺跡（第１図）

本古墳は，野田川左岸の野田川町から大宮町へ通ずる，通称水戸谷峠の狭い谷筋で，沖積地からはやや奥まったところにある。この谷筋の両側は，急峻な丘陵に囲まれており，その中でも谷筋にやや突き出た，急な尾根の先端部に立地している。

加悦谷は，丹後半島でも特に著名な古墳が多く分布する地域である。前・中期においては蛭子山古墳，作り山古墳群など，そのほとんどが野田川右岸の加悦町域に集中する傾向を示す。後期になると，古墳の分布は，大きく広がり野田川町でも各所で，横穴式石室を埋葬施設とする古墳が確認されている。なかでも，野田川右岸の石川上流域においては，ヤンダ古墳群，高浪古墳群など約50基が分布しており，特に集中する傾向にある。高浪１号墳は近年調査が行われ，奥壁に石棚を有する構造の石室が確認されている。(注2) また，水戸谷には本古墳のほか，柳谷古墳・チコラ古墳・シボラ古墳・新道古墳といった横穴式石室墳がいくつか確認されているが，いずれも単独で立地しており，谷筋にまばらに分布している。

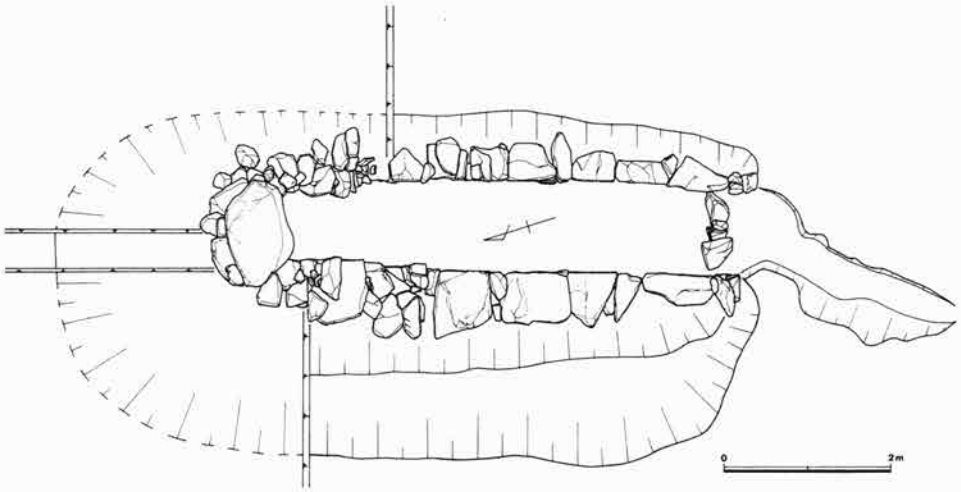


第２図　地形測量図

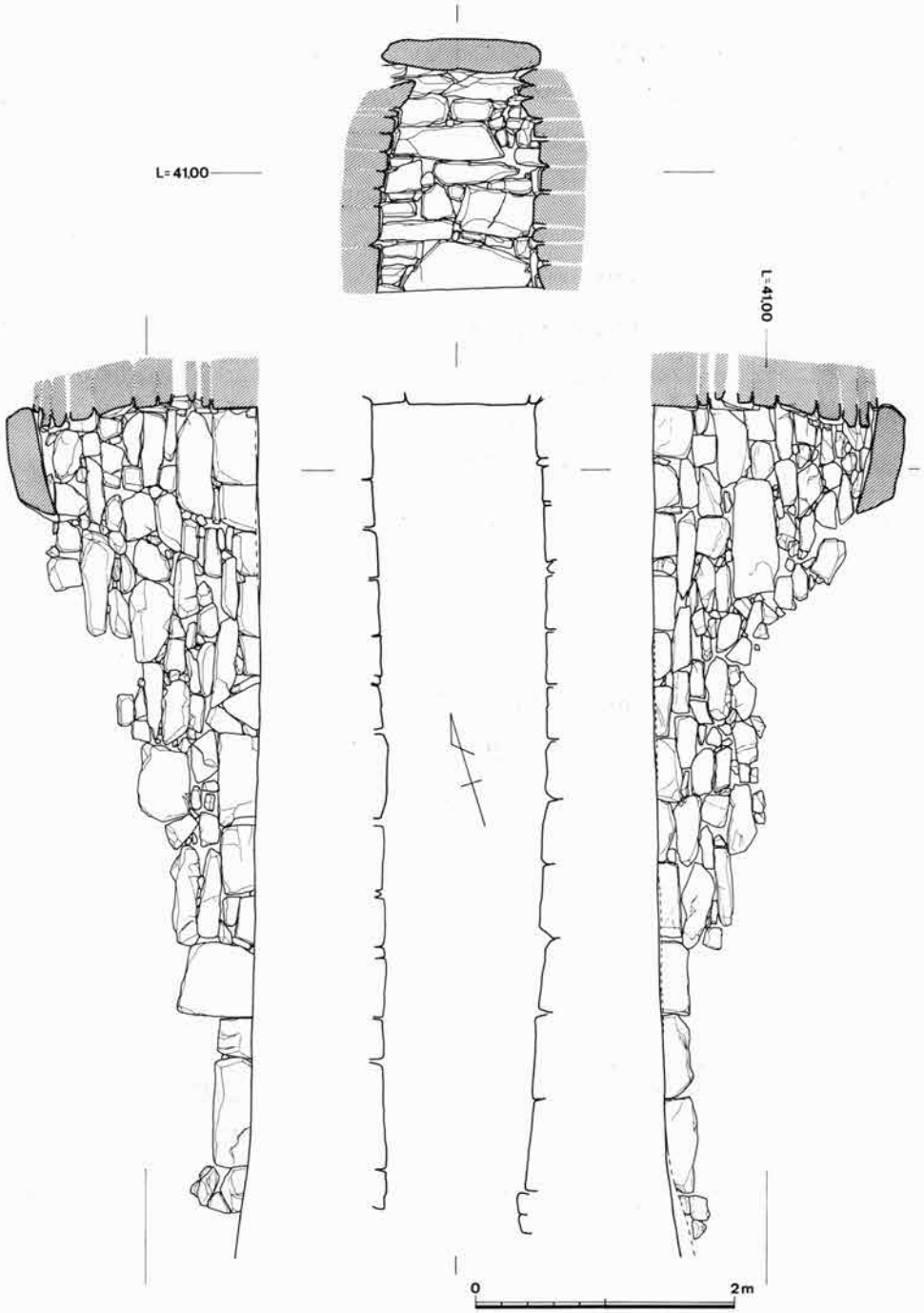
3. 調査の成果

調査開始前，尾根の先端部にやや平坦な部分があり，そこに径約9m・高さ2m程度の不正円形の高まりが認められた。この高まりは，小規模ながらも古墳の墳丘と予想された。調査の結果，埋葬施設として横穴式石室，及び小竪穴式石室をそれぞれ1基ずつ検出した。

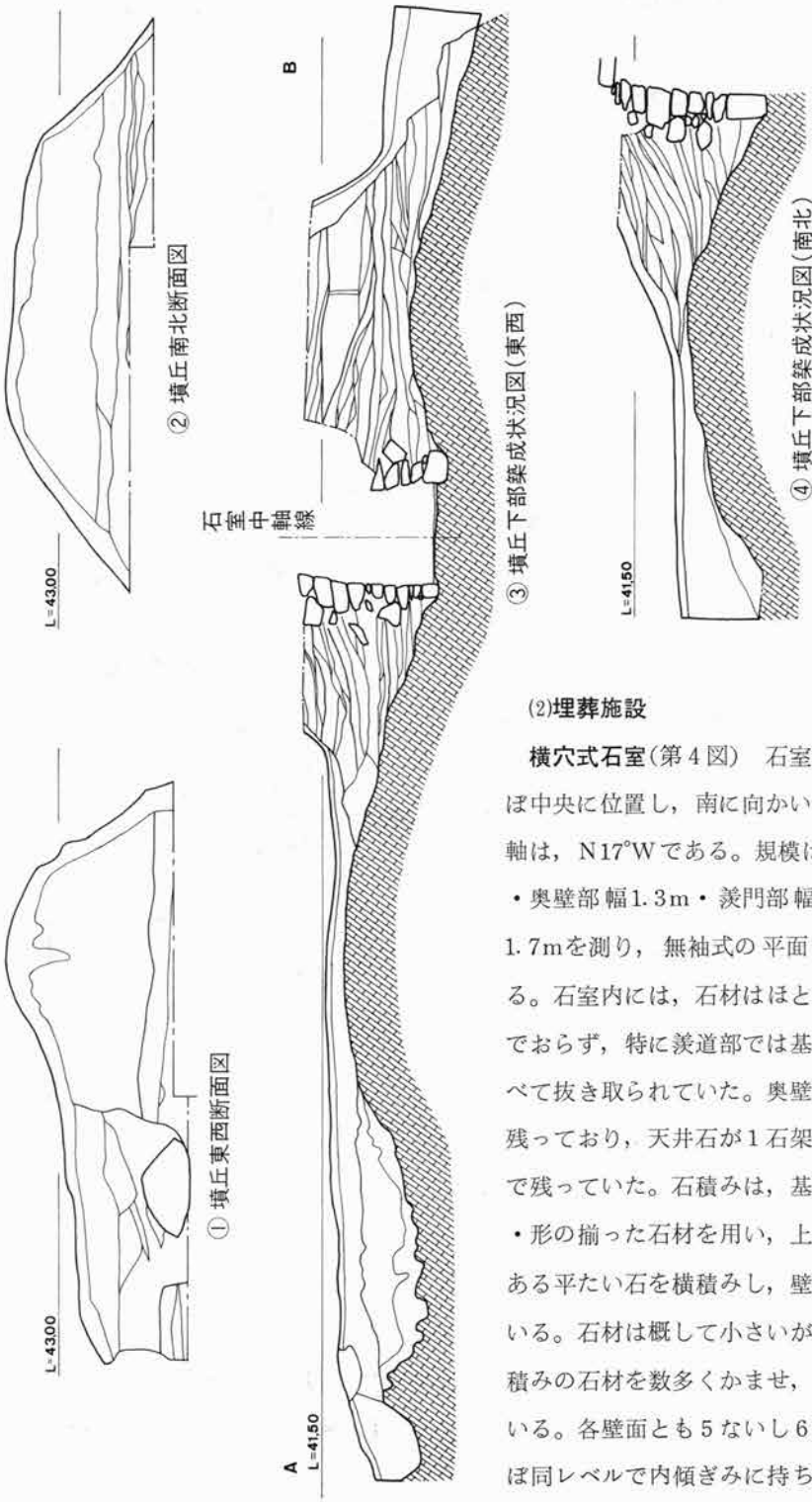
(1)**墳丘**(第2図) 当初確認していた高まりは，予想されたように墳丘封土の一部であった。墳丘の南から西側では植林や開墾などによって大きく削平を受けており，特に西側では幅約7mにわたり平坦な地形となっていた。しかし，西側では尾根高位側に墳丘を馬蹄形状に囲む墳丘造成時の溝を検出した。この溝は，検出面での幅約3m・深さ0.7mを測るが南北側では消滅する。これによって西側の墳丘基底部は判明したが，この基底部と石室中軸線の距離を半径として東側に折り返すと，直径17mの円墳と考えられる。ただ，東側では現状は崖面となっているが，これは盛土土層断面から見てもすでに流失したと判断できる。封土は，残存墳丘部の西約半分は石取りのためいったん掘られているが，これを免れた部分ではかなり上部まで残っている。断面を見ると，石室天井石の高さくらいまでは，石室の構築と平行して厚さ5cm前後のよくしまった土層(面的な追及はできなかった)を互層にして積むが，天井石の架構と相前後してほぼ全体に，同質の暗灰褐色土を覆う。これより上部は，風化花崗岩(地山土)を多く含む暗褐色土を盛り，墳丘を形成する。墳丘高は，溝の底から残存墳丘部の最高部までのレベル差が約3mであり，ほぼもとの高さを示すものと考えられる。



第3図　横穴式石室上面図及び石室掘形



第4図　横穴式石室実測図

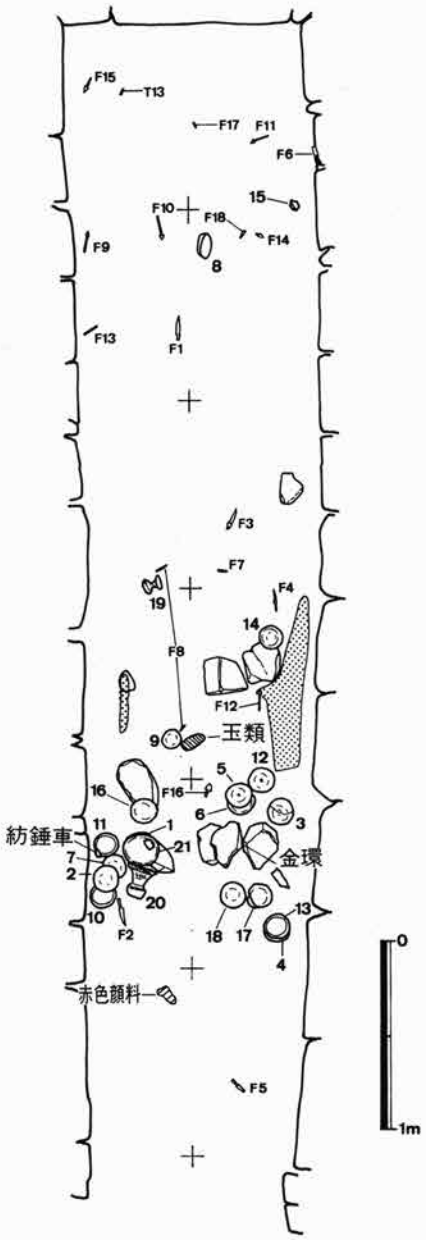


第5図　墳丘土層断面図

(2)**埋葬施設**

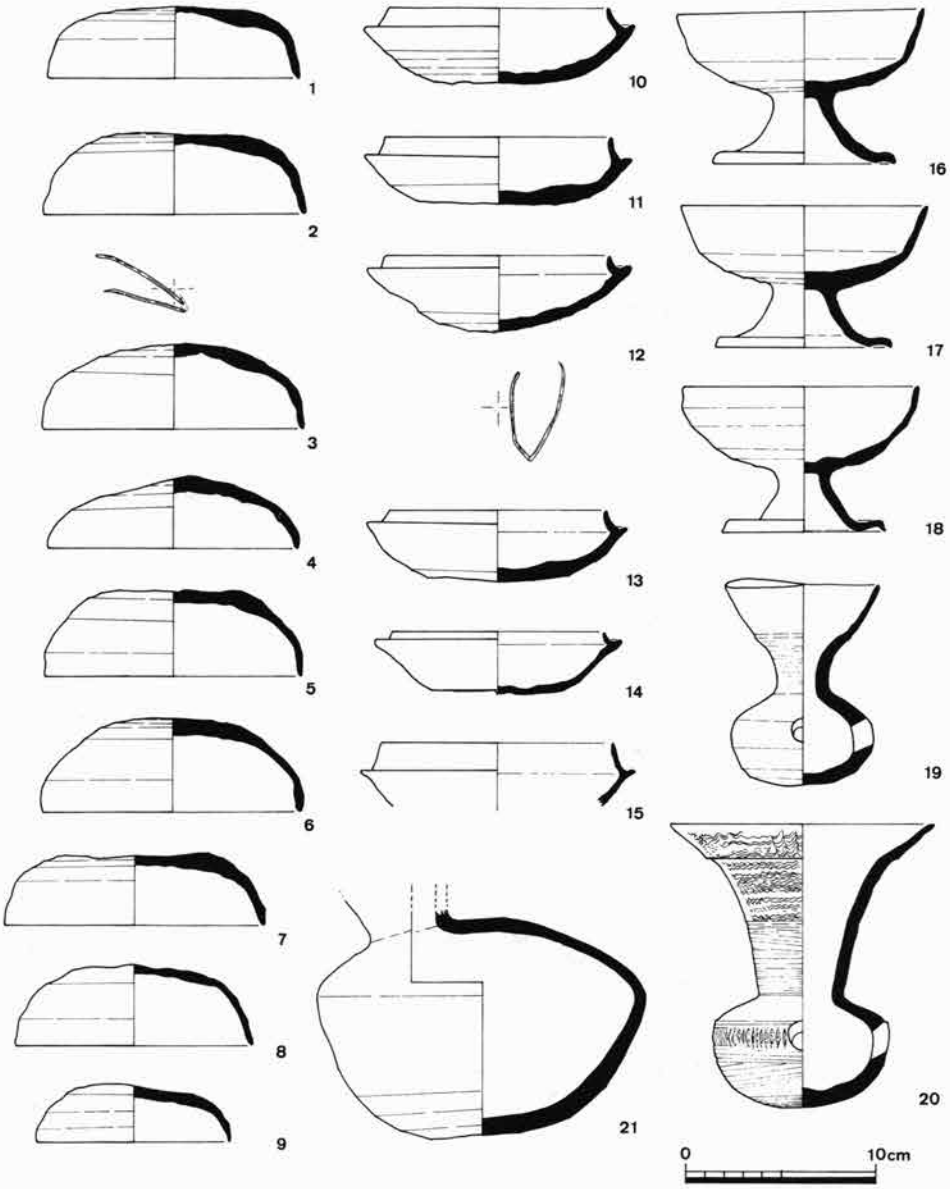
横穴式石室(第4図)　石室は，墳丘のほぼ中央に位置し，南に向かい開口する。主軸は，N17°Wである。規模は，全長6.5m・奥壁部幅1.3m・羨門部幅1.0m・高さ1.7mを測り，無袖式の平面プランを呈する。石室内には，石材はほとんど落ちこんでおらず，特に羨道部では基底石以外はすべて抜き取られていた。奥壁部では良好に残っており，天井石が1石架構された状態で残っていた。石積みは，基底石に大きさ・形の揃った石材を用い，上部には奥行のある平たい石を横積みし，壁面を構成している。石材は概して小さいが，裏側に控え積みの石材を数多くかませ，強度を保っている。各壁面とも5ないし6段目から，ほぼ同レベルで内傾ぎみに持ち送りを行う。

奥壁に架かる天井石は，幅1.2m程度と大きくない。また奥壁最上段の石材は，2石で構成されるがそれぞれ側壁と奥壁の両方にかませている。床面は，ほぼ水平であるが羨門部付近では傾斜をつけ高くなっており，玄室床面とのレベル差は約20cmとなる。掘形は，あまり深くはなく，石室を構築する平坦面を確保する程度に地山面を削り込んでいる。また羨門の前では，長さ2.4mにわたって南にのびる浅い溝を検出した。これは当初排水溝かとも考えたが，先述したように石室内床面がスロープ状に高くなり排水溝としての機能は果たさない。墓道の底の部分が削平を免れ，残ったものと判断できる。ここからは，土師器の細片が若干出土している。



第6図　遺物出土状況

(3)**遺物出土状況**(第6図)　遺物は，土器についてはほとんどが開口部側から出土した。これらは床面上から出土したもの(Ⅰ群―1・2・3・5・6・7・10・11・12・20)と床面からは約10cm上層から出土したもの(Ⅱ群―4・9・13・14・16・17・18・19・21)に分けられる。Ⅰ群では杯身10・11が正位で，杯蓋2・7が逆位でおかれ，それぞれ中には赤色顔料が入っていた。また，これらより開口部よりで一握りほどの赤色顔料を床面上で検出した。紡錘車は，杯身11に乗るようにしてあった。Ⅰ群の土器は初期埋葬に伴い，追葬によって片づけられたと考えられる。Ⅱ群では，高杯16～18がいずれも正位で，平瓶21も同じく正位であった。金環は，棺台と思われる石の上に乗っているが，1点のみである。その他，奥壁側では杯身15が石室内では唯一破片であり，床面からは遊離していた。鉄製品は，いずれも玄室内に散らばっており床面からも遊離しレベルも一定しない。さらに，石室内を掘り下げていく途中では，骨片や木質片



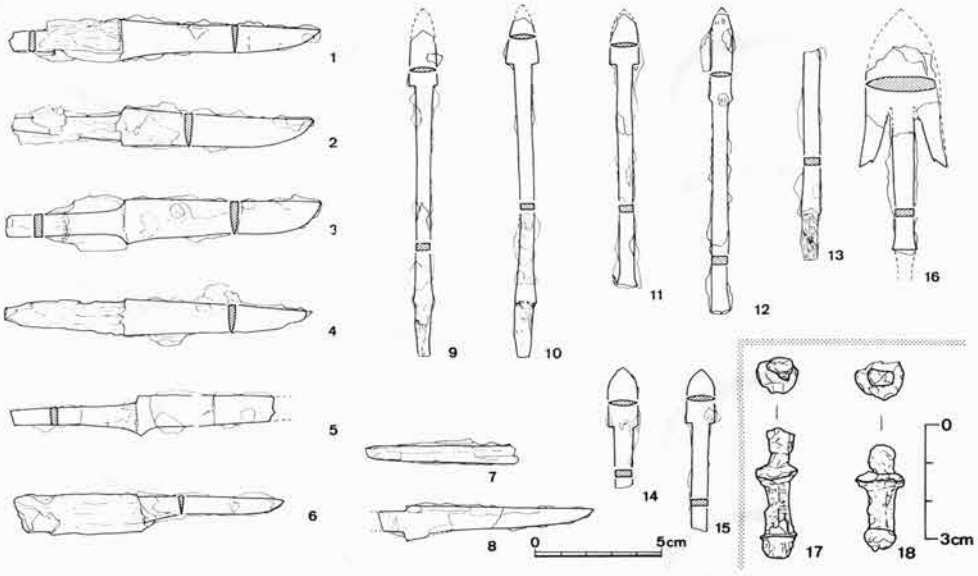
第7図　横穴式石室出土遺物実測図(土器)

が数多く散らばっており，木質については比較的残存状態のよい部分を図示した(アミ目部分)。鉄釘の出土はないが，木棺に伴うものと見てよかろう。

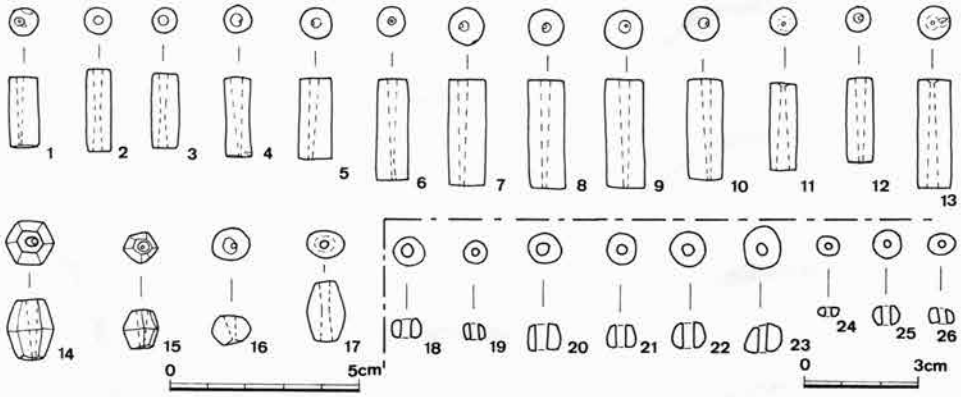
(4)**出土遺物**　石室内から出土した遺物は下記の通りである。

土　器――須恵器(21点)

鉄製品――刀　子(8点)，鉄鏃(約10点)，留め金具(2点)



第8図　横穴式石室出土遺物実測図（鉄製品）

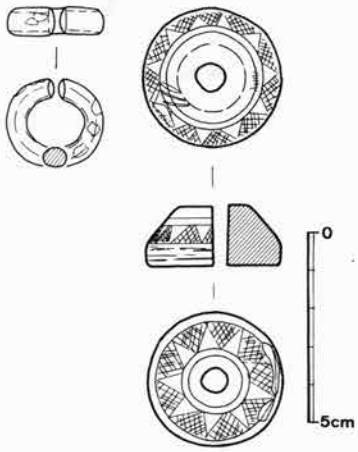


第9図　横穴式石室出土遺物実測図（玉類）

装身具――玉類（碧玉製管玉13点・水晶製切子玉2点・水晶製丸玉1点・埋木製棗玉1点・ガラス小玉29点）

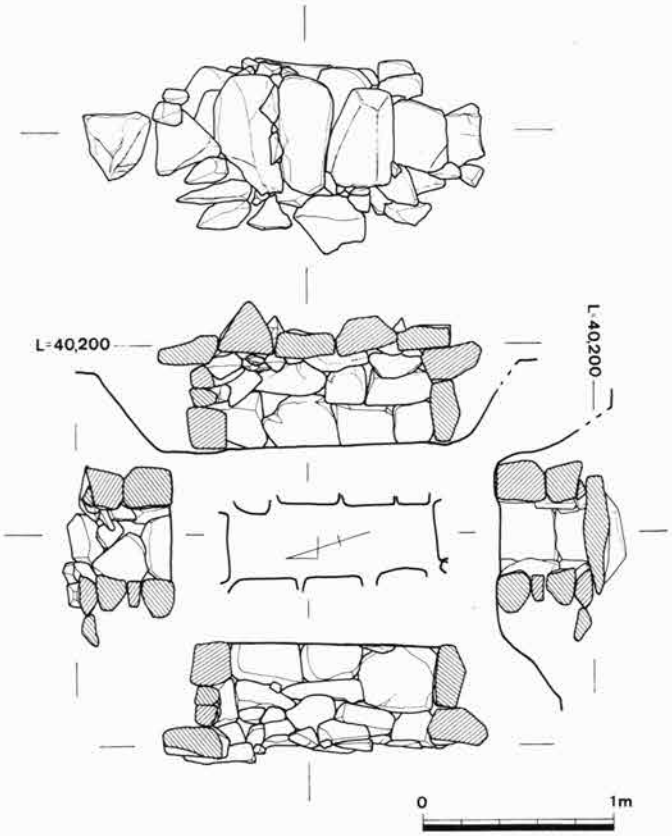
その他――滑石製紡錘車1点

この他，墳丘攪乱土および溝内埋土から土師器甕片，須恵器片（蓋杯・横瓶），縄文土器片[注3]が出土している。前2者については，石室内に副葬されているものと同時期であり，追葬あるいは石材の抜き取りの際にかきだされたと考えられる。



第10図　横穴式石室出土遺物実測図（金環・紡錘車）

a．土器（第7図）　石室内から出土した須恵器の



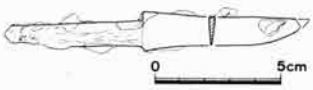
第11図　小竪穴式石室実測図

器種と個体数は，杯蓋9個体・杯身6個体・高杯3個体・甕2個体・平瓶1個体である。これらの須恵器は，前述した出土状況と対応するように大きく2グループに分けられ，前述Ⅰ群に古相を認めることができる。

b．鉄製品(第8図)

刀子　8点のうち1と6の2点は，鹿角装である。その他も，茎部分にはおおむね木質が残っている。7は，茎の破片である。

鉄鏃　8点を図化した。16以外はすべて尖根式の鏃である。篦被部は8cm前後と長く，いわゆる長頸鏃である。茎部には，矢柄材の竹が残存するものもある。16は平根式の鏃であり，鏃身部に重抉りを有する。鏃身断面は，両丸造りである。



第12図　小竪穴式石室出土遺物実測図

留め金具　2点出土しており，錆が進み細部には不明な点があるが，両方とも同様の形態である。幅1.4cmの木質を薄い円盤状の金具で挟み，棒状のものを貫通させる。頭の形状は，錆のためよくわからない。

c．玉類(第9図)　管玉1～12，水晶切子玉14・15，水晶丸玉16，埋木棗玉17，ガラス玉18～21は，一連につながれた状態で出土している。管玉は長さ1.9～2.8cmにおさまり，いずれも濃緑色を呈する。埋木棗玉は，炭化が進み黒色を呈するが木質が観察できる。同様の例は，府下では綾部市塚廻り3号墳(注4)・亀岡市医王谷3号墳(注5)・長岡京市長法寺七ツ塚3号墳(注6)で確認されている。

d．滑石製紡錘車(第10図)　頂面・底面は平坦であり，側面には稜を持ち上部と下部が明瞭に区分される断面截頭円錐形を呈する。側面および底面には，鋸歯文と格子目文を組

み合わせた文様が線刻されている。法量は，頂部径18mm・底部径36mm・高さ16mm・孔径8mmを測る。

⑤**小竪穴式石室**(第11・12図)　横穴式石室の西約8mの地点にあり，主軸をほぼ平行にして築かれている。墓壙は，墳丘を形成する溝内の地山面から掘り込まれており，長辺2.2m・短辺1.4mの隅丸長方形を呈する。

石室の構造は，基底石を縦位に据えた後，上段の石を横積みする。各壁2段を原則とし，部位によっては3ないし4段をほぼ垂直に積み上げ，4石の天井石を架構している。規模は，床面で長辺1.1m・短辺0.4m・高さ0.5mである。石材は，横穴式石室と同様，花崗岩の自然石を用いている。副葬品として，鉄製刀子が1点東壁沿いで床面から約5cm浮いた状態で出土している。

4. ま と め

以上，今回の調査成果を列挙しまとめとする。

本古墳は，直径約17m・高さ3mを測る円墳であり，横穴式石室及び墳丘裾部に位置する小竪穴式石室を埋葬施設とする。

横穴式石室は，比較的よく残っており，南に開口する無袖式の平面プランを呈する。一部石材の抜き取りによって攪乱を受けていたが，石室内床面はほぼ旧状をとどめていた。遺物の出土状況によって，1～2回の埋葬が行われた後，石室内に土を敷き整地し，さらに追葬を行ったと考えられる。

石室内から出土した須恵器の中でⅠ群としたものはさらに細分でき，杯蓋1・2，杯身10・11が最も古い様相を示す。これらは，高浪古墳出土須恵器の最も古いものと併行するものと思われる(注7)。本古墳出土須恵器を陶邑古窯址群の編年に対応させると，Ⅱ型式Ⅲ段階(TK43型式)からⅡ型式Ⅵ段階(TK217型式)に併行するものと考えられる(注8)。以上の対応関係から本古墳は，6世紀後半から末にかけての時期に築造され7世紀前半までに数次にわたり追葬が行われたものと考えられる。

小竪穴式石室は，横穴式石室と同一墳丘内にあり，その被葬者達との密接な関係がうかがわれる。しかし，横穴式石室への追葬が行われてゆくなかで，本例のような周辺埋葬施設が築造された契機を何に求め得るのか，特に注意される事例である。築造時期については，出土遺物に乏しく即断し難いが，墳丘造成のための溝内の地山面から墓壙が掘り込まれている点，石室主軸が横穴式石室のそれと平行する点等からみて，横穴式石室築造後に築かれたものと判断しておく。　(森　正)

注1　調査に参加，及び協力をしていただいたのは，以下の方々である(敬称略)。
調査補助員　大崎康文・高野陽子・大嶋和彦・斉藤　優・一野瀬正美・板倉礼子
作　業　員　平　清志・平　正巳・能勢　昇・時武與一・奥仲多喜男・小長谷克巳・大泉健作
また，調査の実施及び本書の作成にあたり，下記の方々から御教示・御協力を賜った(敬称略)。
安藤信策・岡田晃治・佐藤晃一・浪江庸二・藤本昌平・安田　章・家根祥多・吉田恵二・和田晴吾(五十音順)

注2　久保哲正他『高浪古墳発掘調査概報』(京都府 野田川町 文化財調査報告 第1集　野田川町教育委員会)　1985

注3　縄文土器としては，楕円形の押型文を施す小片が3点出土している。

注4　中村孝行「塚廻り古墳群」(『綾部市文化財調査報告』第7集　綾部市教育委員会)　1980

注5　引原茂治他「医王谷3号墳・医王谷焼窯跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983

注6　山本輝雄「長法寺七ツ塚古墳群」(『長岡京市文化財調査報告書』第21冊　(財)長岡京市埋蔵文化財センター)　1988

注7　注2に同じ

注8　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

2. 下畑遺跡昭和63年度発掘調査概要

1. はじめに

下畑遺跡は，京都府与謝郡野田川町字三河内小字下畑及び字幾地小字角外に所在する。本遺跡は，昭和47年の京都府立加悦谷高等学校の校地拡張の際，初めて調査された。調査は野田川町教育委員会を調査主体として，同高等学校教諭浪江庸二氏の指導のもとに，同高等学校郷土研究部生徒を中心に実施された。(注1) その後，同高等学校の校舎改築に伴い，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターを調査主体として昭和57年，(注2) 同58年，(注3) 同60年(注4)に3度の発掘調査が実施された。昭和58年度調査では，平安時代から鎌倉時代初頭の井戸が検出され，黒色土器椀・漆器椀等が出土した。昭和60年度調査では，弥生時代中期後半の溝2条，埋葬主体1基，鎌倉時代の溝1条などが検出された。

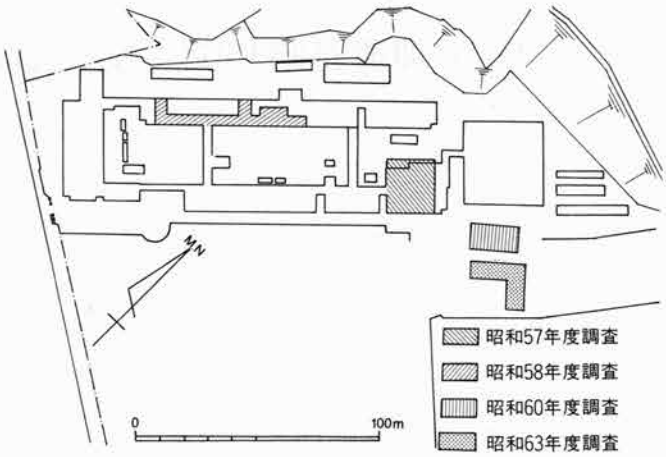
今回の発掘調査は，プール建設に伴う事前の発掘調査である。京都府教育委員会の依頼を受け，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査主体となり，発掘調査を実施した。現地調査は，同センター調査第2課調査第1係係長辻本和美・同調査員中川和哉の両名が担当した。調査は，昭和63年7月25日に着手し，同年8月12日に終了した。調査期間中には，京都府教育委員会・野田川町教育委員会・京都府与謝教育局・京都府立丹後郷土資料館・京都府宮津地方振興局・京都府立加悦谷高等学校・地元有志の方々から多大の御協力を得た。記して謝意を表したい。

2. 調査経過

プールの建設予定地は，昭和60年度発掘調査区に接し，グラウンドとして利用されていた。プール建設予定地内に，旧地形と遺構面の確認のため，第14図に見られるように，幅6mのトレンチを，南北17m・東西21mのL字状を呈するよう

第13図　調査地位置図 (1/50,000)

に設定した。重機によって盛土及び旧水田面を除去した後に，遺構の検出につとめたが，遺構は認められなかった。出土遺物は，すべて破片で，著しく磨滅している。内訳は土師器片４点，須恵器片４点，青磁片１点の合計９点であるが，極めて小片であるため，図化及び器種の限定は不可能である。

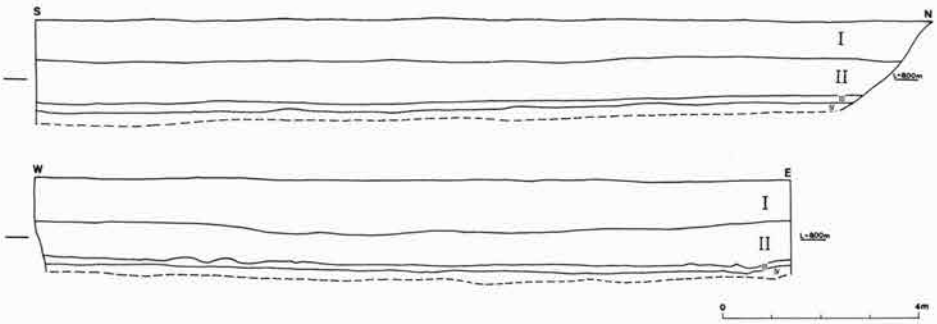


第14図　トレンチ配置図

下層の遺構面の確認のため，Ｌ字状のトレンチの両端に地表面から4m(T.P.5m前後)の深掘りを試みた。断面の観察の結果，地表面から1.8mまでは盛土で，Ⅰ・Ⅱ層がそれにあたる。Ⅰは現在のグラウンド整地層で，Ⅱはそれ以前のグラウンド整地層であり，２回にわたるグラウンド造成がおこなわれたことがわかる。Ⅲ層は水田面及び床土にあたり暗黒灰色シルト層である。Ⅳ層は暗灰色シルト層で，この層の上面で遺構の検出を試みた。Ⅳ層以下は所々にレンズ状の砂層を挟む黒灰色シルト層で葦と思われる植物を多く含んでおり，古くは湿地であったことが想定できる。地表下4mで砂層に変化し，湧水がみられたため安全を期し土層の観察の後埋め戻しを行った。

6. まとめ

今回の調査では，良好な遺物・遺構は検出できなかったが，校地造成前の旧地形の認識ができ今後の調査の見とおしがたつようになった。昭和60年度の調査では，設定したトレンチの西側において弥生時代の溝などの遺構が見られたが，トレンチ東側においては，遺構面が急に下っており遺構は検出されなかった。今回の調査で試みた深掘りによると，２か所の地層は水平であることから，昭和60年度調査で見られた急な落ち込みは，段丘崖である可能性が高い。このことから昭和60年度調査で検出された溝は，段丘崖にそった溝であったことがわかり，その資料的重要性を増したものと考えられる。葦類の検出から段丘崖の下は湿地であることがわかり，昭和57年度の発掘で検出された旧河道は湿地に流入していたものと考えられる。本来の遺構は，湿地の縁辺部及び，校地造成前の丘陵土に広がっていたことが想定できる。昭和60年度調査では弥生時代の遺構のみが検出され，昭和57



第15図　トレンチ土層実測図

年度調査では中世の遺構のみ検出されていることから，弥生時代遺物と中世遺物を包含する層は各地点で見られるが，弥生時代と中世の遺構の分布が異なっている可能性がある。以上これまでの調査成果の一端を示したが，まだ遺跡の中心域が未発掘であるため，今後の調査に期待される。　（中川和哉）

注1　『下畑遺跡発掘調査概報』野田川町教育委員会　1972

注2　竹原一彦「下畑遺跡調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注3　竹原一彦「下畑遺跡調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983

注4　竹原一彦「下畑遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第18冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986

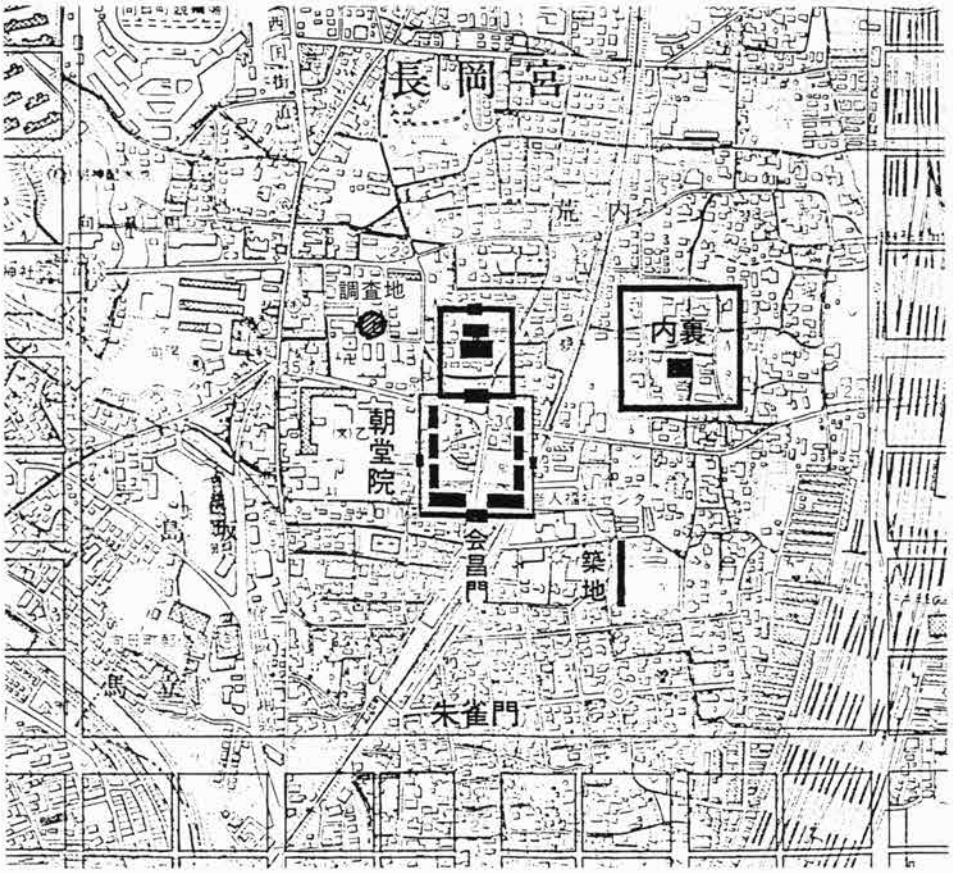
3. 長岡宮跡第205次発掘調査概要

（7AN14Q地区）

1. はじめに

長岡宮跡の推定豊楽院は，向日丘陵の南端にあり，大極殿の西方約130mに位置している。豊楽院の存在については，昭和50年に京都府教育委員会の調査で両面廂をもつ南北棟礎石建物跡が確認され，これを後年，平安宮の復原図に基づき豊楽院の東華堂[注1]に比定された。しかし，昨今，主要堂宇である豊楽殿の未調査，文献史料等[注2]からもその全容はほとんど明らかになっていない。

今回の調査は，京都地方法務局向日出張所の新築工事に伴い，建設省近畿地方建設局の



第16図　調 査 地 位 置 図（1/10,000）

依頼を受けて，昭和63年２月12日から同年６月30日まで実施した。調査地は，向日市鶏冠井町大極殿に所在し，上述の豊楽院の栖霞楼，東面廻廊等が想定された。また，勝山中学校の敷地内には礎石建物跡，掘立柱建物跡が確認されていることから，奈良時代の遺構・遺物の検出も予想された。

調査を担当したのは，当調査研究センター調査第２課調査第３係長小山雅人，調査員竹井治雄である。調査にあたっては，向日市教育委員会をはじめ関係諸機関に協力していただき，現地作業に際しては，調査補助員，整理員(注3)，作業員の方々の御協力があったことを記して感謝したい。

2. 調査経過

調査地の地形は，不等辺四角形を呈し，標高32m前後で西から東へわずかに傾斜している。敷地の東側の道路は磁北に向いており，周辺の宅地開発によって整備されている。また，西側にある南真経寺の境内がＬ字状になっており不自然さが目立つ。調査地の堆積状況は既報告の土層図(注4)によると表土，近世層を含め，地表下0.3mで長岡京期の遺構が検出されている。調査着手にあたって，地形観察から遺跡の残存状況は判断できず，前述の既報告を足がかりにした。トレンチの設定については，旧館(京都地方法務局)の基礎部分をできるだけ避け，予想される遺跡の規模から可能なかぎり広くした。その面積は約750㎡である。

調査は，トレンチの範囲を決めた後，重機による掘削を開始した。一方，基準点測量，水準点測量を行い，続いて地形測量を実施した。掘削は，表土層，旧耕作土，近世層を排除するため地表下0.4mまで下げた。旧館の基礎の掘形は想像以上に大きく，下層遺構を削平していた。

調査地内の基本的な土層は，表土層，旧耕作土，褐灰色粘質土(あるいは暗褐灰色土)，茶褐色粘質土，黄褐色粘質土である。近世の遺構は，褐灰色粘質土あるいは暗褐灰色土を切り込んでいる。長岡京期及びそれ以前のものは茶褐色土を排除した後に検出されたものである。黄褐色粘質土は，部分的に赤褐色土や小礫が混じっており，長岡京期の整地層との指摘もあるが，本調査地では「地山」であると考える。

3. 検出遺構

今回の調査の結果，奈良時代から江戸時代までの遺構を検出した。各々の時代の遺構は前後関係やその特徴から時期差を認めることができる。以下，主要な遺構を時代毎に順をおって記述する。

(1)江戸時代

〔柵列SA20501〕 トレンチ東辺部で9間分の南北の柵列を検出した。柱間寸法は1.0～2.1mと不揃いである。柱掘形は直径0.3～0.4mの円形を呈し，埋土は明黄灰色粘質土で桟瓦が含まれる。北端の柱穴の座標はX＝－117,509.7，Y＝－26,974.4，方位はN0°8′Wである。柱列の中央部で補修しているかもしれない。SX20501の埋土を切り込んでいる。

〔落ち込みSX20501〕 トレンチ東辺で南北方向に直線的にのび，東側へ深さ0.3～0.4m傾斜する段状遺構を確認した。SB20506の南端で東へ屈曲している。埋土は桟瓦，染付茶椀を含む淡褐灰色泥土で近世には，畑地か水田に利用されていた。南北ラインの座標は北端でY＝－26,975.3である。方位はN0°43′Eである。

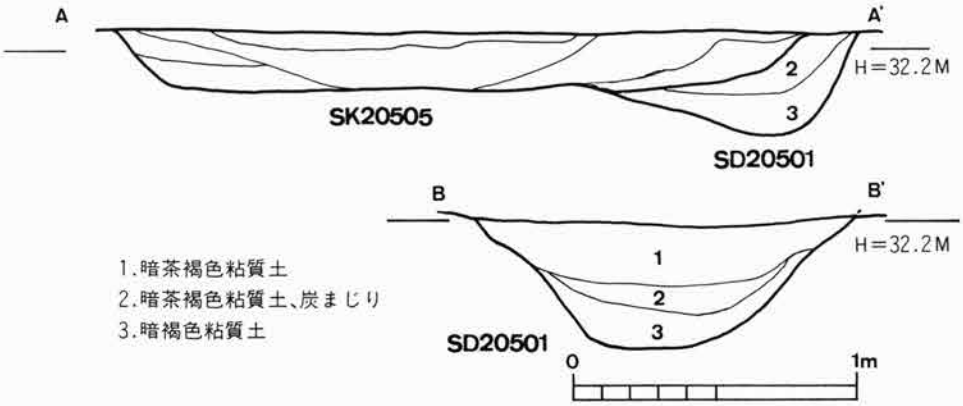
〔土坑SK20506〕 SB20504の北東の柱穴の上層より検出した直径1.0mの円形土坑である。断面は逆台形を呈し，褐灰色土が堆積する。遺物は，近世瓦がある。

〔土坑SK20507〕 掘形は直径1.5m・深さ0.6mの円形を呈し，断面は垂直に立ち上がり底部は平坦である。埋土は茶褐色泥土で，ここから，ひょうそく，すり鉢が出土した。

〔土坑SK20508〕 掘形は直径1.5m・深さ0.6mの円形を呈し，断面は椀状である。埋土は暗茶褐色泥土で染付茶椀を含む。

〔井戸SE20505〕 SB20504の南東から出土した一辺1.6mの方形の掘形をもつ。井戸側は直径0.7mの円形を呈し，桟瓦を積み上げたものである。深さ1.0mを測る。出土遺物は，桟瓦のほか染付茶椀がある。

〔溝SD20502〕 トレンチ中央部の南よりに位置し，幅1.0～1.3mの東西に走る素掘り溝である。断面椀状を呈し，深さは西側で0.3m，SX20501付近では浅くなって途切れてしまう。堆積土は上層で黄灰色粘質土，下層では砂質土である。出土遺物は，瓦・土師皿等がある。溝の中軸線はX＝－117,524.3，方位はN0°12′Eである。



第17図　溝 SD20501 断面実測図

(2)長岡京期

〔溝SD20501〕 トレンチ中央やや北よりに位置し，幅1.0～1.3m・深さ0.3～0.6mの東西に走る素掘り溝である。深さ，幅とも東側で深く広くなり，SX20501の手前で途切れる。断面は「U」字状を呈し，暗褐色粘質土が堆積している。流れを示す痕跡はない。須恵器・土師器片が出土した。溝の中軸線はX＝－117,513.90，方位はN0°45′Wである。溝の東端はY＝－26,974.01である。

〔建物SB20501〕 トレンチ北辺で検出した東西4間の掘立柱建物跡である。柱間寸法は2.37m（8尺）等間で，柱掘形は隅丸方形を呈し，一辺0.4～0.5m，深さ0.3～0.5mを測る。埋土は灰褐色粘質土で，柱痕は直径0.2mほど残す。東端の柱の中心座標はX＝－117,505.8，Y＝－26,983.5，方位はN0°45′Eである。遺物には須恵器・土師器片がある。

〔建物SB20507〕 トレンチ東部で梁間1間，桁行2間の東西棟掘立柱建物跡を検出した。柱間寸法は梁間・桁行とも1.8m（6尺）等間で，掘形は一辺0.3mを測る。北西角の柱穴の座標は，X＝－117,523.3・Y＝－26,965.4，方位はN5°51′Wである。

〔土坑SK20505〕 SD20501の上層から出土した不正形な土坑である。深さは0.2m，断面皿状を呈し，茶褐色粘質土が堆積している。遺物は，須恵器・土師器片があり，SD20501とそれほど時期差は認められない。

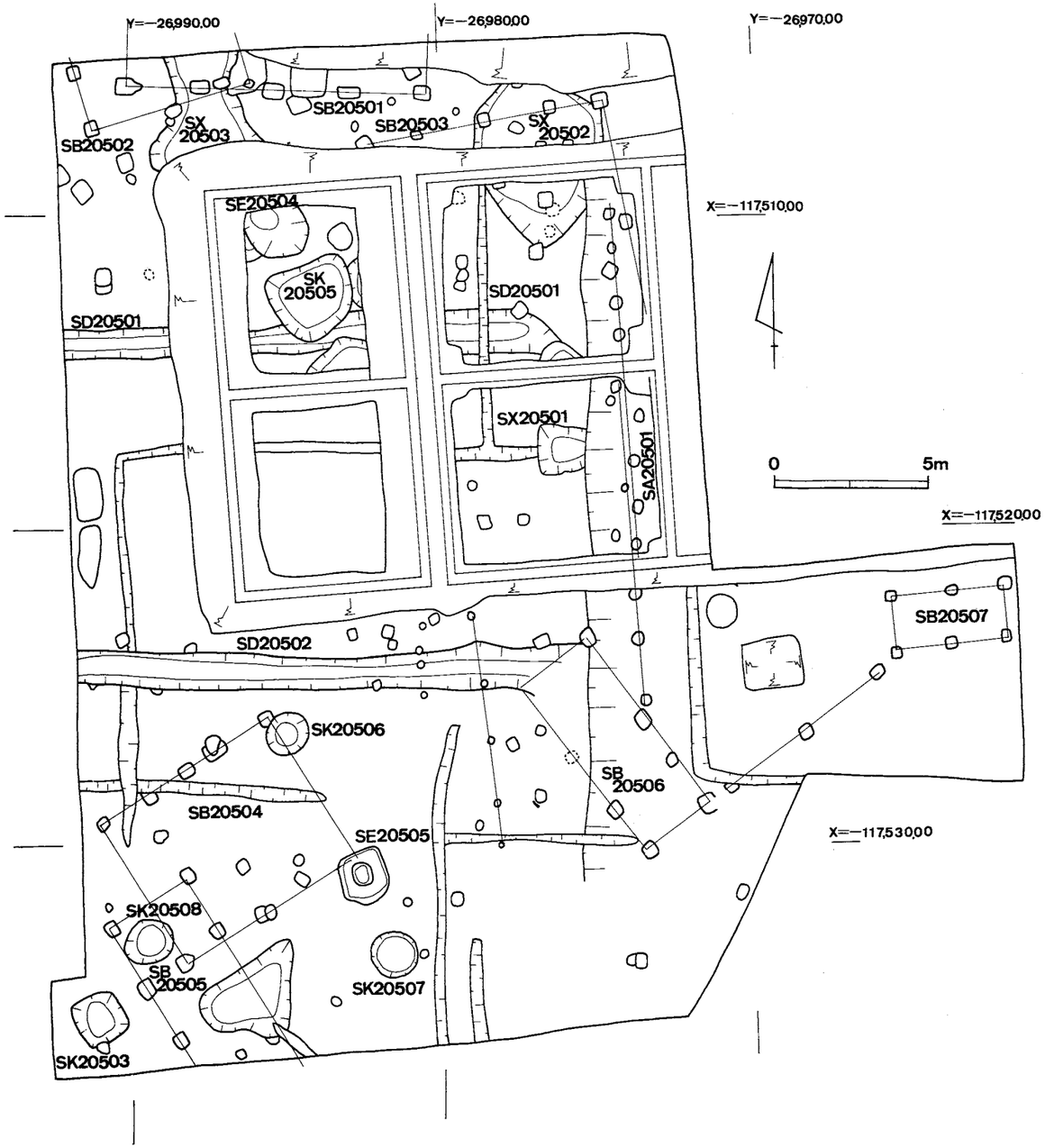
(3)奈良時代

〔井戸SE20504〕 SX20503の上層から出土した直径2mの円形素掘りの井戸である。断面はすり鉢状を呈し，深さ1.2mを測る。底部は砂礫層をくりぬき平坦である。埋土は上層で茶褐色粘砂質土，下層は褐灰色粘土である。出土遺物は，上層に集中し，瓦・土師器・須恵器片等がある。

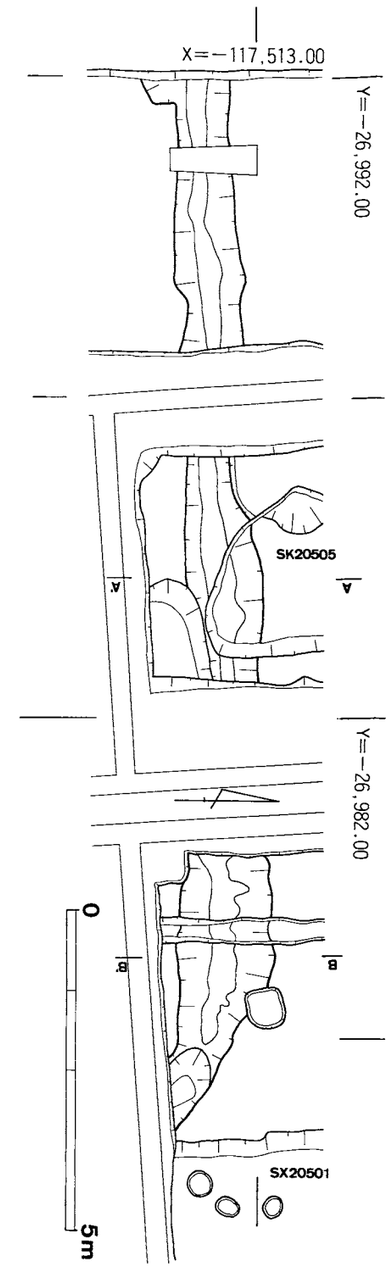
〔建物SB20502〕 トレンチ北西隅で検出した東西2間分，南北1間以上の掘立柱建物跡である。柱間寸法は東西2.7m（9尺），南北1.8m（6尺）等間で，柱掘形は一辺0.4mの隅丸方形を呈する。柱穴の深さは0.4mである。埋土は暗灰褐色粘質土で柱痕は不明である。南西端の柱の座標はX＝－117,506.7，Y＝－26,988.9，方位はN16°26′Wである。

〔建物SB20503〕 トレンチ北東部で東西4間分，南北1間分のL字状の柱列を検出した。掘立柱の柱間寸法は，東西3.6m（12尺），南北3.9m（13尺）等間で，東西の柱列の柱間には，補助的な柱穴がある。柱掘形は一辺0.5mの隅丸方形を呈し，深さは0.3mである。北東角の柱の座標はX＝－117,506.1，Y＝－26,974.4，方位はN10°05′Wである。

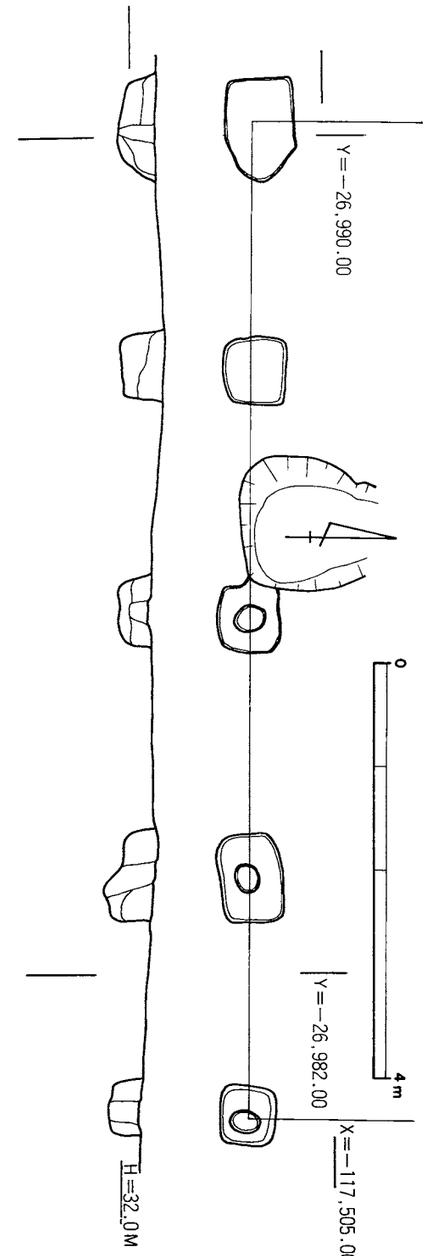
〔建物SB20504〕 トレンチ南西角で梁間2間，桁行4間の東西棟の掘立柱建物跡を検出した。柱間寸法は，梁間2.6m（6尺5寸）・桁行1.8m（6尺）である。棟持柱の柱穴が不明瞭である。北西角の柱穴の座標はX＝－117,529.5，Y＝－26,990.7，方位はN34°22′Wである。



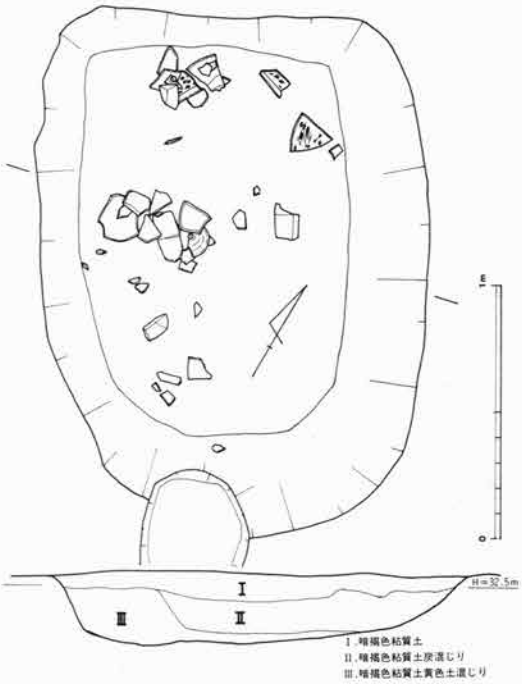
第18図　遺構実測図



第19図　溝ＳＤ20501遺構実測図



第20図　建物ＳＢ20501遺構実測図



第21図　土坑SK20503実測図

〔建物SB20505〕 トレンチ南西角に梁間1間・桁行2間以上の南北棟掘立柱建物跡を検出した。柱間寸法は，梁間3.0m(10尺)・桁行2.1m(7尺)を測る。柱掘形は一辺0.4～0.5mの隅丸方形を呈し，深さ0.4mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。北西隅の柱穴の座標は，X＝－117,532.5・Y＝－26,990.9，方位はN31°54′Nである。

〔建物SB20506〕 トレンチ南東部で梁間1間・桁行4間の南北棟掘立柱建物跡を検出した。柱間寸法は，梁間2.4m(8尺)・桁行1.6m(5尺5寸)を測る。柱掘形は，一辺0.5～0.6mの隅丸方形を呈し，埋土は暗褐色粘質土である。北東角の柱穴は，X＝－117,23.3，Y＝－26,975.3，方位はN36°31′Wである。

〔土坑SK20503〕 SB20505の西側1.0mに位置し，建物の長軸と平行する。掘形は隅丸長方形を呈し，長辺1.8m・短辺1.5m・深さ0.2mを測る。断面は皿状で，主に暗褐色粘質土が堆積する。出土遺物は，土師質の杯・甕，須恵質の杯・蓋・甕・円面硯等があり，飛鳥時代の一括遺物として注目できる。

〔土坑SX20502〕 SB20503の下層から検出した不定形な土坑である。深さは0.2mと浅く，暗褐色粘質土が均一に堆積している。

〔土坑SX20503〕 SB20501の下層から検出した，乱れた形の土坑である。深さは0.15m，断面は皿状を呈し，褐灰色粘質土が堆積している。溝であるかもしれない。

4. 出土遺物

遺物には瓦類，土器類等があり，これらは土坑SK20503をはじめ各遺構毎に少量ではあるが出土している。土器類が大半を占め，円面硯，ひょうそく等のめずらしい遺物もある。以下，遺物を主要な遺構，層位ごとに記述するが，時期については順不同である。

土坑SK20503(第22図1～26)

1～26の遺物はすべて須恵器である。土師器類も出土したが実測可能なものがなかった。

また，須恵器杯身については，SK20503から出土した杯底部破片を詳細に観察したが全く高台を見い出すことができず，従ってすべて高台の付かない平底であると考えた。

1～9は須恵器蓋である。2～5は天井部中央に形の整った宝珠形のつまみが付き，口縁部内面にかえりをもつ。口径は13.4～14.4cm，1は16.0cmとやや大きい。器高は3.2cm前後である。1・6～9は須恵器杯蓋である。頂部にヘラ削りを施し，天井部中央に宝珠形のつまみが付き，口縁端部が下方に屈曲する。口径は15.2～15.5cm，6は19.2cmと大きい。天井部外面をていねいに仕上げており，自然釉が付着する。

10～24は須恵器杯身である。10・11・18～20は口径10cm弱の小型の杯身である。底部外面はヘラ削り後，ナデ調整で仕上げる。12・14は口径12cm前後で口縁部が外反ぎみに斜上方にのびる。15・17は口径14～16cmで，体部は垂直ぎみに外反しながら斜上方にのびる。色調は青灰色で固くしまる。22～24は，口径13cm前後で体部は低く斜上方に外反しながらのび，器壁は厚いため皿状に見える。

25は須恵質の圏脚円面硯である。硯部と丸い台部とを連続した圏足硯である。陸部と海部は内堤を設けていないが明瞭に区別できる。硯部の外端をめぐらす突帯は1条で断面三角形を呈する。圏足には長方形の透し孔をあけ，脚には文様を施さない。陸部には使用痕はあるが墨痕がほとんどない。

26は，須恵器甕で口径42cmを測る。球形の体部は外面にはタタキメの上に横方向のハケメ調整されている。口縁端部は平坦面をもち，内側に小さく肥厚する。

溝SD20501（第22図27～31）

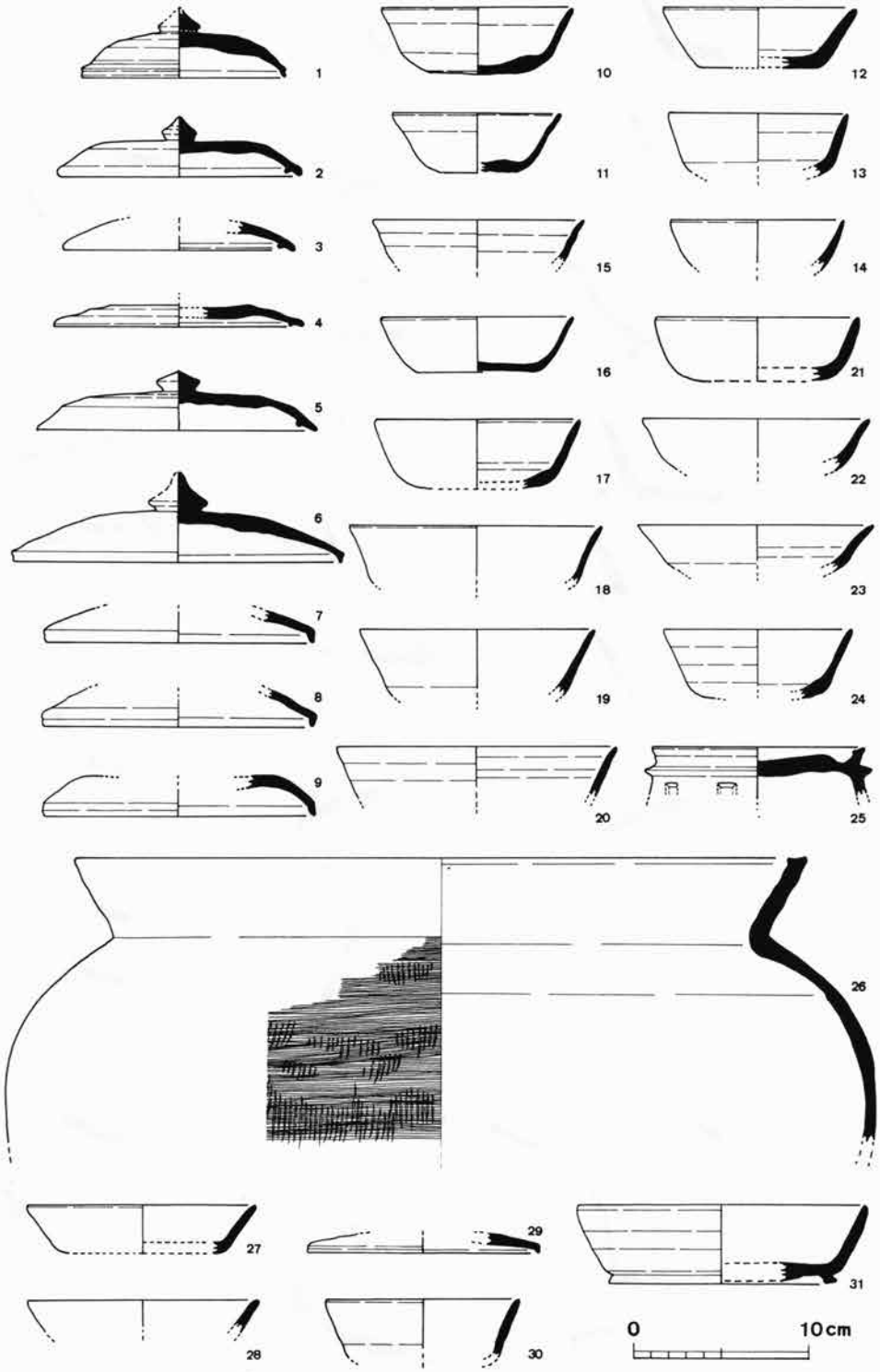
27・28は，須恵器杯身で口径13cm，体部は直線的に斜上方にのびる。底部は平底である。29は口径13.4cmの須恵器杯蓋である。30・31は高台付の須恵器杯身である。口径は，各々11.2cm，16.6cm，31の高台は断面台形状を呈し外に開く。

土坑SX20503（第23図32～34）

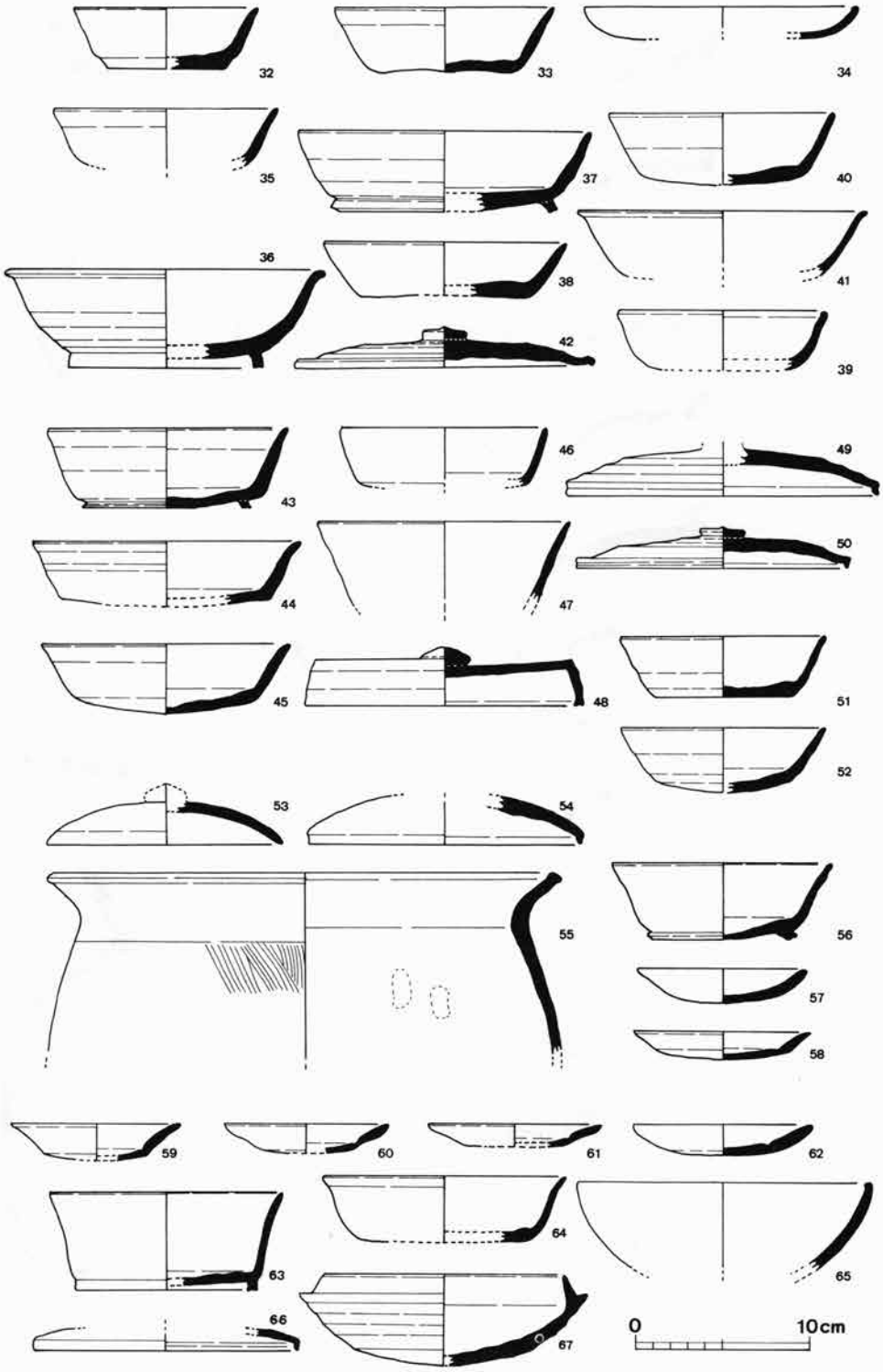
32・33は，須恵器杯身である。口径は10.3cm・12.5cm，器高3.2cm・3.6cmを測る。底部は高台のない平底で，底部から屈曲して体部は直線的に立ち上がる。34は，土師器杯身である。口径15.6cm・器高1.8cmを測る。底部は平底，体部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は内側に丸く肥厚する。

井戸SE20504（第23図35～42）

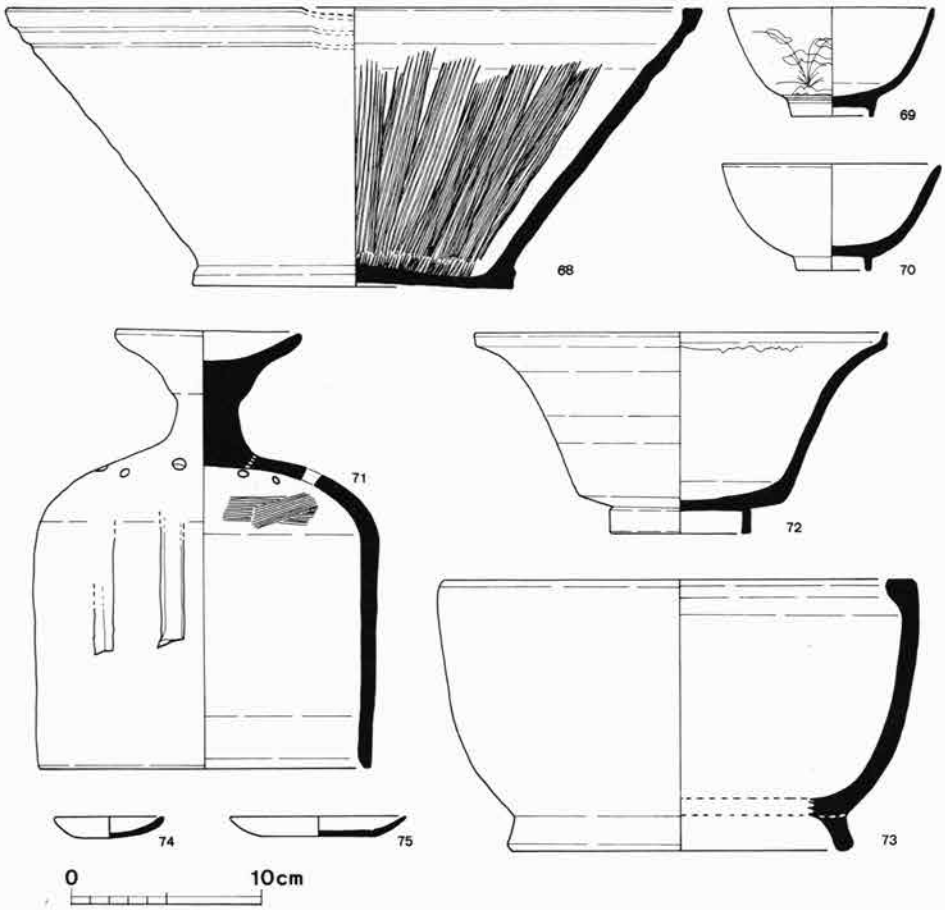
35・36・41は，平底に高台の付く須恵器杯身である。35は口径16.8cm・器高4.6cmを測る。高台は断面台形を呈し外側に傾く。体部は屈曲して直線的に立ち上がる。36は口径17.3cm・器高5.4cm。高台は台形を呈し直立する。底部から体部のとり付きはゆるやかで，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部で外反し端部は外側に向く，銅椀形の形態である。



第22図　出 土 遺 物 実 測 図 (1)



第23図　出土遺物実測図(2)



第24図　出 土 遺 物 実 測 図 (3)

41は，口径16.6cmで，器壁は薄いが35と同じ形態を示す。37～40は，高台の付かない底部平底の須恵器杯身である。42は，天井部中央に扁平な宝珠つまみをもつ須恵器蓋である。縁部が屈曲し，端部は下方に小さく丸める。

土坑SK20505(第23図43～50)

43は，低い高台に付く須恵器杯身である。口径13.8cm・器高4.6cm。体部は直線的に急傾斜で立ち上がる。44・45は高台の付かない平底の須恵器杯身である。底部から体部は屈曲して直線的に立ち上がり，口縁部でやや外反する。48・49・50は，天井部中央に扁平な宝珠つまみが付く須恵器蓋である。48は口径16.2cm・器高3.3cm。天井部は，平らで縁端部がほぼ直角に屈曲し端部は平坦面をもつ。外面は，緑色の自然釉が残り，内面は，白みを帯びた灰色を呈している。49の天井部は縁辺部でやや屈曲し端部は下方に屈曲し，やや外側向きに丸める。50は口径16cm，天井部は回転ナデによって調整している。

柱穴(第23図51～55)

51はSB20506のP-32より出土した須恵器杯身である。口径12cm・器高3.4cmで，底部平底で屈曲して体部は立ち上がり，口縁部でやや外反する。53・54・55は，SB20504のP-34から出土した。53は口径13.6cm，赤褐色を呈する土師器蓋である。天井中央部につまみをもち，端部までなめらかに湾曲する。外面はていねいなヘラナデによる調整を施す。55は口径29.6cmの土師器甕である。口縁部は胴長の体部から「く」の字形に外方へ開き，端部は外側に平坦面をもち，内側に肥厚する。体部外面は縦方向のハケメ調整する。

溝SD20502(第23図56～58)

溝SD20502の埋土には，須恵器杯(56)，瓦器椀等，古代・中世の遺物があるが，近世(江戸時代)の土師器(57・58)，瓦(76・77)が最も新しい遺物である。57は口径9.6cm，底部から体部の立ち上がりはなだらかで器壁が厚い。58は，口径10.2cm，底部と体部に変換線が明瞭に残る。

土坑SK20507(第24図68～72)

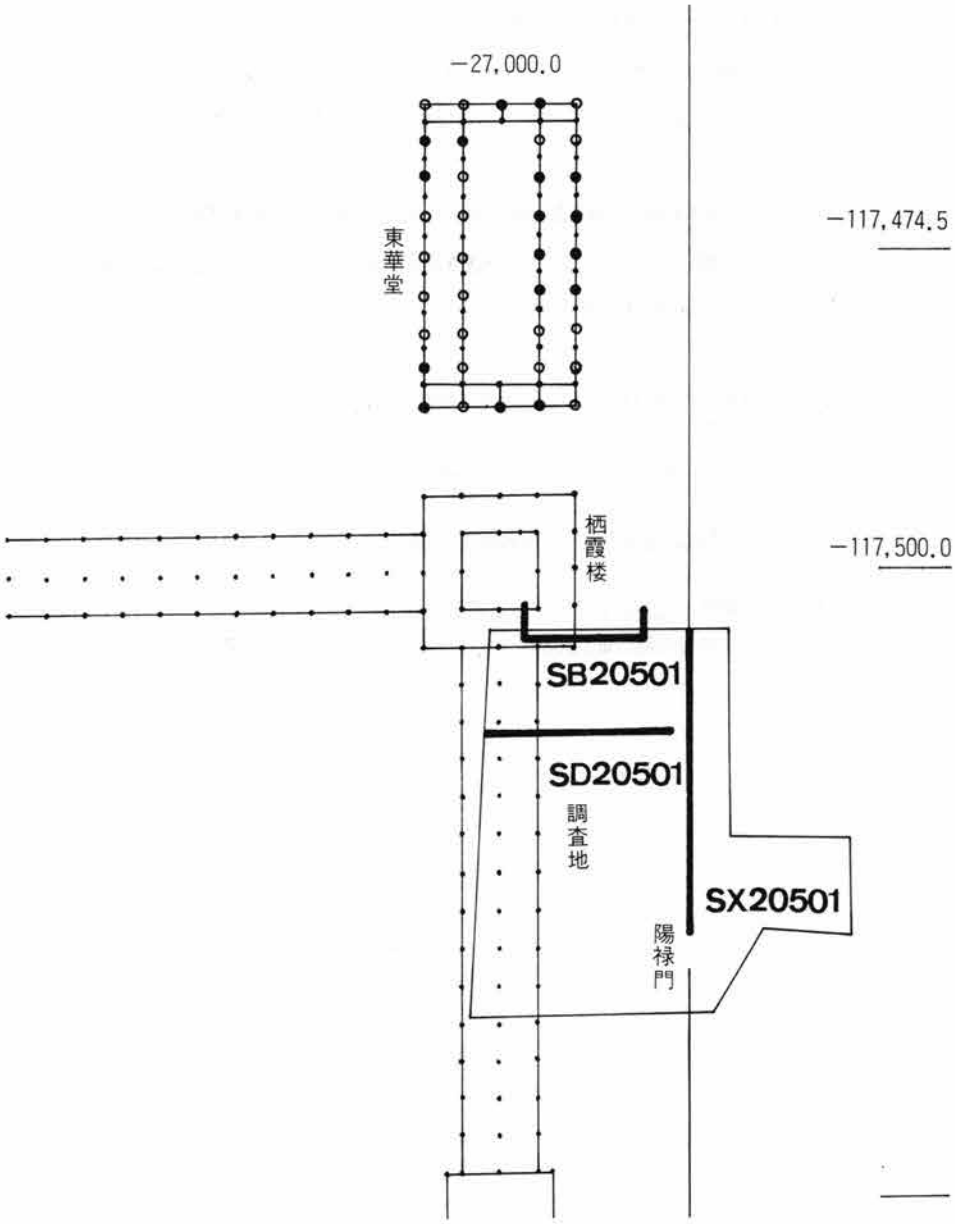
68は口径36.8cm・器高14.6cmの陶質，赤褐色を呈する擂鉢である。底部は平底，体部は直線的に斜上方にのび，口縁部では厚味を増して直立し，端部は平坦面をもつ。体部の内面は11.5cmのハケメが縦方向にすきまなく施されている。甕かもしれない。69・70は，染付磁器，椀である。71は淡褐灰色を呈する土師質の「ひょうそく」である。口径17.6cm・器高23.0cmを測る。受け部の口径10cmで，胎土は精良で器壁はナデによってていねいに仕上げる。燈台部は大きく肩をはり，円筒状である。透しは肩部に小円(直径1.0cm)を8個めぐらす。

5. ま と め

今回の調査では，飛鳥時代から近世の遺構が検出された。以下，要点のみ記述していきたい。

奈良時代の遺構としては，掘立柱建物跡(SB20502・SB20503・SB20504・SB20505・SB20506)，不明遺構(SX20502・SX20503)，土坑(SK20503)等がある。建物は大きく2時期に分かれる。SB20504・05・06の方位はⅡA，SB20502・03はⅣAに相当する[注5]。SK20503は出土遺物から飛鳥Ⅳ期にあたり[注6]，SB20505と平行するが，SB20504と05の前後関係は不明である。SX20502・03は，それぞれSB20502・03より古いがSB20504・05・06と並存していたかは不明である。

長岡京期の遺構には，SD20501・SB20501・SB20507等がある。SD20501は，すでに長岡宮跡第145次調査で宮内道路の北側溝ではないかと指摘されていたが，今回の調査では



第25図　検出遺構・推定豊楽院比較配置図（縮尺600分の１）

その延長部がSX20501付近で途切れていた。この地点は，西一坊第一小路(南北道路)との交点にあたることから，東西・南北とも条坊制に全く規制された溝であり，宮内道路として再確認できる。

SB20501は，掘立柱建物跡であり，東華堂より東へ大きく偏していること等から，これを栖霞楼に比定することは困難である。しかし，その規模が東西４間のみにすぎないにし

ても，栖霞楼が4間×4間の建物とする復原案を捨て去ることはできない。

SX20501は，堆積層に江戸時代の遺物が含まれるものの，この南北ラインが豊楽院の復原(向日市教育委員会)の東限にほぼ一致することから，長岡京期造営の旧地形を反映しているものと考える。

江戸時代の遺構にはSA20501，SK20506・07・08，SE20505，SD20502等がある。これらはSD20502を含む南側に集中しており，SA20501の存在をあわせるとトレンチ全体に南真経寺の寺域が広がっていた可能性がある。　(竹井　治雄)

注1　「長岡宮跡第145次(7AN14N地区)」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集　向日市教育委員会)　1984

注2　長岡京の「豊楽院」に関しては現存の資料では確認できていない。中山修一先生から御教示を賜った。

注3　長谷川　聡，安東典江，足立美佐江，小林綾子，野村江美子，丸谷はま子，中島恵美子(敬称略)

注4　注1と同じ

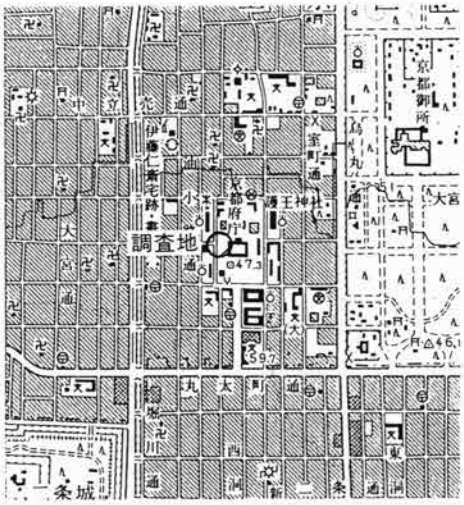
注5　丸　嘉樹・山本輝雄「乙訓中学校周辺の長岡宮跡下層遺構について」『長岡宮』6号　1978

注6　『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』1980年，奈良国立文化財研究所の土器編年による。

4. 平安京(左京近衛・西洞院辻)発掘調査概要

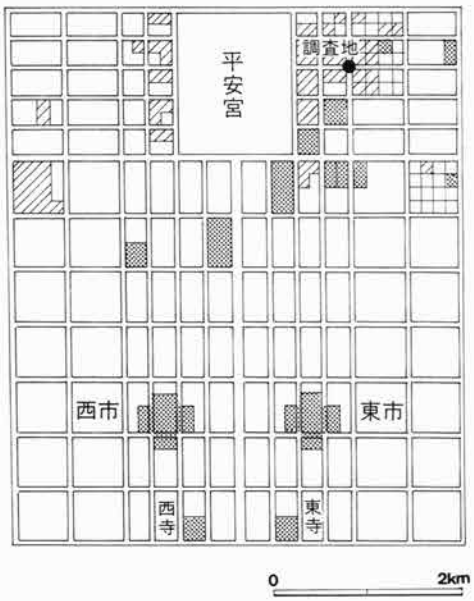
1. はじめに

平安京跡(左京近衛・西洞院辻)の発掘調査は，京都市上京区下立売通新町西入ル薮之内町にある京都府庁内で実施されたものである。近隣は官庁街となっており，静かな一画に調査地はあった。調査前は駐車場であったが，この地に第2行政棟の建設計画がなされたため，京都府総務部の依頼を受けて，当調査研究センターが発掘調査を実施した。調査面積は約1,500㎡で，期間は昭和63年1月5日から同年8月11日まで行った。その結果，検出遺構163，出土遺物約400箱(整理箱)の成果があった。



第26図　調査地位置図(1/25,000)

発掘調査は2年度にわたった。第1年度は当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人と，同調査員伊野近富・岩松保が担当し，第2年度も同様であった。期間中多くの補助員・整理員の協力(注1)をえ，京都府総務課・広報課・文化財保護課，財団法人京都市埋蔵文化財研究所(注2)のお世話になった。記して謝意を表する。なお，発掘調査にかかる経費は，全額京都府総務部が負担した。



第27図　平安京条坊図

2. 歴史的環境

ここでは簡単に当該地及び周辺の歴史的環境について略述したい。

調査地は，平安時代に遡れば南北方向の

道路である西洞院大路(幅８丈＝約24m)と，東西方向の道路である近衛大路(幅10丈＝約30m)の交差点(辻)に当たる。調査地のほとんどは，この路面と推定されているが，四隅に関しては交差点をとり巻く四つの町の一部分であった。四つの町とは平安時代の条坊表示で言えば，西北が左京一条二坊十五町，西南が同十四町，東北が左京一条三坊二町，東南が同三町に相当する。

この付近は官衙町がひしめいていたところで，『京都の歴史』(注3)によれば，西北が左近町，西南が左獄，東北が右衛門府(町)，東南が修理職町であった。官衙町とは，宮域の内外にあるさまざまな官庁に出仕する下級役人たちが起居し，生活する地域(注4)であり，ほとんどは平安宮とともに平安時代で解体してしまった。

中世には付近に下御霊神社があったが，天正18(1590)年に豊臣秀吉の都市改造によって移転したという。

江戸時代になると調査地の西北隣に茶屋四郎次郎屋敷が造られた。昭和59年度の(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した調査(注5)では，多種多様でしかも豪華な遺物が出土し，豪商の生活の一端が明らかにされた。

江戸時代の末期には，会津藩主松平容保が京都守護職に任じられたが，それに伴って，現京都府庁敷地一帯を幕府は買

第28図　トレンチ設定図

収し，その役邸にあてた。慶応3(1867)年に守護職が廃止され，跡地は一時京都裁判所に引き継がれたが，明治2(1869)年京都府庁，同4年京都中学校，同18年に再び府庁の地となり(注6)，現在に至っている。

3. 調査経過

調査に際しては，平安京跡の他の調査との関連性をもつために，国土座標に合わせた地区割りを行った。4m方眼を設定し，第Ⅵ座標系のX＝－108,850.000をAラインとし，南へ順次アルファベットで表示した。また，Y＝－22,050.000を1ラインとし，西へ順次アラビア数字で表示した。そして，地区表示は北東隅とした。なお，レベルについては京都府庁旧館の南にある国土水準点(47.30m)によった。

(昭和62年度の調査)

発掘調査は，敷地内の測量後，第2行政棟建設範囲の中でトレンチを設定して開始した。その際，およそWラインより南はかって地下室があり，調査不可能と判断した。

表土から1.6mほどを重機で除去し，江戸時代末期の面から人力による調査を実施した。この重機掘削によって判明したのは，S～Wラインの間も深く攪乱されていることで，この地域も東端部を除いて調査不可能地となった。

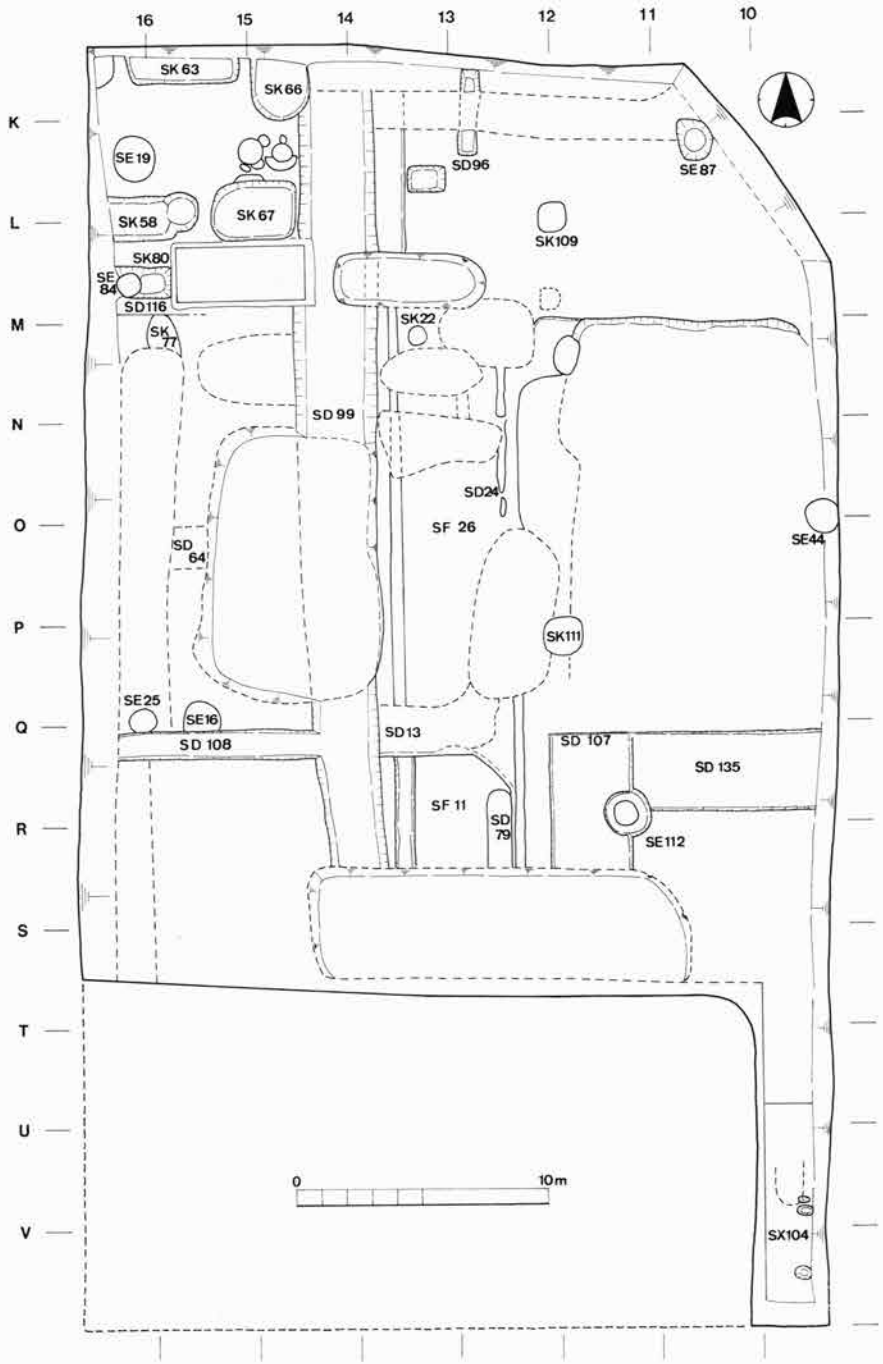
なお，第29図にあるとおり，調査区域の中でも攪乱坑が無数にあり，それによって江戸時代相当層は攪乱されていた。このため，江戸時代については攪乱坑の間隙を縫って調査することとなった。

江戸時代は少なくとも4面以上あることが判明した。すなわち，江戸時代末期面，安政の大火(1854年)面，天明の大火(1788年)面，江戸時代前期面である。この間に洪水層が幾層かあったが，全面的に判別できるほどは遺存していなかった。

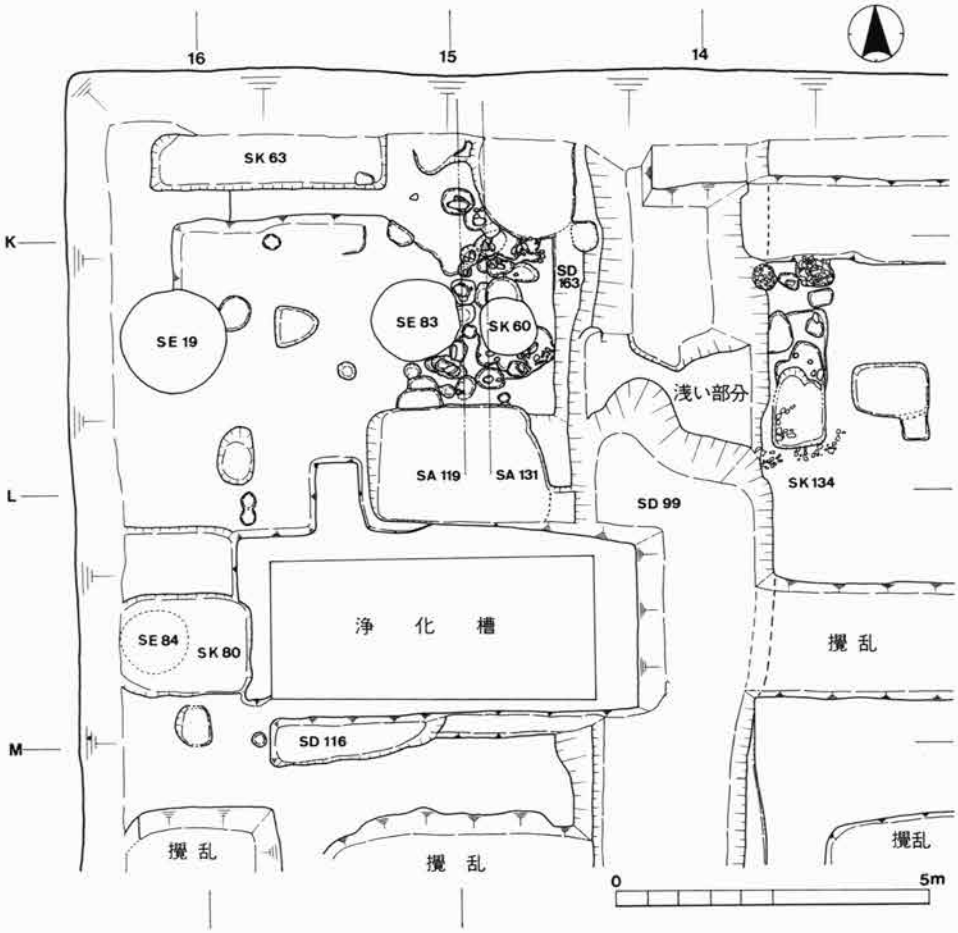
まず，江戸時代末期面では，調査北部で倉跡を確認した。安政の大火面では南北方向の西洞院通りの路面(SF11・26)と西側溝(SD13)と東側溝(SD24)を検出した。また，東西方向の出水(近衛大路)通りの路面(SF11B)と，南側溝(SD68A)の一部と，北側溝の一部を検出した。更には町屋の一画を構成する漆喰溝を調査地の南東隅，及び北部両端で検出した。以上のような道路遺構及び町屋遺構は，その同じか所の下層，天明の大火面でも検出した。江戸前期面でも同様のか所で道路遺構は検出できたが，漆喰溝はなかった。

調査は複雑に遺構が重複する場合は実測図(縮尺25分の1)をとり，写真撮影をし，下面の調査に移った。結局，地表下約2mまで掘削した。

以上の調査経過をたどった後，昭和63年3月17日に現地作業を中断し，同月22日まで室内作業をした。


16
15
14
13
12
11
10
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
SK 63
SK 66
SE 19
SK 58
SK 67
SK80
SE 84
SD116
SK 77
SD96
SE 87
SK109
SK22
SD 99
SD24
SF 26
SE44
SD 64
SK111
SE25
SE16
SD 108
SD13
SD 107
SD 135
SF 11
SD 79
SE112
0
10m
SX104

第29図　調 査 地 平 面 図



第30図　調 査 地 平 面 図 (北西部)

(昭和63年度の調査)

当該年度は安土・桃山時代以前の面を調査した。遺構面として明確なものはほとんどなく，安土・桃山時代面と，その直前の面(戦国時代)，平安～鎌倉時代面の3面が，かろうじて部分的に確認できた。これは後世の削平が著しいことに起因する。

道路の幅は，側溝の位置移動によって変化しており，時代が遡る方が広いことが判明した。結局，平安時代面は地表下約1.8mであった。

4. 調 査 概 要

この項では，まず土層の概要を述べ，次いで遺構と遺物の順で略述したい。

(1) 土層の概要

現代の地表面の高さは，北部で約47.5mで，南部で約47.3mである。若干南にいくに従

って低くなってはいるが，ほぼ水平といえよう。

旧地表面のうち，安政の大火層についてみてみると，北部で約46.5mが相当し，南部では約46.3mとなる。また，天明の大火層については，北部で約46.35mがその下面であり，南部で約45.85mが相当する。

安土・桃山時代面は，調査地北部では不分明だが，約45.9mが相当し，南部では(SX104の面)約45.6mとなっている。戦国時代の面はそれより約20cm下にある。平安～鎌倉時代の面は，ほとんど削平されており，平面的に把えることができない。かろうじて，平安時代初期の暗茶褐色粘質土が遺存している調査地北西部をみてみると，約45.7mである。

以上のような，時代別の地表面の高さをみてみると，平安時代から戦国時代までは，あまり盛土はされず，ほぼ同様のレベルであったことが知られる。そして，北端と南端では約30cm比高差があるが，40mほどの距離があるため，ほとんど水平に近いと言えよう。この傾斜は，盛土作業が行われた安土・桃山時代でも同様である。しかし，江戸時代になると部分的な盛土作業が行われたらしく，18世紀後半の天明の大火時には約50cmの比高差が認められる。この直後の盛土作業は広範囲に行われたらしく，比高差は約20cmに押さえられている。

土色の変化についてみてみると，地山は調査地北部が黄褐色粘土層であるが，中央より南は黄褐色砂礫層に変化している。この上に平安時代初期の整地層である暗茶褐色粘質土層があるが，上述したように後世の攪乱により大きく削平されている。中世相当層は暗褐色土層で，近世相当層は灰色味が強く，灰褐色土層となる。この時期には洪水が幾度となくあったらしく，白色の砂層が何層も確認できた。そして，その間に赤い焼土層が2層確認できた。上述のとおり，これは天明の大火と安政の大火に伴うものである。近世の後半には土層の中に漆喰片が多数包含されており，大いに使用されていたことが知られる。

近代になると，灰色土層で，中にレンガ片を多数含んでいる。

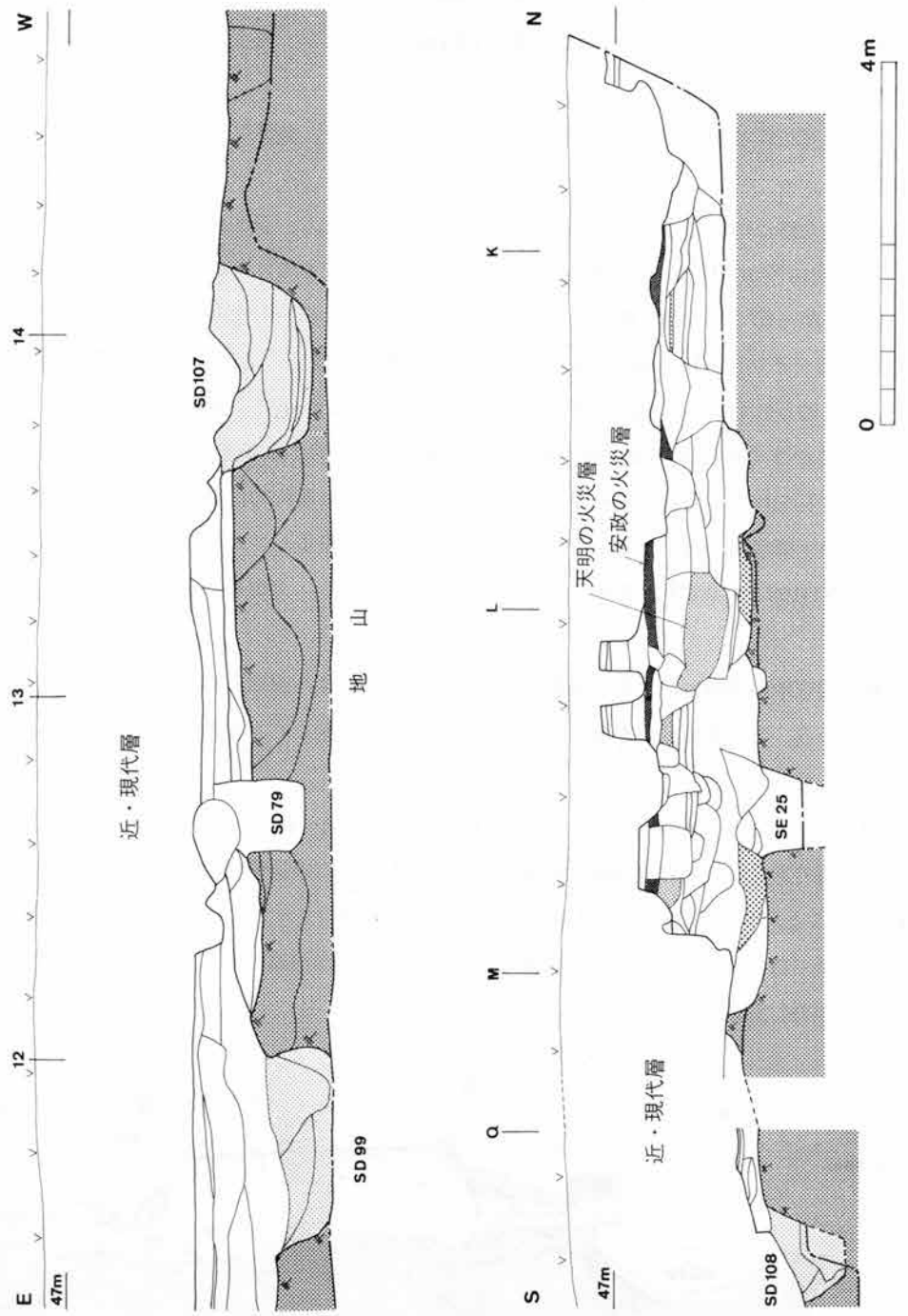
(2) 遺構の概要

検出遺構は163であった。これは，同じ平安京左京の地である平安京左京北辺三坊五町の調査[注7]の場合，約1,700㎡で遺構数が853であったのと比較すると格段に少ない。これは後者が一町域の中ばかりが調査地であったのに対し，当該地は大部分の時代が道路の交差点であり，スペースの必要とする路面であったことによる。

では，古い時代から順に説明していくことにする。

(平安時代～鎌倉時代)

道路　道路の範囲を示す側溝については，不分明ながら近衛大路北側溝が確認できた。第31図にあるように，Lライン辺りで平安時代初期の整地層から掘削された。現存の深さ



第31図　土 層 断 面 図 (上は南壁, 下は西壁)

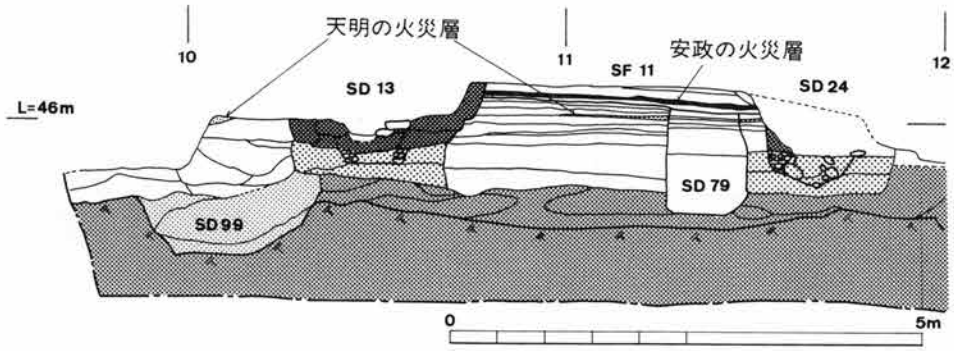
15cm，幅80cmの断面がそれである。北肩は確認できたが南肩は不分明で，平安時代初期の整地層の遺存状態から推定すると，幅は120cmまでとなる。埋土は暗褐色粘質土で，無遺物であった。

路面と思われるか所はほとんど砂礫層で占められており，整地されたような固い面ではなかった。

西洞院大路については，西側溝らしき落ち込みを検出した。第30図をみてみると，15ラインより2m西から16ライン0.5m西までの間が若干窪んでおり，このか所を西側溝に比定することが可能であるが，埋土からは中世以降の遺物しか出土しなかったので，注意を要する。15ラインより1.56m東でも南北方向の溝SD163を検出した。東辺は戦国時代の溝によって切られており，幅は不明である。現在の深さは30cmで，埋土は暗褐色粘質土である。このすぐ西には南北方向に並ぶピット群を検出した。2条あり，両方とも20cm大の平らな石を柱を据えるための礎石にしており，もっとも層位的に新しいピットからは鎌倉時代の土師器皿が出土している。これらが築垣の存在を示しているのかもしれない。前述したSD163との間は約1.5mほど空閑地帯となっており，犬走りに相当するかもしれない。

町　調査地の四隅は，歴史的環境の項で記述したとおり，四つの町があった。このうち北西部のみ，当時期の状況が知られるが，後世の攪乱が激しく，建物等の痕跡は認めることができなかった。

川　調査地の東部中央から始まるSD142は，平安時代～鎌倉時代初期の遺物を包含する南北溝である。当初は西洞院大路東側溝と考えたが，古い遺構面の残る北西部とは約30cm低いこと，また，推定近衛大路の中央付近から溝が始まっていること，更に埋土が灰色砂礫層であることから，人工的な溝ではなく，自然的な流路であろう。そして，推定近衛大路中央付近がその始まり，湧水地点といえよう。



第32図　道路（SF11）土層断面図

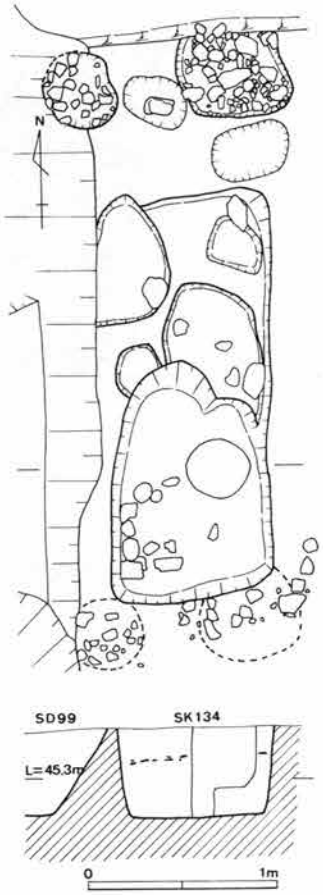
(室町時代)

道路　路面については，地山の黄褐色砂礫層のままであったらしく，ことさら整地していた状況ではなかった。道路の幅を示す側溝については，特に当該期の後半の時代，いわゆる戦国時代の状況が確認できた。第29図をみてみると，西洞院西側溝としてSD99があり，同東側溝としてSD107がある。前者が調査地の南北両端まで掘削されているのに対して，後者は，近衛大路の南側から始まっている。次に近衛大路北側溝(SD116)は北西部では確認できたが，北東部は攪乱土坑によって大きく削られており，存在したかどうかは不明である。近衛大路南側溝(SD108)については，確認できたが，西洞院大路の路面を貫いてはいない。

調査地南部で確認した西洞院大路の路面の幅は6.6mであった。東側溝の幅は約3.4mで，断面は逆台形であった。西側溝の幅は近衛大路以北が約3.1mで，同以南が約2.4mであった。断面は逆台形であった。なお，現存する深さは1～1.1mである。平安時代の側溝とは全然規模が違っており，堀というべきものである。

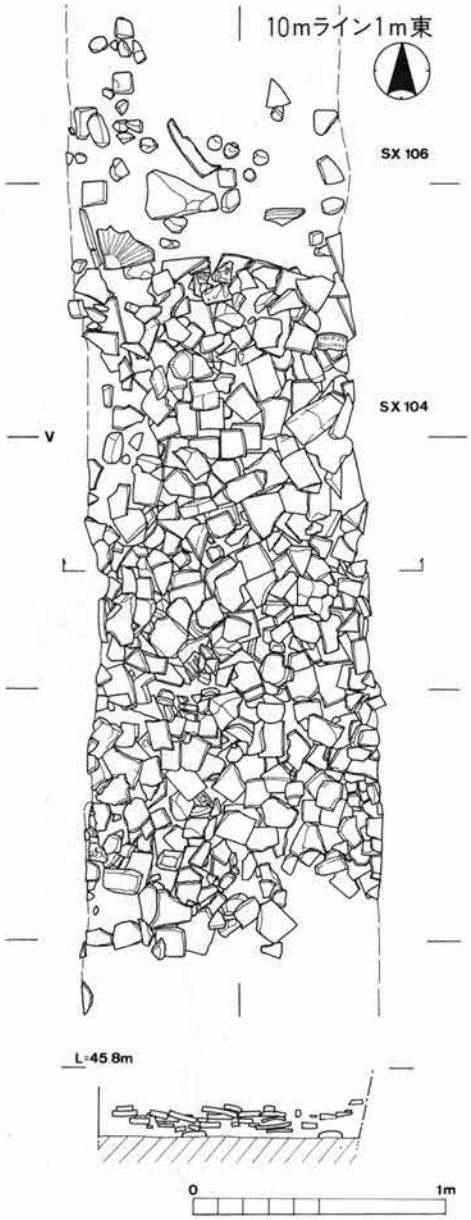
なお，西側溝の北部，Lライン付近は底が20～30cm浅くなっていた。これは溝を掘削する際に意図的に地山を掘り残していた。

上記の掘り残したか所のすぐ東で土坑SK134を検出した。これは西洞院大路の西端の，南北に長い隅丸長方形土坑である。規模は東西約80cmで，南北約130cm，深さ約50cmである。埋土は炭を含む黄褐色土で，土坑の壁は黄色味のある物質がこびりついていた。土坑は新旧2時期あり，古い方は重複して北に1.1mのびていた。これらの土坑の四隅付近には，5～6cm大の円礫が30cm範囲に置かれていた。これが，おそらく柱を据えた位置を示す円礫であろうから，ここに細長い建築物があったことになり，土坑はその中にすっぽり収まっていた。この土坑は，安土・桃山時代の整地層の直下にあり，その頃が埋没時期と推定できる。なお，数少ない遺物の中には16世紀の土師器皿などが含まれていた。

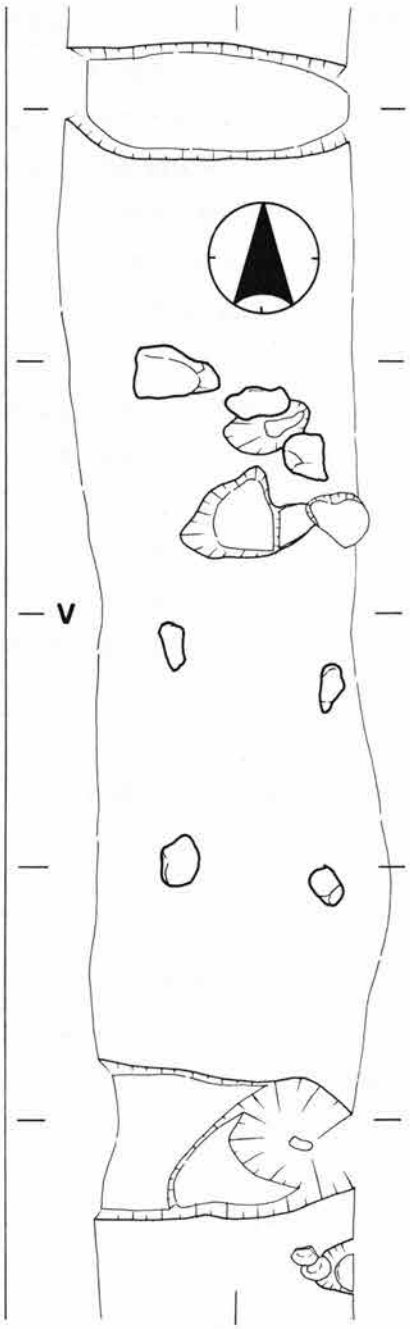


第33図　土坑ＳＫ134実測図

町　調査地の北部，および南東部で若干の遺構が検出できた。まず，北西部では15～16世紀の瓦器羽釜や土師器皿を包含した地点があった。第41図に示した15Ｊ・Ｋ



第34図　　ＳＸ104・ＳＸ106遺構実測図(瓦溜り)



第35図　　ＳＸ104・ＳＸ106遺構実測図（下層）

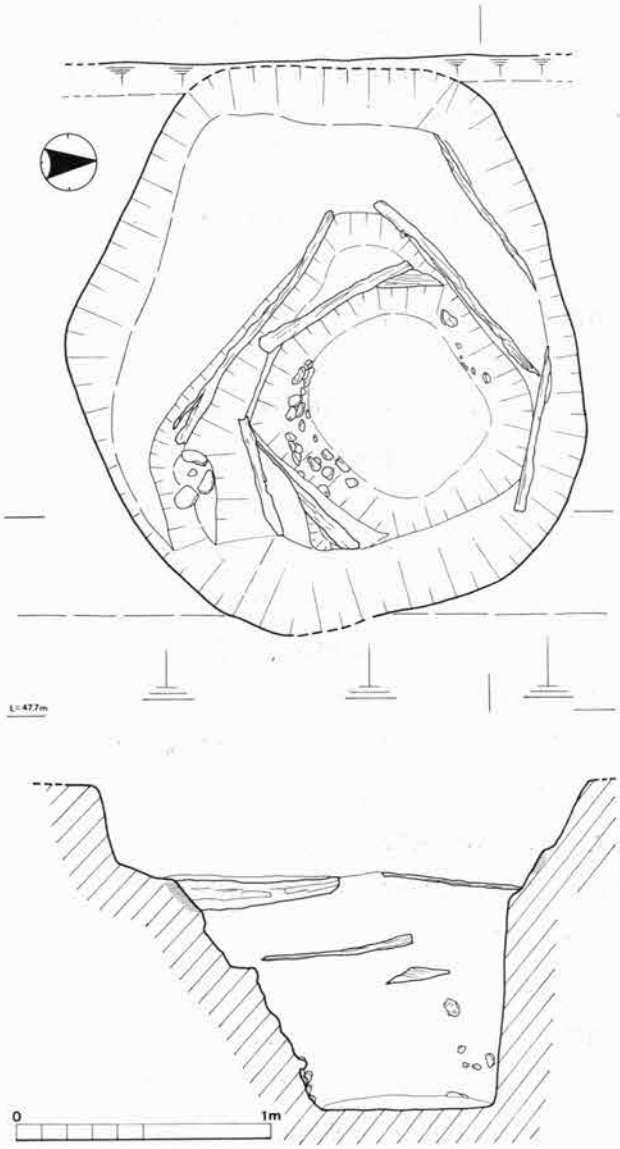
区の遺物がそれである。ただし，建物等の痕跡は後世の削平により確認できなかった。

北東部では，土坑SK149を検出した。規模は南北260cm，東西176cmで，深さは現存10cm程度であった。この中に多量の土師器皿と円礫が包含されていた。時期は15世紀末～16世紀初めと思われる。南東部では，安土・桃山時代の瓦溜り(SX104)などに一部重複した状態で遺構(SX106)を検出した。出土遺物は数片の骨片(火葬骨か)と，骨角製のサイコロ1点，鉄製のナタの刃1点である。おそらく墓であろう。なお，サイコロの内部は球形に刳り抜かれていた。近衛大路南側溝より南へ15mの地点にあるので，町内に設けた墓の資料となった。

(安土・桃山時代)

道路　戦国時代に造られた堀は，この時期もほとんど同様に機能していたと思われる。また，道路面も前代とあまり変化しない。なお，南東部にある近衛大路南側溝の中に造られた井戸SE147は当時期に機能していた。平面は不規則な六角形でところどころに木枠が遺存していた。埋没時期は江戸時代初期である。

町　調査地の南西部を除き，3地点で遺物は出土したが，遺構として把握できたのは南東部である。前述した墓SX106と一部重複して瓦溜り(SX104)が検出されたが，これは金箔瓦約100点を含むものであった。堆積した瓦を除去してゆく



第36図　井戸SE147実測図

と，その直下に整地した固い面（黄褐色土を含む暗茶褐色土）と4個の礎石が現われた（第34・35図参照）。礎石は約20cmの方形で，厚さは約5cmであった。石の配列から東西方向の細長い建物が推定できる。この礎石の南北両方に東西方向の溝がある。南側のは雨落ち溝として考えてよいが，北側のはどうであろうか。北側の礎石から1.8m離れており，一連のものとは考えにくい。あるいは1.8mの空間が建物の北側に設けられた通路で，その北に別の建物があり，その雨落ち溝と言えるのかもしれない。だが，それより北は後世に攪乱されており，確定できない。

金箔瓦は北東部でも数点発見されたが，建物は不明な点が多い。ここでもやや固い面があり，小さな礎石が検出されたので，あるいは対応するのかもしれない。第52図に示した礎石の一部がそれである。

（江戸時代）

ここでは，おおまかに3時期（17・18・19世紀）に分けて記述したい。

＜17世紀＞

道路　17世紀前葉に盛土がなされ，道路が整備されたことが判明した。かっての堀のような大きな側溝は完全に埋めたてられ，平坦になった状態で新たに側溝が掘られた。側溝は石組みであるが，規模は内側の幅が30cmと狭い。但し掘形は1.6mもある。西洞院通り（大路）の場合，南部の路面幅は4mである。

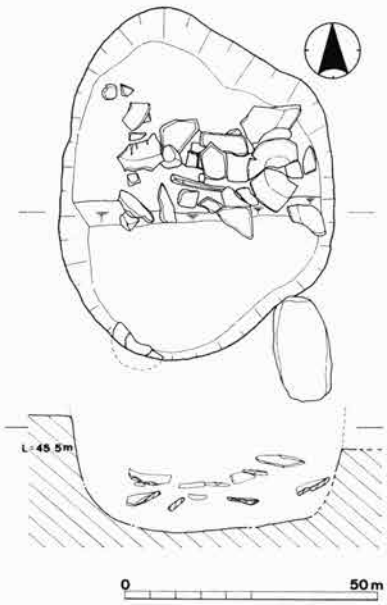
また，近衛大路（出水通り）の路面幅は4.7mであり，前代と比してかなり狭くなった。

前述したように，道路は盛土して整地しているが，この時に交差点の北部で土坑を掘り，土器の埋納行為が行われた。土坑SK22である。その中には中国製華南（または交趾）三彩盤1点を始め，土師器鍋1点，美濃・瀬戸天目茶椀片や多数の土師器皿が埋納されていた。

町　整地作業は道路だけでなく，両側の町まで及んだ。特に北部では華南三彩盤の破片が両側の町部分で発見され，この証左となった。

＜18世紀＞

道路　前代の石組みと同様の施設を造り，側溝としているが，約25cmほど路面が高くなり，そこに造っている。江戸時代の路面は固く，調査のツルハシがほとんど入らないほどであった。この時



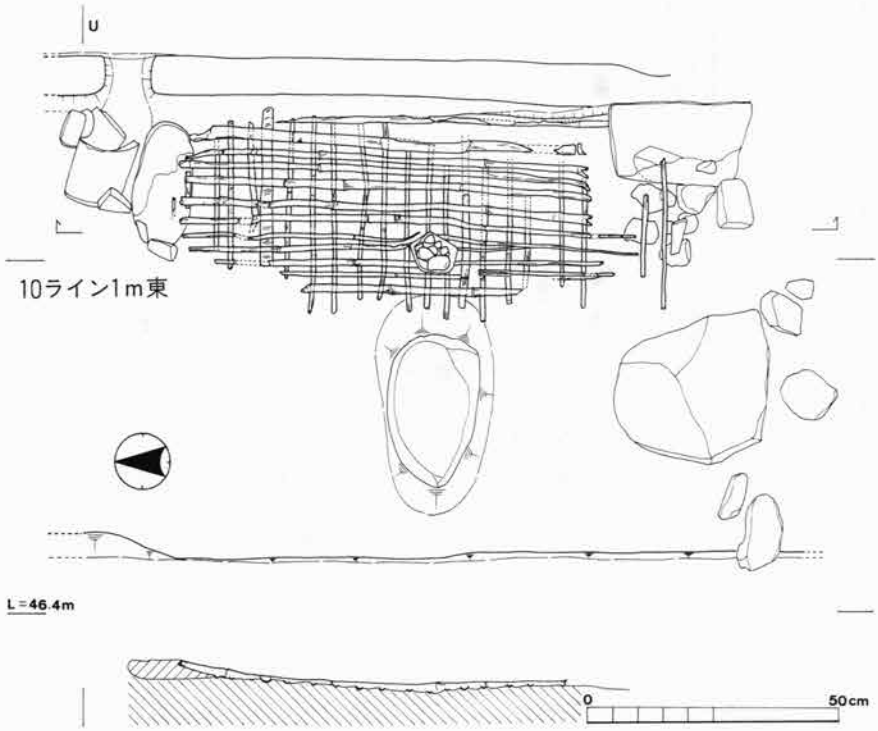
第37図　土坑SK22実測図

期は天明の大火層(1788年)の存在によって，大火時の状況が把握できる。それによると，道路部分でも1～5cmの焼土層が認められるが，たとえば，近衛大路(出水通り)の南の西洞院通りの場合，西側は焼土が薄く，焼土を形成するような建築物が近隣に稀薄であったことが判明した。

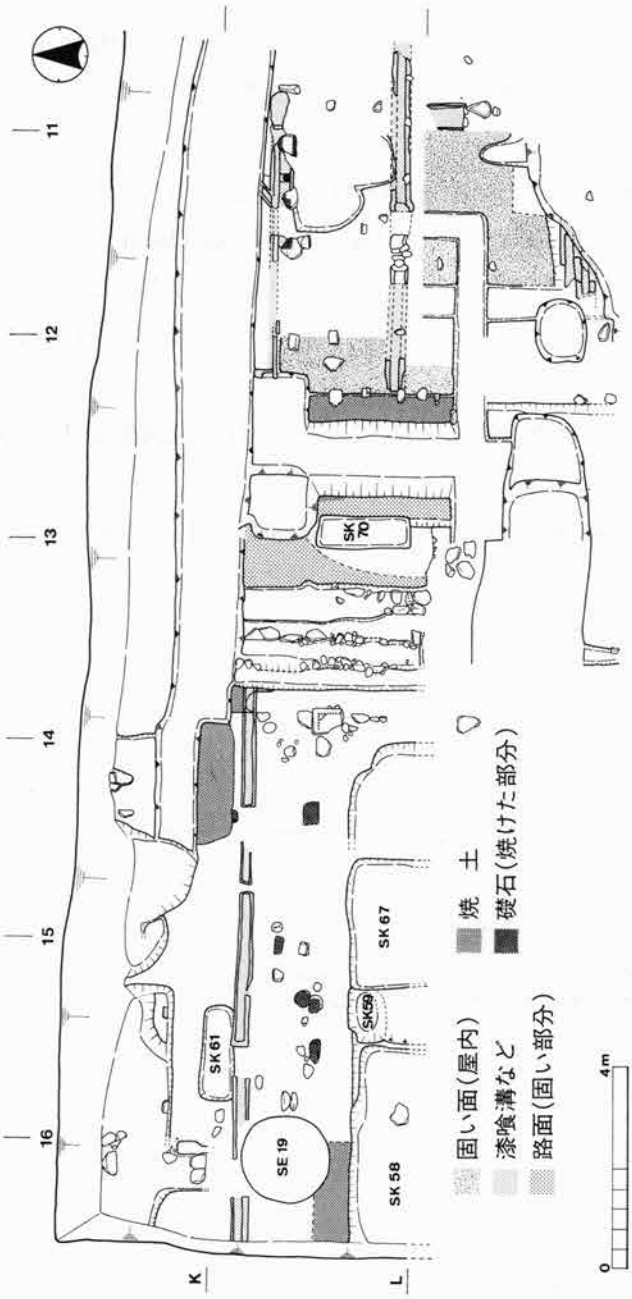
町　この時期には南西部を除いて漆喰で造られた溝が目立つ。北部では西洞院通りに向かって漆喰溝が設置されている。北西部のそれは幅30cmで，内側の幅は18cmである。この溝の周辺には漆喰で固めた面が広がっており，かって建物の内部であったことが知られる。ところどころに礎石も遺存しており，中には北東部の例のように，漆喰溝に塗り込めたものもあった。

南東部でも漆喰溝が出土した。この場合は南北方向にのびており，近衛大路(出水通り)に向けて設置しているが，攪乱のため途切れていた。

この漆喰溝のすぐ西で，土壁が倒壊したか所を検出した(第38図)。周辺の状況から天明の大火によって倒壊したらしい。焼けた壁土を除去すると，竹で編んだ木舞(こまい)が検出できた(SH36)。細い真竹を半截して十字に組み合わせているが，2本だけやや太い真竹を使用している(幅約38cm)。



第38図　土壁 SX36 (木舞) 実測図



第39図　調査地北部平面図(漆喰溝など)

土壁の厚さは現存8cmで，薄い壁の部類に入ると思われる。

他の遺構としては，火災時に機能していた地下式貯蔵庫(SK 58・63など)や，火災後のゴミ捨て穴(SK 65・67など)がある。また井戸SE84も同時期である。

＜19世紀＞

道路　前代と同様に石組みの側溝が上層に設置されている。石は以前は河原石が主体だが，徐々に花崗岩の切り石が多くなっている。側溝の埋土から多数の泥面子が出土した。路面は固く締っていた。

町　町屋部分は，前代と同様に漆喰溝が設置されていた。いずれも「現場打ち」と言われるもので，つまり現地で漆喰を固めたものである。漆喰溝は，特に南東部が複雑に設置されていた。第53図の変遷図にみられるように，1か所「枡」をつくり，水を溜める場所を造っていた。水の流れる方向は北と西と思われる。

以上が安政の大火時の状況であるが，次に京都守護職屋敷時と思われる遺構について記

述したい。

北部で検出した溝SD2は，西洞院通りの部分に掘られており，当該期に伴うものと思われる。この溝の中には角張った石が充塡されており，その状況から倉のような重たい建物の基礎部分であろう。その東にある井戸SE87は，瓦様の焼き物を使用して内径としたもので，当該期のものであろう。前記した溝SD2の存在によって，この時期には西洞院通りは使用不可能であったことが知られる。

(3)遺物の概要

遺物は両年度合わせて約400箱出土した。近世のものが8割程度を占める。遺物の種類は土師器，瓦，伊万里を筆頭に，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，無釉陶器，瓦器，貿易陶磁器(白磁,青磁，三彩，褐釉，緑釉，青白磁など)，いわゆる中世陶器の常滑，瀬戸，備前，丹波，信楽など，いわゆる近世陶器の美濃・瀬戸，唐津，信楽，丹波，備前や堺焼，京焼など，土製品，石製品，金属製品(銭貨やキセルなど)，ふいごの羽口，るつぼなどである。

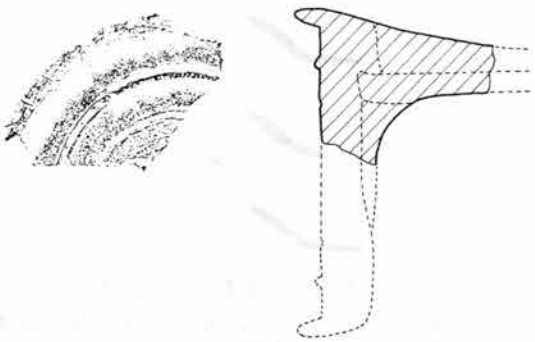
このような多種多様な遺物が出土した。今回はその一部を紹介するに止める。なお，図示したものは観察表(付表3)にほとんど譲るが，目に止まったものに少し触れたい。

①平安時代

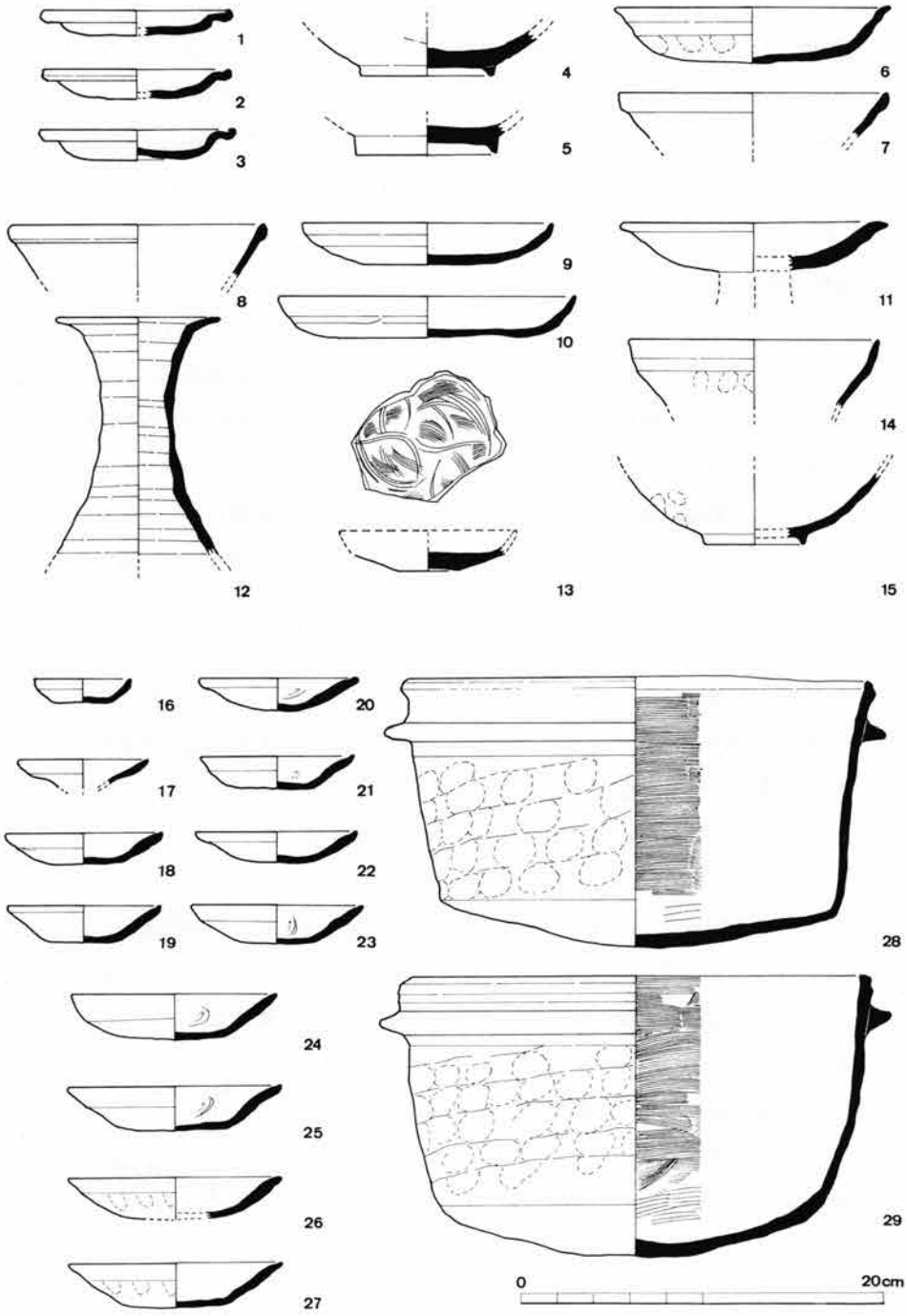
平安時代前期の遺物はほとんど出土しなかった。かろうじて，調査地東北部で緑釉瓦(第47図123) 1点を検出したことと，西北部のSD116掘削中に緑釉陶器や灰釉陶器片が出土したのみである。なお，奈良時代に属する重圏文軒丸瓦も1点出土した。これは難波宮に使用されたタイプで，長岡京を経て転用されたと思われる。

平安時代中期については，調査地中央部東端のSD135掘削中に多数出土した。溝自体は中世である。第41図のように10～11世紀の土師器皿，緑釉陶器椀，灰釉陶器椀，白磁碗などがある。土師器皿は内膳町跡SK18よりは新しく，11世紀前葉であろう。緑釉陶器は近江のもので，内外面とも施釉している。灰釉陶器は内面に重ね焼き痕があり，外底面には糸切り痕がある。

SD142は近衛大路を南北に横断したもので，自然流路である。ここから整理箱数箱分の遺物が出土した。図示した中には上層から出土したものもあり，時期幅がある。遺物は土師器皿のほか，白色土器高杯，青磁壺・皿，白磁椀，瓦器椀などがある。この中でもっとも

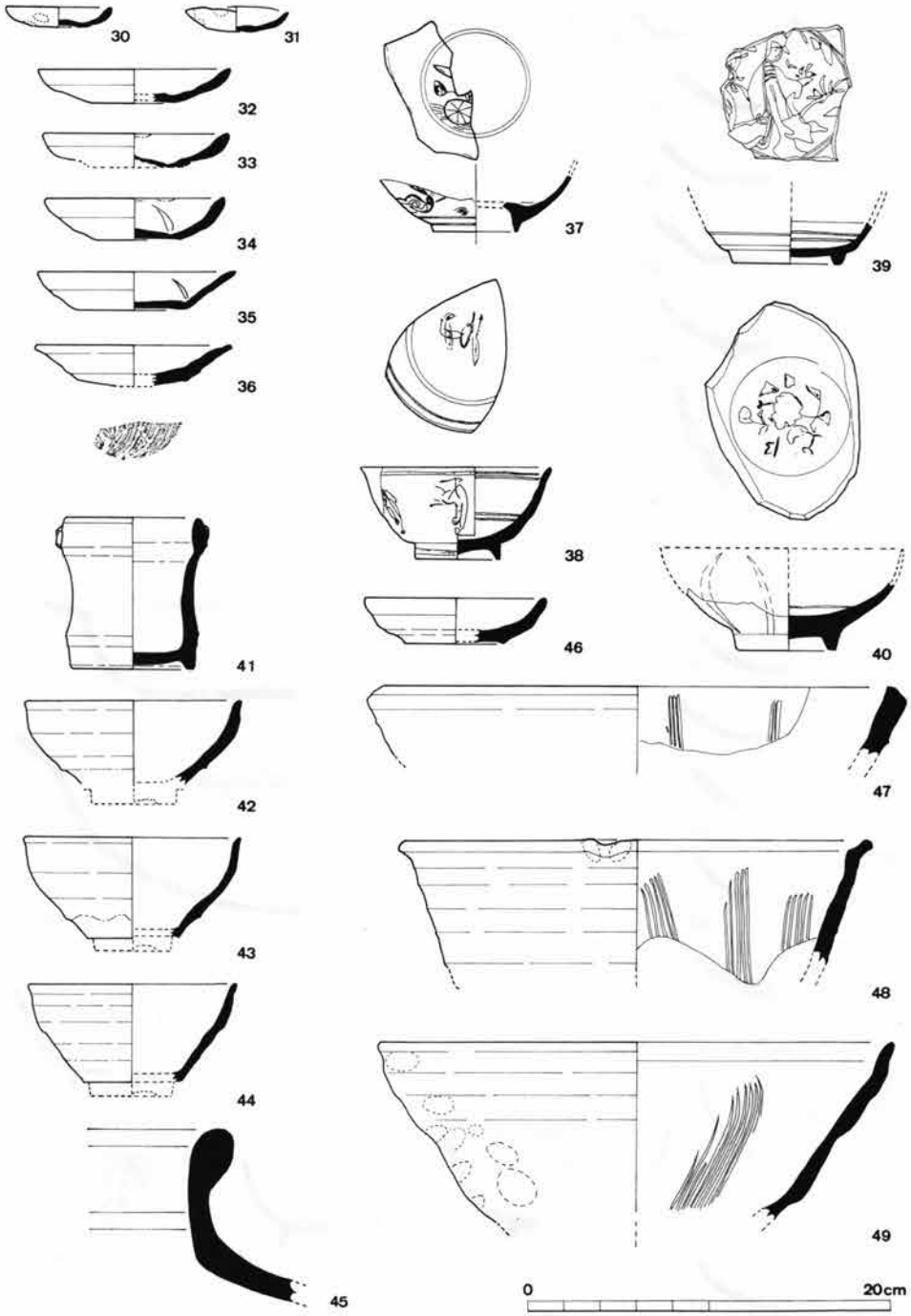


第40図　重圏文軒丸瓦実測図(S=1/4)



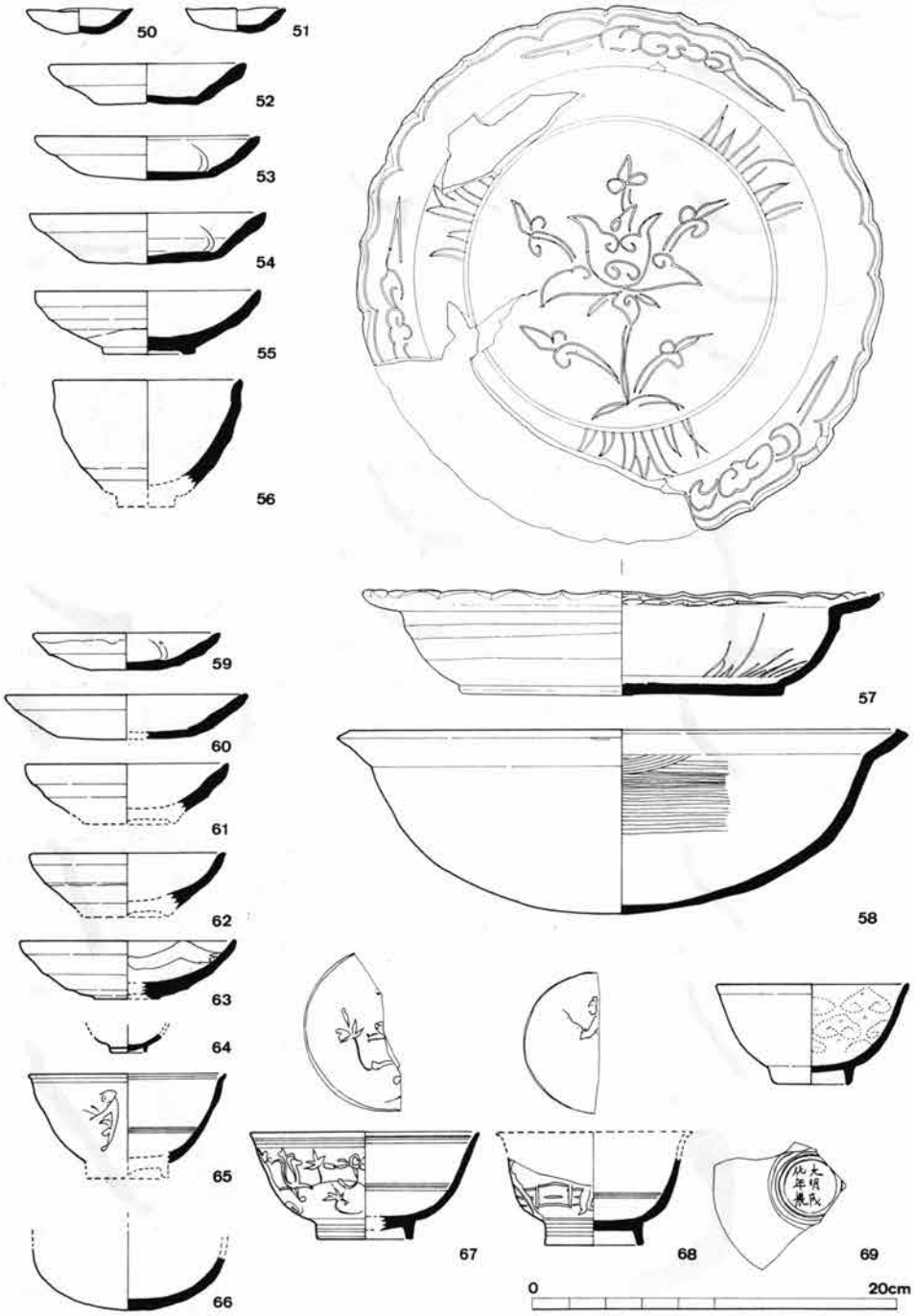
第41図　　S D135・S D142 包 含 層 出 土 遺 物 実 測 図

S D135：1～3・6.土師器皿，4.灰釉，5.緑釉，7.白磁
S D142：9・10.土師器皿，11.白色土器，14・15.瓦器，12・13.青磁，8. 白磁
15 J・K区：16～27.土師器皿，28・29.瓦器羽釜



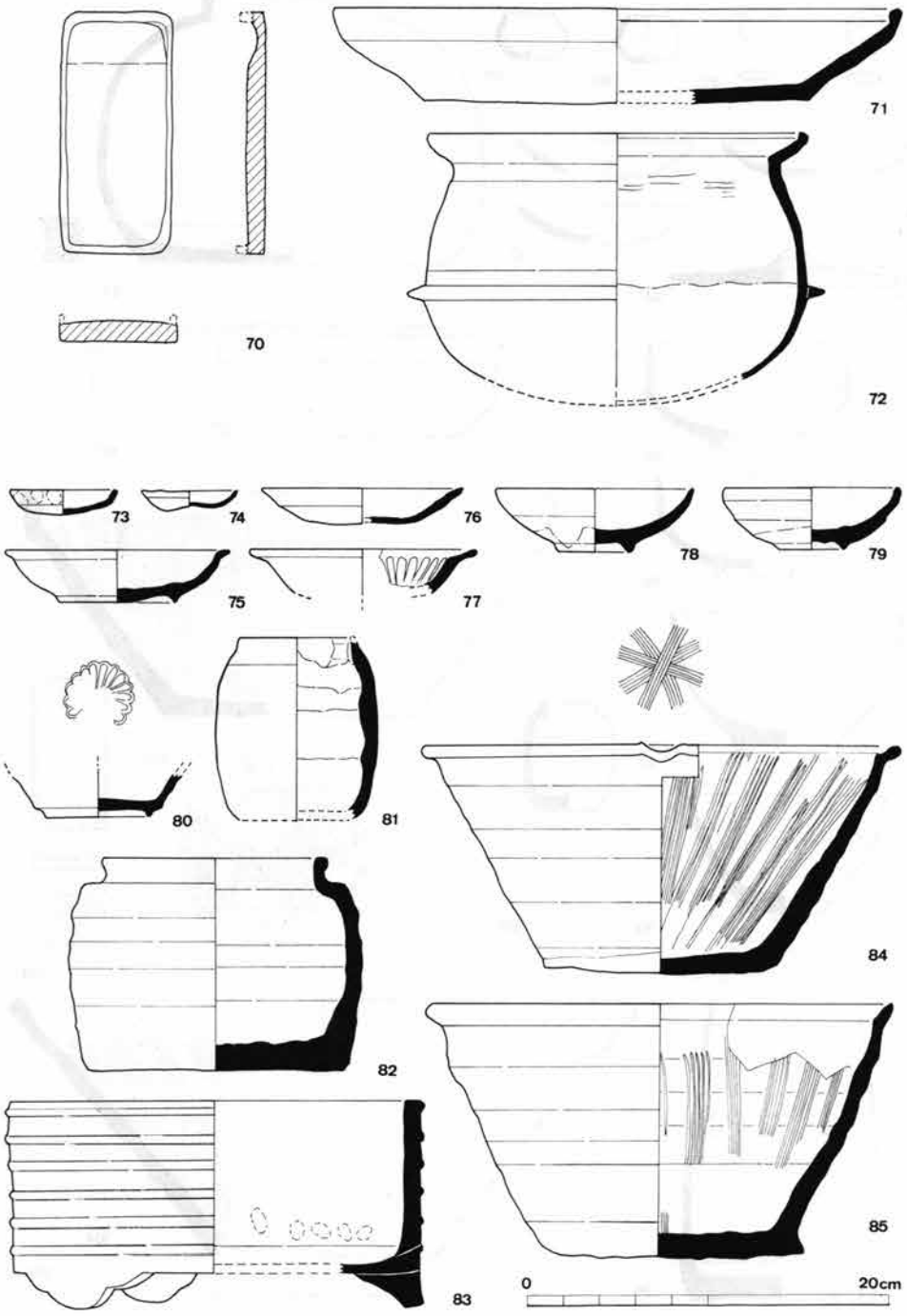
第42図　　S D99出 土 遺 物 実 測 図

S D99：30～35. 土師器皿，49. 瓦器すり鉢，48. 信楽すり鉢，46. 美濃瀬戸皿，42～44. 美濃瀬戸天目茶椀，36. 瀬戸皿，47. 備前すり鉢，45. 備前甕，40. 青磁椀，41. 青磁香炉，37～39. 青花磁器



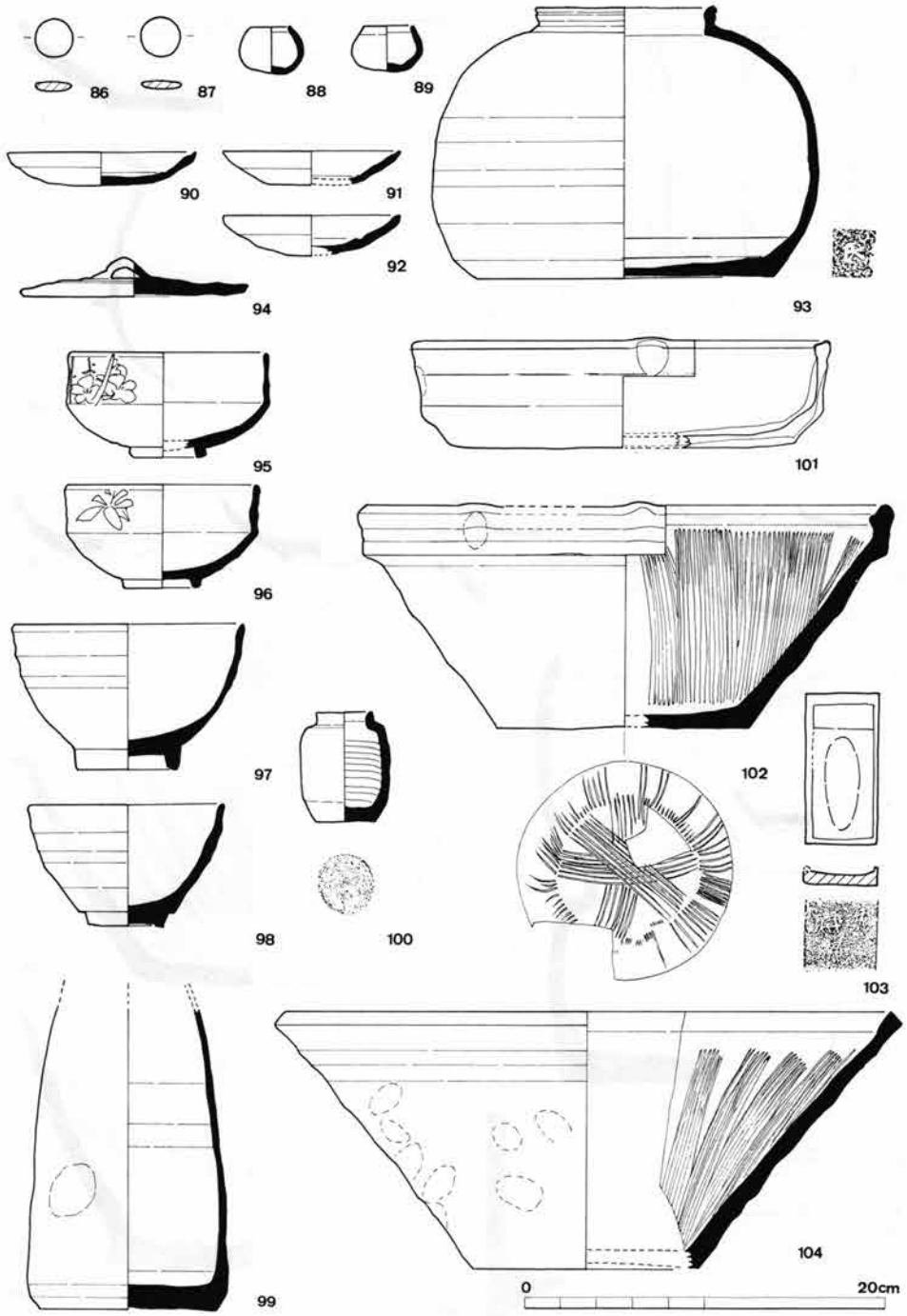
第43図　　ＳＫ22・ＳＤ96 出 土 遺 物 実 測 図

ＳＫ22：50～54. 土師器皿，58. 土師器鍋，55. 唐津皿，56. 瀬戸天目茶椀，57. 華南三彩盤
ＳＤ96：59～60. 土師器皿，66. 塩壺の底部，61～63. 唐津皿，64. 伊万里ちょこ，65～69. 青花磁器硯



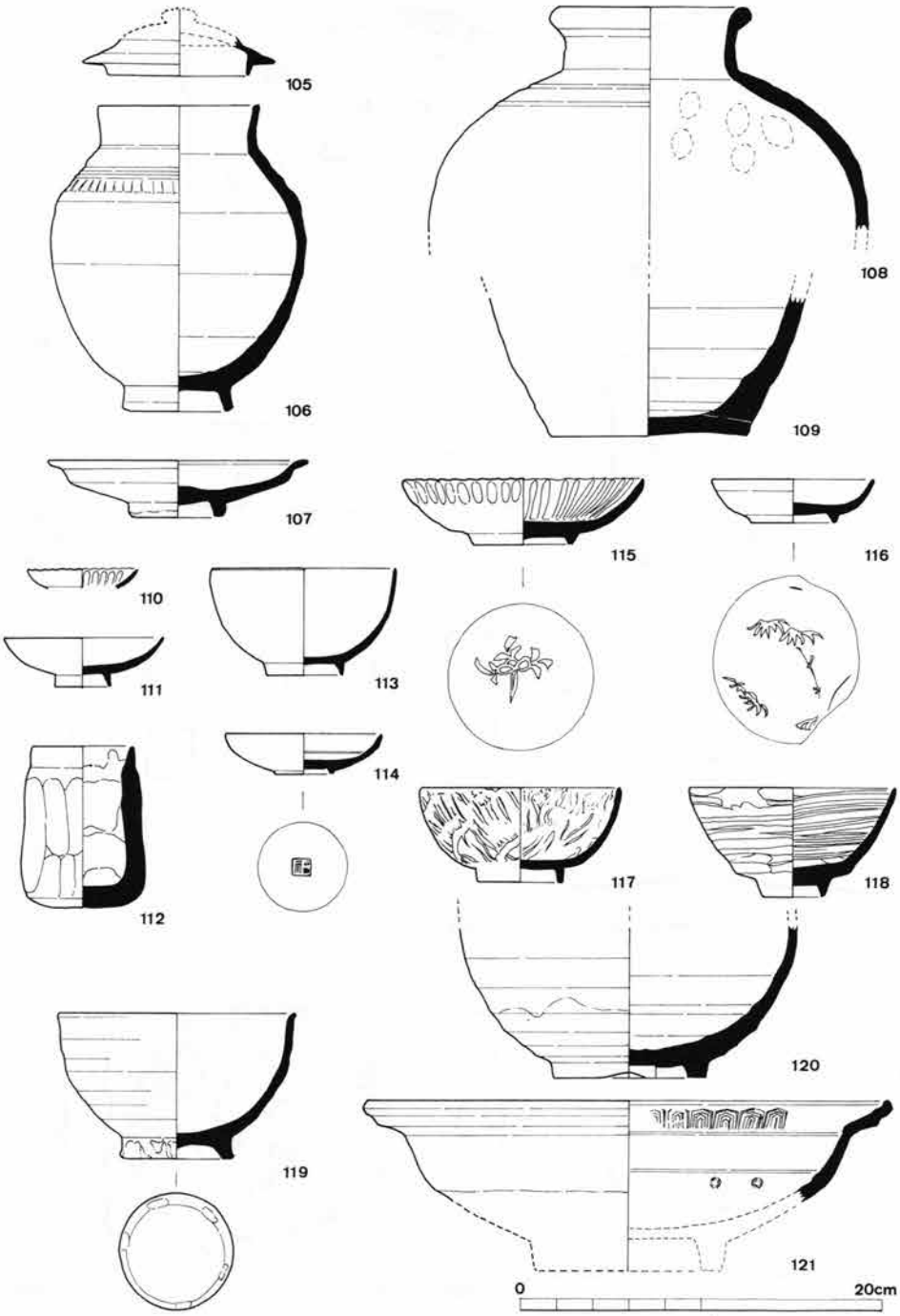
第44図　　S D96・S D108 出 土 遺 物 実 測 図

S D96：72. 土師器皿，71. 丹波盤，70. 石製品硯
S D108：73～76. 土師器皿，83. 瓦器三足火舎，82. 丹波壺，84～85. 信楽すり鉢，
78～79. 唐津皿，75. 美濃瀬戸皿，　77～78. 瀬戸皿，81. 焼塩壺



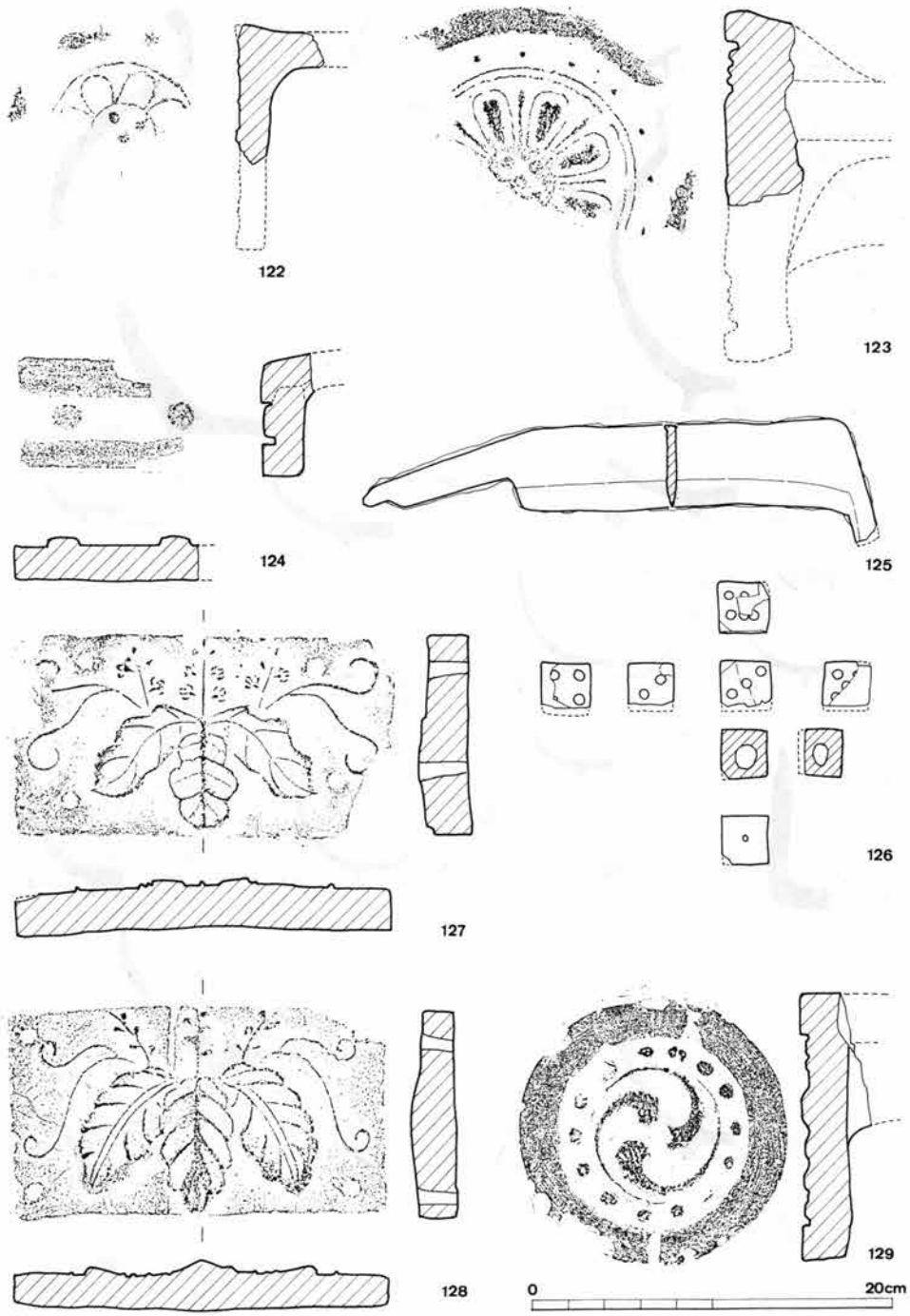
第45図　　ＳＫ58 出 土 遺 物 実 測 図 (1)

ＳＫ58：90～92. 土師器皿，88・89. 土師器壺，102. 堺焼すり鉢，95. 京焼椀，96. 美濃椀，98. 美濃天目茶椀，97. 瀬戸椀，100. 美濃瀬戸茶入れ，93・108・109. 備前(？)壺，104. 丹波すり鉢，99. 丹波壺，101. 丹波盤，94. 信楽蓋，103. 石製品硯，86・87. 石製品碁石



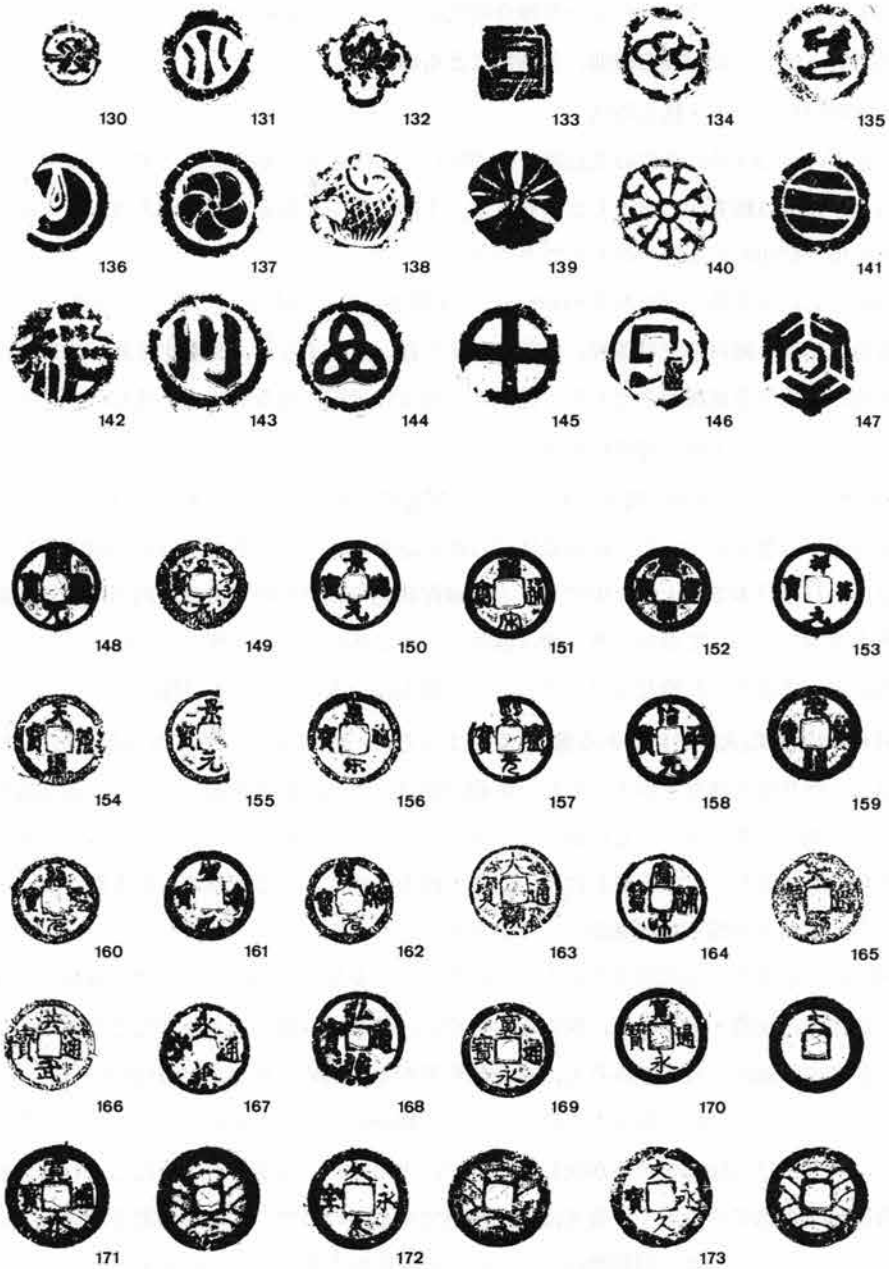
第46図　ＳＫ58 出土遺物実測図 (2)

ＳＫ58：114～116. 伊万里皿，117・118. 唐津椀，120. 唐津鉢，121. 唐津三島手鉢，107. 青磁皿，110・111. 白磁皿，113・119. 白磁椀，106. 青白磁壺，105. 青白磁蓋，112. 焼塩壺



第47図　包含層・SX104・SX106出土遺物実測図

表採：122. 軒丸瓦
精査中：123. 緑釉軒丸瓦，SX106：124. 金箔軒平瓦，125. 鉄製品鉈，126. 骨角製品サイコロ
SX104：127・128. 金箔方形飾瓦，129. 金箔軒丸瓦



第48図　泥面子・貨幣拓本図(S=1/2)

古いのは白色土器高杯や白磁椀などで10～11世紀に遡るであろう。次いで土師器皿が12世紀前半であろう。青磁皿は竜泉窯系のもので，12世紀後半から13世紀前半である。青磁壺(第41図12)は，竜泉窯系のもので色調からすれば元代に属するものであろう。瓦器椀は，外面下半までもミガキが若干観察でき，12世紀後半のものであろう。大和型か。

以上のように，平安時代から一部鎌倉時代にかけての遺物について記述した。この他に瓦器羽釜・鍋や，中国製白磁皿，黄釉盤などもあった。

②室町時代～安土・桃山時代

当該期の遺物は特に応仁の乱以降の戦国時代に属するものが圧倒的に多い。

15Ｊ・Ｋ区の精査中に出土した遺物には，土師器皿や瓦器羽釜などがあり，およそ15世紀末～16世紀初めにかけてのものであろう。

西洞院大路西側溝と思われるSD99からは多種多様な遺物が出土した。列挙すると，土師器皿，美濃・瀬戸の天目茶椀，備前甕・すり鉢，信楽すり鉢，瓦器すり鉢，中国製青花磁器椀，竜泉窯青磁椀などである。備前すり鉢は15世紀に遡るものであるが，ほとんどは戦国時代から安土・桃山時代にかけてのものである。

SK22は江戸時代初期に属するもので，土師器皿・鍋や唐津皿，瀬戸天目茶椀および中国製華南三彩盤が出土した。唐津皿には目跡が認められない。華南三彩盤(第43図57)は，管見によれば日本で出土した中でもっとも遺存状態のよいものである。内面は緑を基調に褐色と黄色で彩られており，外底面は露胎で，褐色味のあるザラザラした胎土である。口縁部はヘラで成形され輪花を呈している。内底面は一本の花がヘラで描かれている。

SD96は西洞院大路路面にある溝(あるいは長方形土坑)である。遺物は土師器皿のほか，唐津皿，青花磁器椀などが出土した。第43図69は，内面に影青を施している。青花磁器の中には人物や草花を描いたものがある。他には丹波盤や土師器釜や石硯がある。土師器釜は大和で生産されたものと思われる。安土・桃山時代になると京都でも出土例が点々と知られる。本例は胴部下半に煤がついており使用品である。

SD108は近衛大路南側溝であるが，この埋土から多数の遺物が出土した。種類は土師器皿，唐津皿，美濃・瀬戸の皿，焼塩壺，丹波壺，信楽すり鉢，瓦器火舎などである。この内，信楽すり鉢に注目してみると，口縁部形態が２種認められる。１種は84の例で，口縁端部を外側へ水平に折れ曲げたもので，もう１種(85)はあまり屈曲しないものである。ただし，この例は口縁部の歪みが激しいもので，半周くらいは前者のようにしている。なお，前者は暗赤褐色でやや重く，後者は明赤褐色でやや軽いので，生産地が若干相違しているかもしれない。信楽焼と同形態の，たとえば伊賀焼の存在を示すものかもしれない。

当該期の遺物の中で異彩を放つのはSX106から出土した骨角製のサイコロと，鉄製のナタの刃である。サイコロは通有のとおりに目をつけている。すなわち１と６のように裏面の数字を足すと７となるものである。そして，内側はやや楕円形に刳り抜いている。ナタの刃は先端部を突出させたものであり，この部分に関しては現代のものと大差ない。ただし，柄の部分は「く」の字に曲げており，この点が相違するかもしれない。

この他に異彩を放つのは，金箔瓦を始めとするSX104から出土した瓦類である。種類は，方形飾り瓦(金箔の有無あり)，巴文軒丸瓦，軒平瓦である。方形飾り瓦は桐文を凸面で表現しているが，基本的には五七の桐であった。ただし，一部には第49図や第47図127のように変形の五七の桐文(実体は四七の桐文ともいうべき)もあった。また，桐文のモチーフも数種類あり，複数の型で作られたことが知られる。

下図の瓦は表面が変形した五七の桐文をあしらっており，裏面にヘラ様の道具で文字，あるいは記号を刻んでいる。アルファベットとするなら「Me，S」と読める。今後調査が必要な出土品である。なおSX104からは整理箱20箱分出土した。

③江戸時代

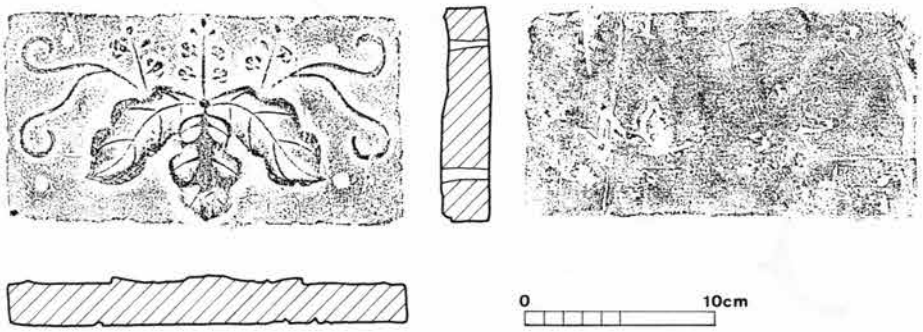
当該期の遺物は，特に18・19世紀に属するものが多い。これは二度の大火による火災後の後始末に伴う土坑出土品が多いためである。

SK58は天明の大火に伴う土坑である。ここからは当時の日常生活用具が多数出土した。

遺物の種類を列挙すると，碁石，土師器皿，京焼風椀，瀬戸灰釉椀，美濃・瀬戸天目茶椀・茶入，備前壺，丹波壺・盤・すり鉢，信楽蓋，堺焼すり鉢，唐津椀・鉢・大平鉢，伊万里椀・皿，焼塩壺，中国製青白磁壺・同蓋，白磁皿・椀，青磁皿，李朝の椀などである。

調査地西北部の住人は，前代からの持ち物も多数あり，少なくともこの地に百年以上住んでいたのではなかろうか。

土師器皿は，内底面の見込みのヘラ沈線が明瞭で18世紀後半の特徴をもつものである。丹波盤(101)は，残存が4分の1程度で不明な点が多いが，口縁部を4か所ほど指で外側から押さえて窪ませている。なお，長石が多量に含まれているので，信楽焼の可能性もある。美濃・瀬戸の茶入(100)は完形品であるが，この他にもう1点出土した。丹波壺(99)は胴部が薄手で，内面にはロクロ目が残っている。外底面の端には「▲」のヘラによる窯印がある。窯印は備前と思われる壺にもある。それは外底面の中央に笵により「太」と刻まれ



第49図　金箔方形飾り瓦実測図

ている。窯印ではないが，石硯(103)の裏面には「東海硯」と刻まれていた。堺焼すり鉢(102)の内底面には櫛様のもので「＊」のように目を入れていた。

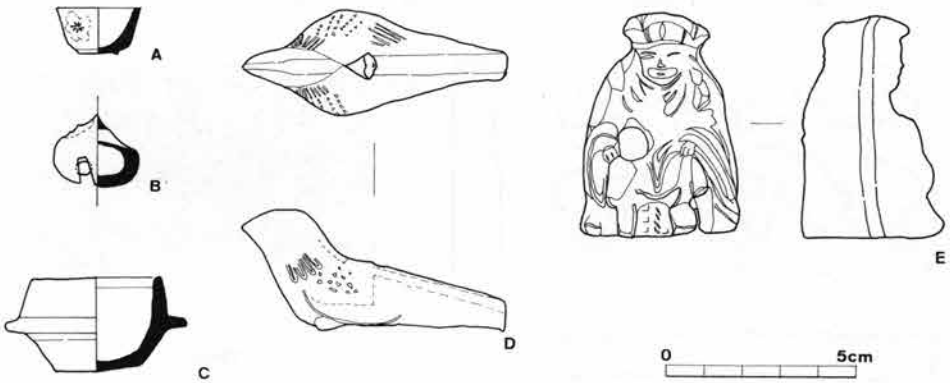
唐津焼の中には117のようなハケメ椀があるが，肥前での編年(注8)では1690～1760年代に比定されている。また118のような横縞模様のハケメ椀も17世紀末～18世紀前半に比定されている。

中国製青白磁壺(106)は，薄い空色をしたもので，火災のためか表面はザラザラとしている。105はこの蓋と思われる。

李朝の椀と推定(注9)した119は，内外面とも施釉したもので，貫入も全面に認められる。調整はヘラ削りと思われ，外形は5面ほど横方向にのびた面が認められる。焼成時は重ね焼きを行ったようで，高台の畳付けに図のとおり砂が付着しており，いわゆる「砂目積み」を行い，他の製品と融着しないようにしていた。胎土は白色で堅い感じを受けるものであるが，砂粒は全然含まない。

これらの遺物のほか，道路部分で多数の泥面子を検出した。その種類は40種で，総数105もあった。今回呈示したのは18種類にすぎない。表面のモチーフは家紋(桐文・丸に三引竜・丸に十字など)や文字(川・兵・申・戸田川など)，更には動物(猿・ふくろうなど)などがある。泥面子は子供の玩具であるが，この他，第50図のような鳥笛や鈴，羽釜，ほてい？などが土製品で作られている。

なお，泥面子は金刺伸吾氏(注10)によれば，享保年間(18世紀前半)から登場した子供の玩具で，粘土を型に詰めて焼いたものである。遊び方はいろいろあるが，地面に六から十六位の区画を描き，一定の位置から約束で定めた場所，あるいは自分の好きなところに面子を投げ入れ，次の面が更に前者の投げた面子を目がけて投げ入れる。それが前のものに重なれば自分のものとなり，線の上にかかれば逆にとられる。この方法を「きづ」という。その他，



第50図　玩具・ミニチュア製品実測図

地面に描いた円形から互いにはじき出したり，投げあって表が出たものを勝ちとする遊び方もある，という。

次に多数検出したものに銭貨がある。付表1のとおり，総数は194枚で，不明40枚を除くと27種類154枚となる。この内寛永通宝は95枚で6割強を占めている。日本銭は他に文久永宝の4枚がある。中国銭をみてみると，唐銭が2枚，北宋銭43枚，金銭1枚，明銭4枚である。

これらの遺物のほか，銅や鉄の製品が多数出土した。種類を列挙すると鉄釘・針金・煙管の吸口・銅製ピン・銅製耳かき・飾り金具・棒状銅製品・銅板・箸・銅鏡など100点以上あった。

付表1　銭　貨　一　覧　表

銭貨種類	初鋳年(時代)	枚数	図面番号	備　考
開通元宝	621（唐）	2	148	
至道元宝	995（北宋）	1	149	
咸平元宝	999（〃）	1		
景徳元宝	1004（〃）	2	150	
祥符元宝	1008（〃）	1	153	
天禧通宝	1018（〃）	5	154	
天聖元宝	1023（〃）	2		
景祐元宝	1034（〃）	1	155	
皇宋通宝	1039（〃）	9	151・156	字体2種
至和元宝	1054（〃）	1		
嘉祐通宝	1056（〃）	3		
治平元宝	1064（〃）	2	158	
熙寧元宝	1068（〃）	3	157・162	字体2種
熙寧重宝	1068（〃）	1		
元豊通宝	1078（〃）	4	152	
元祐通宝	1093（〃）	2	159	
紹聖元宝	1094（〃）	2	160	
元符通宝	1098（〃）	1		
聖宋元宝	1101（〃）	5	161	字体2種
大観通宝	1107（〃）	1	163	
宣和通宝	1119（〃）	1	164	
大定通宝	1178（金）	1	165	
洪武通宝	1368（明）	2	166	
永楽通宝	1408（〃）	1	167	
弘治通宝	（〃）	1		
寛永通宝	1636（日本）	95	169・170・171	字体3種
文久永宝	（〃）	4	172・173	字体2種
不　明		40		
総　数		194		

また，骨や壁土，金製の煙管の吸口などが出土したが，そのほとんどは攪乱坑からの出土であった。

5. ま と め

以上のように，多様な調査成果があったが，最後に本稿では文献史料を加味しながら，当該地の変遷を記述し，現時点での把握を図りたい。

(1) 当該地の変遷

第52図と第53図に示したように，現時点では6期に分けることができる。以下，これらの図を見ながら変遷を辿りたい。

I 期

8世紀末から13世紀までの状況である。歴史的環境の項で記述したように，平安京造営時の西洞院大路の幅は8丈(約24m)(注11)であった。その幅は両側にある築垣の心々距離を示したもので，第51図にあるように，一端には築垣6尺(心々なので3尺)，犬行5尺，側溝4尺が設定されてい

た。これらの設備を除いた路面は56尺(約16.7m)である。残念ながら平安京時代の遺構面はほとんど遺存していなかったが，西北の部分は確認することができた。第52図を参照すると，最近の発掘成果による平安京条坊復原案のモデルを示している。一点鎖線が築垣の心であり，あとは第51図の西洞院大路の断面概念図と対照していただきたい。再び第52図に目を転ずると，西北部一西洞院大路西側溝推定線の内，西肩にSD163がほぼ合致していることがわかる。この溝から遺物は出土しなかったが，埋土から鎌倉時代以前と推定できることから，この溝を西洞院大路西側溝に比定しても大過なかろう。溝の肩の断面は内湾していたので，一部崩落しているのかもしれない。

この溝のすぐ西には柵SA119とSA131があるが，これらは平安時代の推定築垣心より1.5m東にあり，しかも出土遺物が鎌倉時代であることから，徐々に築垣もしくは柵が東へ移動したことがわかる。これに伴って西北部の町が拡張したと推測できる。

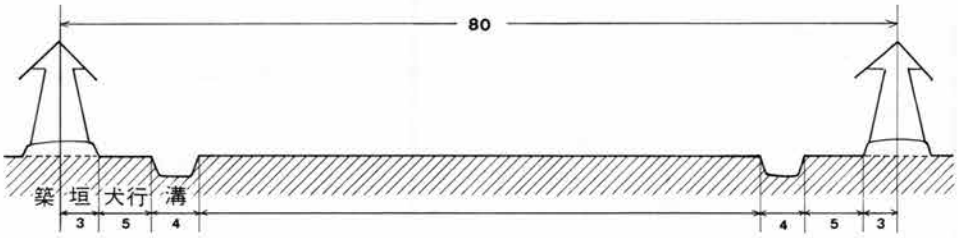
調査地東部一近衛大路の路面の中央から南流する溝SD142を検出したが，埋土から平安時代から鎌倉時代にかけての自然流路と推測できる。

今回の調査地は，官衙町に関しては片隅が判明しただけであり，その変遷については不明な点が多い。少量出土した緑釉瓦や重圏文軒丸瓦でその片鱗が知られるのみである。なお，修理職町から南下する道路が町尻小路(注12)と呼ばれ，左衛門町の北通りの土御門以北が町口と呼ばれた11～12世紀中頃は，これらの町が機能していたと言えよう。そして，その後南下する道路は単に町通と呼称された12世紀中頃以降もかなりな賑いを示していたことが地名から類推することができる。

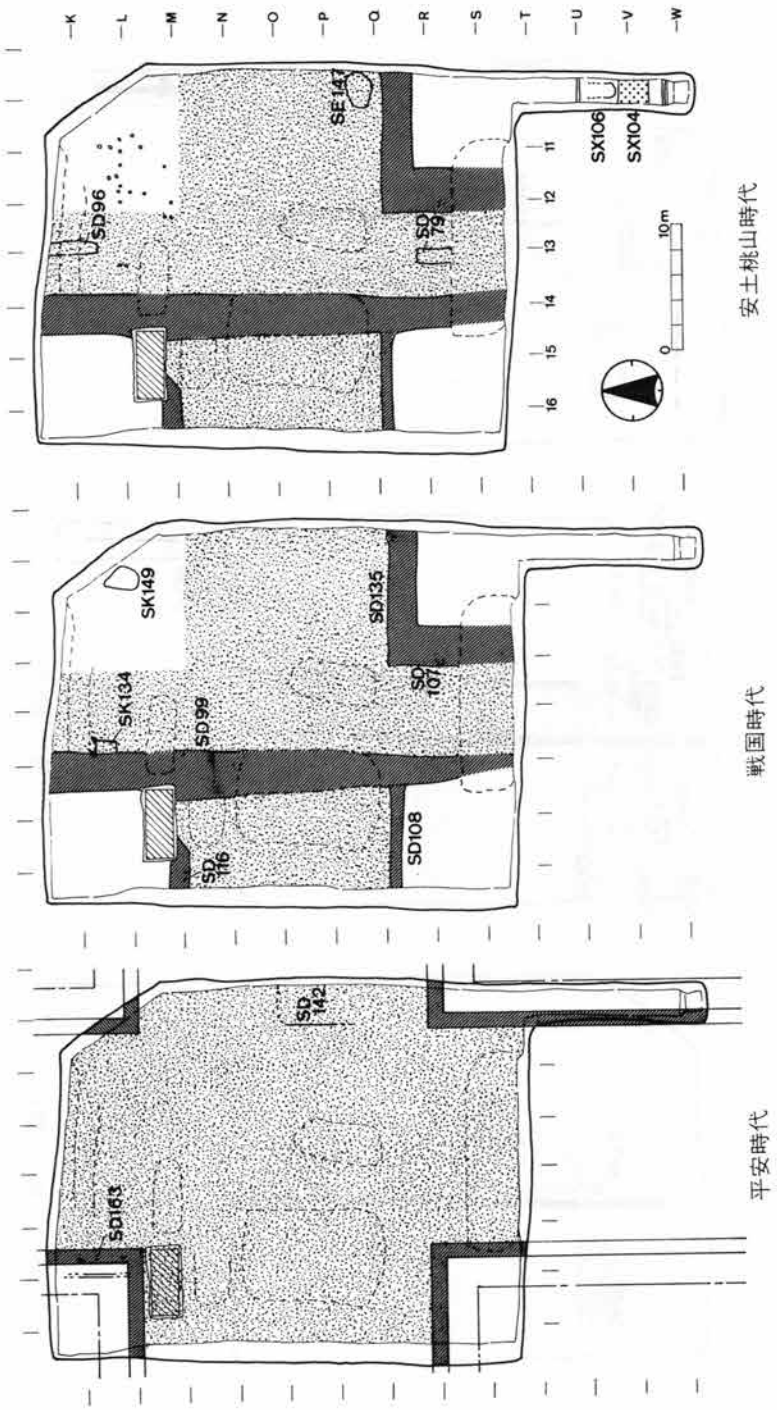
II期

15世紀から16世紀末までの時期である。かつての大路側溝が変容した時期でもある。

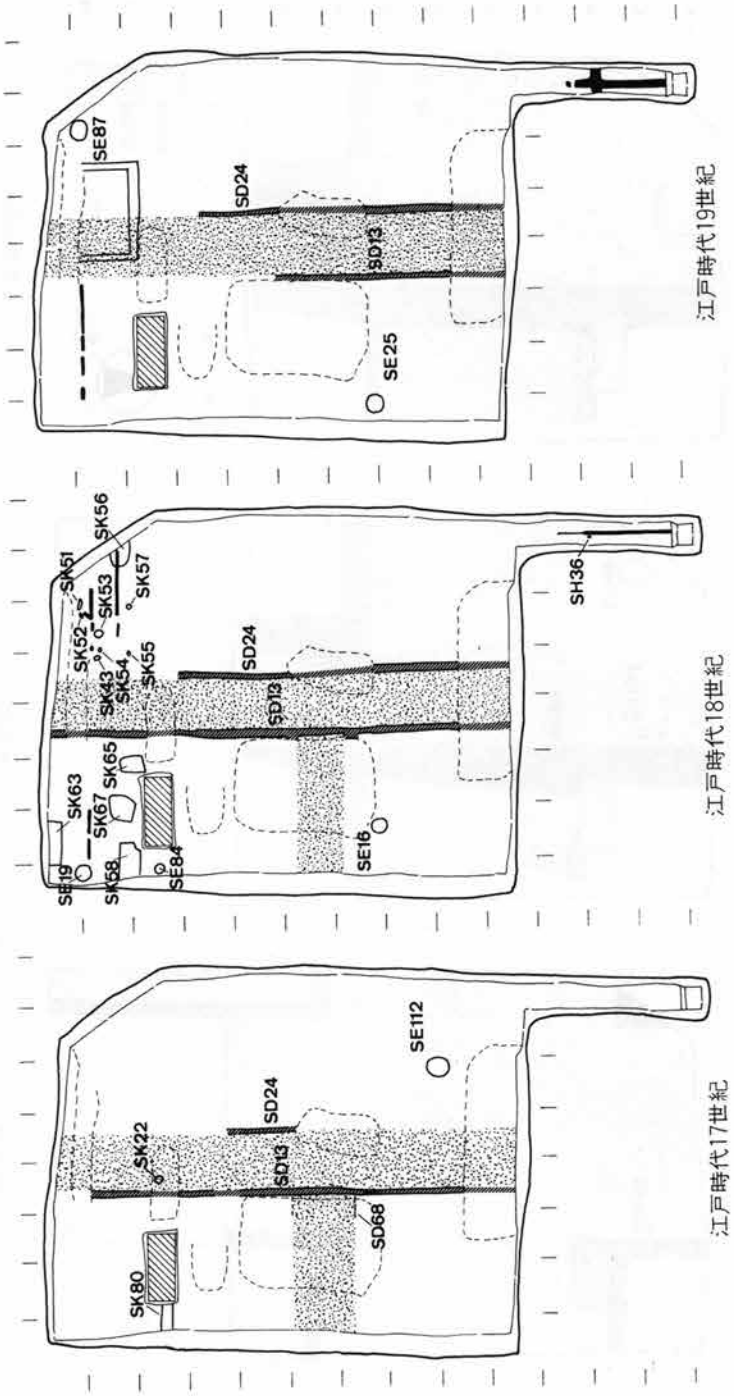
周知のように15世紀後半の応仁・文明の乱によって京都は大打撃を受けるが，当該地の様相によれば15世紀末頃から活況を呈するようになる。そして，町はI期よりも拡張されたようである。今，側溝についてみてみると，西洞院大路西側溝(SD99)の場合，南北に切れ目なく掘削されていたことが判明した。幅は北で約3m，南で約1.5mであるので南に



第51図　西洞院大路の断面概念図



第52図　主要遺構変遷図(1)



第53図　主要遺構変遷図(2)

いくに従って細くなっている。東側溝については，北東部では確認できなかった。それは後世の削平が著しかったことによる。南東部については，幅約3mの溝(SD107)が検出できた。これは，近衛大路の南端から掘削されており，西側溝とは相違している。SD107は第52図のとおり，近衛大路南側溝SD135と接続している。溝の底は相違しており，SD135の方が約20cm浅い。平安時代に比べて溝は西洞院大路側に進出しており，その分だけ町が拡張したと推測できる。なお，当該期の西洞院大路の幅は約7mである。路幅だけで計算すると，平安時代より約48%縮小したことになる。

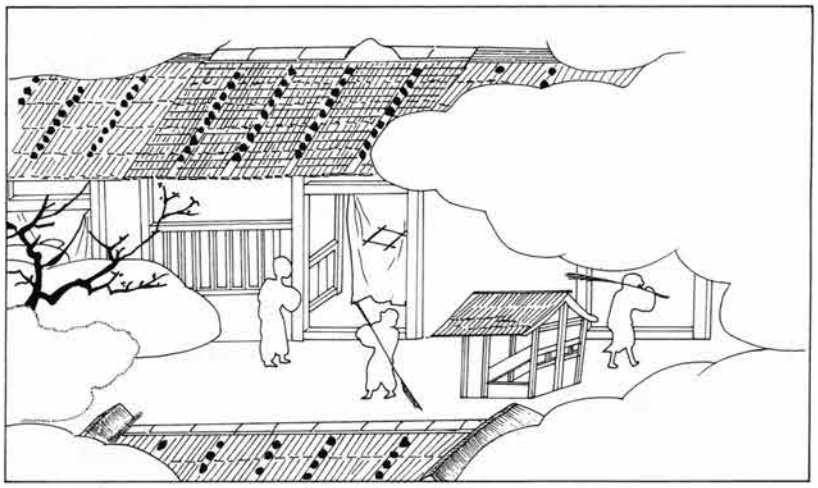
近衛大路の場合は両方の側溝が検出された。まず，北側溝SD116の場合は，約4.1m区間のみ検出できたが，溝の幅は15ライン付近で狭くなっていた。しかし，この先はコンクリート槽のため確認できず，西洞院大路との接点は不明である。なお，側溝は平安時代の推定地より約4m南にある。

南側溝SD108の場合は，他の側溝と比べて幅1.2mと狭い。断面は逆台形(第31図参照)である。この溝は平安時代の推定地とほぼ合致している。なお，近衛大路の幅は約16mであり，路幅だけで計算すると，平安時代より約32%縮小しているが，西洞院大路のそれと比較すると縮小率は低い。

調査地の西南部は左獄であったが，記録(注13)によれば治承2(1178)年4月5日に火災があり，次いで建保4(1216)年正月7日にも獄舎は焼失している。そして，天正13(1585)年になって豊臣秀吉が内裏に接近しているとの理由で，西洞院油小路あたりに移転したという。したがって，安土・桃山時代までは獄は機能していたのであり，これが他の地点のように道路を侵蝕して町が拡大するということにならなかった理由であろう。

Ⅱ期は初めに述べたように，応仁・文明の乱以後に当たり，戦乱の時期であった。このため，洛中・洛外の住人は自衛のための施設を構築した。それが構(かまえ)と呼ばれるものである。形状は町の外に堀を掘り，内側に柵などを設けたもので，上記の側溝はその一例となろう。溝の幅の相違を考えれば，近衛大路を境として南北の町内は別々の構の堀を掘っていたといえる。なお，左獄の東を限る幅約2.4mの溝や，北を限る幅1.2mの溝は，別な意味での防衛機能を備えていたともいえようか。ただし，『平治物語絵詞』の信西の巻の獄門の場面には溝が描かれてはなく，更には獄舎のすぐ近くにのぞき込むように3人の人々が描かれていることから，通常，獄門は開かれ(注14)ていたことになる。これが1期のみの状態か，Ⅱ期も同様であったかは知るよしもないが，今回の発掘成果は新たな視角を持ち得る可能性を示したのではなかろうか。

さて，調査地西北部に目を転ずると，ここは完全な構といえよう。東を限る溝は幅約3.1m，南のそれは約1.9mであった。ここで注目すべきなのは，交差点のコーナーから北



第54図　洛中洛外図にみる便所（注文献から改変トレース）

へ約4mの地点で，溝の底が浅く掘り残されていたことである。検出面から約50cmしか掘られていず，そのすぐ北の深さは約1mであった。防備に支障が生じるが，その点については土坑SK134の存在によって説明がつく。遺構の項で説明したように，簡単な建物がこの土坑の中に想定できるのだが，これらの構造物は便所がもっとも可能性が高い。前述したように防備に若干不安があるか所には，このような建物で遮蔽していたのである。今回の遺構は，設置場所や構との関連で考えると，調査地西北部の町共同体が管理したと推定でき，高橋康夫氏[注15]が推論しているように，「し尿を近郊村落の農民に売り，代金を町入用費に繰り込んで，町の運営活動に役立てた」のであろう。公衆便所遺構の発見は，16世紀末の町共同体のあり方の一端を知る上で，貴重な資料となったのである。

ここで，近隣の発掘調査成果について述べる。第55図は，昭和59年度に(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した成果と，当該地を図示したものである。この調査でも戦国時代の近衛大路北側溝が確認されている。それは中央部が異常に深い断面漏斗状のもので，報告の図版をみると，X＝−108,895m付近にあったようである。当該地で検出したSD116は，その延長線上にある。

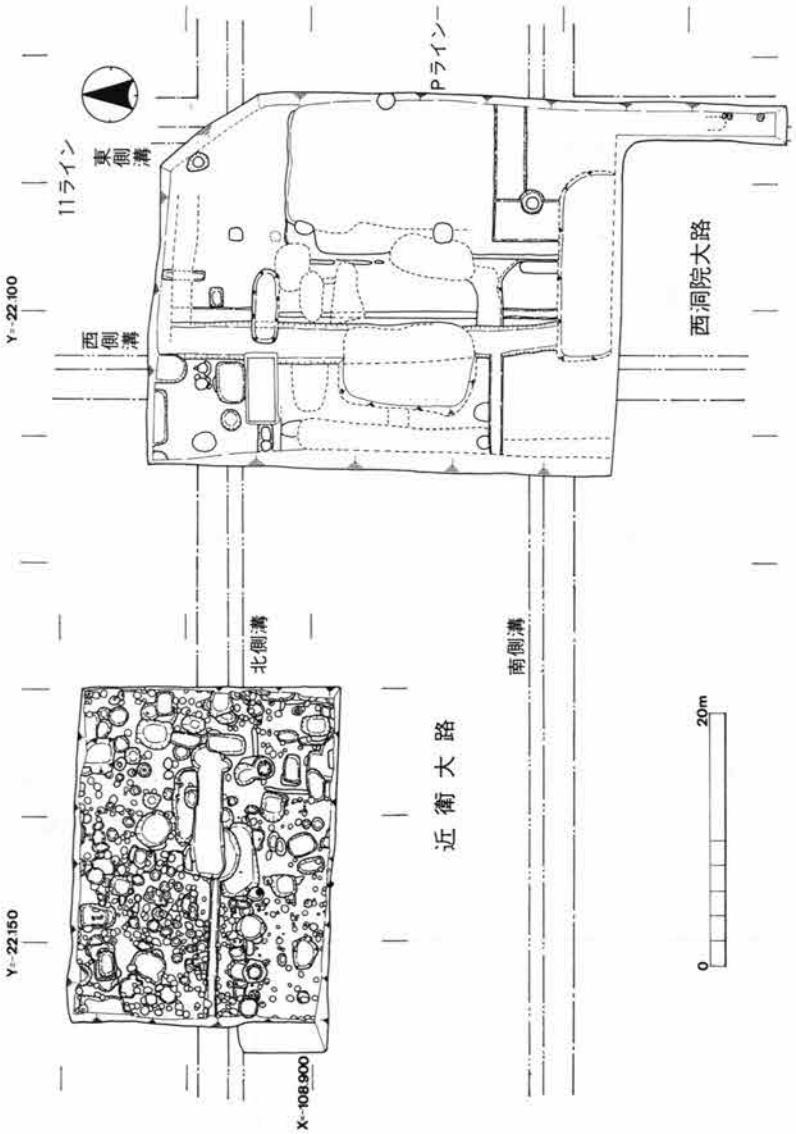
III期

16世紀末から17世紀初め，いわゆる安土・桃山時代に相当する。遺構としては，瓦溜めSX104やその下で検出した建物跡，あるいは北東部で検出した建物跡がある。道路はそのまま踏襲されるようであるが，あるいは江戸前期に比定している道路が遡る可能性もある。

金箔瓦の出土状況からすれば，北東部と，南東部に屋敷があったことが知られる。金箔瓦の文様は桐文で，箔のあり方から豊臣秀吉の聚楽第造営時(1586年)と推定できる。文献[注16]

及び過去の発掘調査の成果[注17]から，これらの金箔瓦が各大名屋敷の屋根に葺かれていたことはほぼ間違いなく，新たな資料となった。なお，調査地の西隣は茶屋四郎次郎の屋敷跡であるが，当該期は豊臣秀吉配下の武将であった前田玄以の屋敷であった[注18]。

これらの屋敷の内容は不明な点が多いが，今回の成果によって南東部については，通りの中に井戸SE147を設け，その南に金箔瓦を葺いた小規模な建物のあったことが判明した。もとより，中心の建物は調査地外である。付表2は，この建物に葺かれていた瓦類の点数表である。これは破片数であるが，その傾向をみてみると，平瓦が約7割を占め，軒先を



第55図　京都市調査地との合成図

飾る瓦は約3割(181点)で，その内，金箔瓦は約3割を占め，結局，金箔瓦は全体の瓦の約1割を占めることがわかる。なお，方形飾り瓦は棰木先に使用された場合と，棟の側面に使用された場合があるが，いずれにしても小振りであるので，築垣用の瓦と言えるのではなかろうか。

IV期

おおよそ，17世紀を想定している。当該期に全体を盛土して，前代とは全く違う石組みの側溝を造ったことがわかる。これによって，道路の幅は，西洞院大路(通り)の場合，約4.4mとなり，平安時代と比べると約72%縮小したことになる。近衛大路(出水通り)の場合は約78%縮小している。

寛永14(1637)年の洛中絵図をみると，道路は幅狭く描かれている。秀吉が天正18・19(1590・1591)年に行った都市改造によって，平安京以来の一町(約120m四方)の中央に新たな道が造られたが，前掲の洛中絵図にも，それがはっきりと描かれており，石組みをもつ側溝は，この時期まで遡るかも知れない。なお，調査地の西北部は「町屋」と書かれており，その範囲も表現されていることから，西隣の茶屋四郎次郎という豪商クラスではないにしろ，中級程度の都市町人層が居住していたのではなかろうか。

おそらく，商家が立ち並ぶ賑やかな状況であったのだろう。そして，これらの富裕な人々の持ち物が華南三彩盤であったのだろう。

V期

おおよそ，18世紀に相当すると考えている。西洞院通りの幅は前代と変わらないが，近衛大路(出水通り)の場合は更に幅が狭くなり，約3.5mとなった。平安時代のそれと比較すると約85%縮小している。当該期は多くの人々が周辺に居住したらしく，生活場所を明確に示す漆喰溝が各所で検出された。しかし，天明の大火によって当該地は大打撃を受ける。

天明8(1788)年，正月の深夜に賀茂川の東，建仁寺町四条の南，櫟(どんぐり)の辻子の北側より出火し，折からの風にあおられ京都中を焼き尽くした。このため，「南京交(こうち)跡瀬戸いまりのさまざまの陶器どもかさねあげしままにて，大路小路にやけくづれぬるがひしとすきまもなく(注19)」という状態であった。つまり土倉などに保管してあった中国やベトナム方面の陶磁器や瀬戸，

付表2　SX104・SX106出土瓦点数表

種　類	軒　平		軒　丸		方形飾り		平		丸		総数
金箔 有・無	4	10	10	6	52	9	0	438	0	90	619
%(個々)	0.6	1.6	1.6	0.9	8.4	1.5	0	70.8	0	14.5	
点　数	14		16		61		438		90		
%(全体)	2.3		2.6		9.9		70.7		14.5		

伊万里などさまざまの陶磁器が足の踏み場もないほど散乱していた状態であった。しかし，このようなすさまじい大火であったが，復興は急速に行われたようである。なお，土坑の中には多数の焼けた壁土の断片が捨てられていた。部厚いものが多く，土倉などの施設があったらしい。

天明の大火層は，発掘調査によって至る所で確認されているが，膨大な量の棧瓦と，数cmに及ぶ，部厚い焼土層が特徴的に検出される。この焼土層を構成するのは，実は壁土であることが多く，京中至る所に瓦を葺いて壁土を使用した建物，おそらく土倉のようなものが建っていたと推定できる。

VI期

おおよそ，19世紀に相当すると考えている。当該期の前半の状況は，V期と大差はなく，通りの周辺に人家が建ち並んだ状況が理解できる。

嘉永7(1854)年4月6日，正午の頃に大宮御所より出火し，京中を焼き尽くした。この年の11月に安政と改元されたので，安政の大火と呼ばれる。今回の大火は調査地周辺に大打撃を与え，復旧作業はあまり進まなかったようである。そのため，文久2(1862)年に京都守護職に命じられた会津藩主松平容保は，役邸の候補地を捜していたが，復興の遅れていた当地に目をつけた。

『御勝手帳』によると，「東西新町より西洞院通り迄，南北下長者町より下立売通迄之町家敷地幷出水通釜座通道敷」とも屋敷地の候補に上がっている。地坪は合計8,870坪2分3厘で，この内7,512坪9分4厘が敷地であった。詳細は建家坪3,097坪7分6厘，土倉建坪182坪9厘，地屋敷坪1,357坪2分9厘である。役邸建設のため幕府は立退料や家作代を払っている。この結果，西洞院通りは約280m区間西へ20mう回することになった。また出水通りも分断されることになった。

慶応3(1867)年，大政奉還のために役邸は廃止となった。その後京都中学校→市中取締所→京都裁判所→京都府庁と変遷した。現在，中央にある旧館は明治34年，工費34万円，4か年継続事業で建造されたものである。

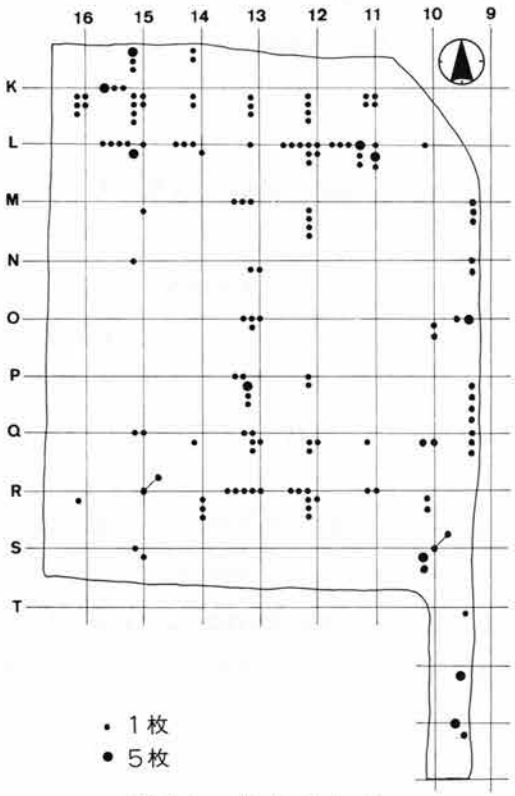
以上，長々と当該地の変遷を述べたが，それでも調査概要に過ぎないことを付記しておく。最後に銭貨の分布について若干記して終わりたい。

(2)銭貨分布図について

出土遺構のさまざまな銭貨を一率に扱うことは危険だが，今回の場合，攪乱坑から出土するものも多く，ここでは中・近世に流通した銭貨をひとまとめにして分布図を作成した。

図をみて気づくのは，分布の稠密な地点のあることで，特に北西部と北東部に目立つ。これはとりも直さず住人の稠密さと関係している。この点は南東部も同様である。次に目

立つことは江戸時代の西洞院通りに多いことである。これは通りの側溝でよく検出されたことによるが，どういう理由があるのだろう。銭貨が埋没した理由は，ひとつには落し物ということがあろう。そして，もっとも多かった場合は，洪水や火災によって他の遺物と一緒に混じり込み埋没した場合であろう。居住地に多くみられるのは上述の点が大きく関係しているのだろう。しかし，これは側溝に多くみられる点の説明にはあまりなり得ない。



第56図　銭貨分布図

側溝に埋没した遺物の中には，泥面子も多くみられる。金刺伸吾氏[注20]によると，泥面子は享保年間には「めんがた」と呼ばれたらしいが，面の呪術的な力を頼って信者が家内安全や護符のために持ち帰ったものを，後に子供達が玩具として利用したらしい。そして，ついには玩具の意味合いが強くなり，享保年間から幕末にかけて盛行した。面子の中には天保銭などを真似たものもあり，あるいは泥面子と同様の遊び方を銭貨で行った可能性もある。また，単なる落し物ではなく，道路を使用した祭祀品として使った可能性も若干あり，今後，資料を分析し結論を出したい。

（伊野近富）

S D135

付表3 遺物観察表

種類	器形	番号	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調
土師器	皿	1	10.4	1.45	「て」の字状口縁。口縁部ヨコナデ。他はユビオサエ。	良	良	淡灰褐色
		2	10.3	1.65	同上	良	良	淡灰褐色
		3	10.6	1.15	同上	良	良	茶褐色
		6	15.5	3.2	口縁部を二段にヨコナデ。外底部に板状圧痕。	良	良	淡褐色
緑釉	椀	5	底径 8.9		全面施釉。外底面に糸切り痕。近江系。	良	良	黄褐色 釉は濃緑色
灰釉	椀	4	底径 7.4		外面一部施釉。内底面に重ね焼痕か。	ややザラつく。	良	灰色
白磁	椀	7	15		太宰府分類，白磁椀第Ⅱ類。	良	良	灰白色 釉はやや灰白がかった白

S D142

土師器	皿	9	14	2.3	口縁部二段ナデ。端部はややつまみ上げる。	良	良	淡褐色
		10	16.6	2.3	口縁部二段ナデ。布様のものを使用。一部ナデ上げる。	良	良	淡褐色
白土色器	高杯	11	15	(2.8)	口縁部ヨコナデ。体部ユビオサエ。	良	良	淡褐色
瓦器	椀	14	13.8	(3.8)	口縁部ヨコナデ。端部内面に沈線あり。	良	良	断面は白色 表面は淡灰色
		15	(13.2)	(3.9)	体部ユビオサエ。外面にミガキの痕あり。	良	良	断面は白色 表面は淡灰色
青磁	皿	13	(8.1)	(0.95)	ロクロケズリ。外底面施釉後ケズリ。竜泉窯系。	良	良	断面は灰色 釉は灰緑色
	花瓶	12	9.2	(13.4)	外面施釉。ロクロナデ。竜泉窯系。	良	良	断面は灰色 釉は青緑灰色
白磁	椀	8	14	(3)	太宰府分類白磁椀Ⅱ類。	良	良	断面は白色 釉は乳灰緑色

15 J・K

土師器	皿	16	5.25	1.35	口縁部ヨコナデ。体部ユビオサエ。	良	良	淡茶灰色
		17	7.2	1.4	同上	良	良	灰茶色
		18	8.6	1.75	同上	良	良	淡赤褐色
		19	8.5	2.1	同上	良	良	淡茶赤色
		20	8.7	1.9	同上	良	良	淡赤褐色
		21	8.6	1.75	同上	良	良	白茶褐色

種類	器形	番号	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調
土師器	皿	22	8.9	1.75	口縁部ヨコナデ。体部ユビオサエ。	良	良	淡茶褐色
		23	9.45	2.15	同上	良	良	淡赤褐色
		24	11.4	2.5	同上	良	良	淡茶褐色
		25	11.8	2.4	同上	良	良	淡茶褐色
		26	11.9	2.3	同上	良	良	淡赤褐色
		27	11.85	2.5	同上	良	良	白赤褐色
瓦器	羽釜	28	25.3	14.9	口縁部ヨコナデ。体部ユビオサエ。内面ハケメ(1cm/10～11本)	良	良	内面は白灰色 外面は黒灰色
		29	24.65	15.6	ほぼ同上。外底面掌オサエ。内面ハケメ(1cm/10本)	良	良	白灰色

S D99

土師器	皿	30	5.8	1.2	外面ユビオサエ。内面ナデ。	良	良	淡褐色
		31	5.7	1.3	同上	良	良	淡褐色
		32	10.7	1.9	口縁部ヨコナデ。体部下半ユビオサエ。	良	良	淡褐色
		33	10.1	1.9	口縁部ヨコナデ。口縁部に油煤あり。	良	良	淡褐色
		34	9.9	2.3	同上	良	良	淡褐色
		35	11.1	2.1	同上	良	良	淡褐色
瓦器	すり鉢	49	28.4		口縁部と内面はナデ。外面はユビオサエ。	良	良	淡黄灰色
信楽	すり鉢	48	27.8		外面ロクロナデ。	良	良	淡褐色
美濃瀬戸	皿	46	9.8	2.5	全面施釉。外面はロクロナデ。底部はヘラケズリ。	良	良	断面は淡褐色 釉は淡黄緑褐色
	天目茶椀	42	12	(4.3)	体部下半ヘラケズリ。他はロクロナデ。全面施釉。	良	良	断面は乳褐色 釉は茶褐色
		43	12	(5.4)	同上	良	良	断面は淡褐色 釉は黒褐色
		44	11.5	(5.5)	同上	良	良	灰色 釉は暗褐色
瀬戸	皿	36	10.8	(2.3)	口縁部と内面ロクロナデ。他はロクロケズリ。底部糸切り。	良	良	断面は灰色 釉は暗褐色
備前	すり鉢	47	37.4		ロクロナデ。	良	良	断面は淡灰褐色 内面は淡黄灰褐色 外面は赤褐色
	甕	45			一方向ナデ。	良	良	暗褐色

種類	器形	番号	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調
青磁	椀	40	底径 5.7		ケズリ出し高台。全面施釉。内面に花文。	良	良	断面は灰色 釉は黄灰緑色
	香炉	41	7.4	8.1	体部中央ロクロケズリ。他はロクロナデ。	良	良	断面は白色 釉は淡緑青色
青花磁器	椀	37	底径 4.8		ケズリ出し高台。内外面施釉。	良	良	断面は乳白色 釉は乳青緑色
		38	10.5	5.15	ケズリ出し高台。全面ロクロナデと施釉。見込みと外面に人物。	良	良	断面は白色 釉は乳青白色
		39	底径 5.8		ケズリ出し高台。他はロクロナデ。見込みに人物像。	良	良	断面は淡褐色 釉は乳青淡褐色

S K22

土師器	皿	50	5.7	1.5	外面ユビオサエ。内面ナデ。	良	良	淡褐色
		51	5.6	1.4	同上	良	良	淡褐色
		52	10.8	2.3	口縁部ヨコナデ。内面一方向ナデ。他は不調整。	良	良	淡褐色 油煤のため半分は黒色
		53	12.4	2.4	同上	良	良	淡褐色
		54	12.9	2.8	同上	良	良	淡褐色
	鍋	58	31.6	10.1	口縁部ヨコナデ。内面ハケメ。外面ナデ。	良	良	淡褐色 外面は暗褐色
唐津	皿	55	12.6	3.5	底部ロクロケズリ，他はロクロナデ。胎土目？。	良	良	断面は淡赤褐色 釉は灰色
瀬戸	天目茶椀	56	10.4		体部下半ロクロケズリ。他はロクロナデ。	良	良	灰白色 釉は飴色
三彩	盤	57	29～30	5.8	底部外周ロクロケズリ。他はヘラケズリ。体部ロクロケズリ。底部以外施釉。	良	良	淡黄色 釉は緑・茶・黄

S D96

土師器	皿	59	10.3	2.1	口縁部ヨコナデ。他はユビオサエ。油媒付着。	良	良	淡褐色
		60	13.2	2.4	同上	良	良	淡褐色
	釜	72	20.8	(13.6)	口縁部ナデ。内面上部タタキ。下はナデ。外面一方向ナデ。下半煤あり。	良	良	淡褐色
塩壺？	底？	66		(3)	全面ナデ。底部に焼けた痕あり。	良	良	淡褐色
唐津	皿	61	11.2	(2.7)	ロクロナデ。全面施釉。	良	良	断面は淡褐色 釉は淡黄緑灰色
		62	10.8	(3.2)	同上	良	良	断面は淡褐色 釉は淡灰褐色 絵は淡緑褐色

種類	器形	番号	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調
唐津	皿	63	11.8	3.2	ロクロナデ。ケズリ出し高台。内面は鉄絵（筆による）。胎土目。	良	良	淡黄褐色
丹波	盤	71	31.4	5.2	口縁部ヨコナデ。体部ロクロナデ。下部ロクロケズリ。底面ナデ。	良	良	断面は灰色 釉は暗褐色 淡褐色の点がみられる
伊万里	ちょこ	64	高台径 2		ロクロナデ。ケズリ出し高台。	良	良	断面は乳白色 釉は乳黄青色 線は青色
青花磁器	椀	65	11	(4.8)	ロクロナデ。外面に人物。	良	良	断面は乳白色 釉は乳青色
		67	12.6	5.9	ロクロナデ。ケズリ出し高台。外面と見込みに草花文。	良	良	断面は乳白色 釉は乳青白色・青灰色
		68	(9.4)	(4.8)	ロクロナデ。ケズリ出し高台。外面と見込みに人物。	良	良	断面は乳白色 釉は青白色・青色
		69	10.6	5.5	ロクロナデ。ケズリ出し高台。内面に影青。外底面に「大明成化年製」。	良	良	断面は乳白色 釉は乳黄灰色 裏面の文字は青色
石製品	硯	70	たて 13.4 よこ 6.2	1	外縁が若干剝落。	緑泥片岩		淡黄灰色

S D108

土師器	皿	73	6	1.4	外面ユビオサエ。内面一方向ナデ。	良	良	淡褐色
		74	5.4	1.2	同上	良	良	淡褐色
		76	10.2	2	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	良	良	淡褐色
瓦器	三足火舎	83	23.2	11.5	ほぼ全面ヨコナデ。内底面近くはユビオサエ。足はヘラケズリ。	良	良	淡灰色
丹波	壺	82	14.6	11.7	ほぼ全面ヨコナデ。底部近くヘラケズリ。	良	良	断面は灰色 釉は暗褐色
信楽	すり鉢	84	26.2	11.7	口縁部ヨコナデ。体部ロクロナデ。	良	良	断面は灰色 内面は暗褐色 外面・底部周辺は淡褐色
		85	25.6	14.1	同上	良	良	淡褐色
唐津	皿	78	11	3.6	ほぼ全面ロクロナデ。ケズリ出し高台。体部は施釉。	良	良	淡褐色
		79	10	3.5	同上	良	良	断面は淡灰褐色 釉は淡緑褐色
美濃瀬戸	皿	75	12.6	2.9	同上	良	良	断面は淡褐色 釉は淡灰褐色

種類	器形	番号	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調
瀬戸	皿	77	13	(2.5)	口縁部ロクロナデ。体部ロクロケズリ。内面にはヘラによる文様あり。	良	良	断面は淡褐色 釉は淡緑褐色
		80	底径5.9	(9.6)	ほぼ全面ロクロナデ。ケズリ出し高台。内底面にはヘラによる文様あり。	良	良	断面は淡褐色 釉は淡緑褐色
塩焼壺		81	底径5	(10)	外面ナデ。内面ユビオサエ。	良	良	淡褐色

SK58

土師器	皿	90	10.6	1.9	口縁部ヨコナデ。他はユビオサエ。	良	良	淡褐色
		91	10	1.9	同上	良	良	淡褐色
		92	10	2.2	同上	良	良	淡褐色
	壺	88	2.1	2.6	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	良	良	淡褐色
		89	2.6	2.6	同上	良	良	淡褐色
堺焼	すり鉢	102	29	12.3	口縁部ヨコナデ。体部はヘラケズリのちヨコナデ。外底面不調整。	良	良	淡褐色
京焼	椀	95	10.7	5.9	ロクロケズリのちナデ。ケズリ出し高台。見込みに1か所目跡あり。	良	良	淡黄褐色 花の部分は白色 枝の部分は暗褐色
美濃	椀	96	9.6	5.7	ロクロケズリのちナデ。同上。見込みに3か所目跡あり。	良	良	断面は淡褐色 釉は淡灰褐色 絵は暗褐色
	天目茶椀	98	10.9	6.5	ロクロナデ。ケズリ出し高台。底部外面に煤付着。	良	良	断面は淡褐色 釉は茶褐色 煤は灰色
瀬戸	椀	97	13	7.1	ロクロナデ。ケズリ出し高台。外面は灰釉あり。	良	良	灰色
美濃瀬戸	茶入れ	100	3.4	6.1	ロクロナデ。外面施釉。底部糸切り。	良	良	淡褐色(やや灰色をおびる) 釉は黒色
備前か	壺	93	9.3	15.1	体部上半ナデ。下半ヘラケズリ。外底面に「太」の押印あり。	精良	良	暗茶褐色
		108	10.2	不明	ロクロナデ。体部ロクロナデ。内面ユビオサエ。	良	良	暗褐色
		109			ロクロナデ。体部上半ユビオサエ。108の底部か。			
丹波	すり鉢	104	35	14.3	口縁部ヨコナデ。体部下半はユビオサエ。	良	良	暗褐色
	壺	99	底径9.9	(16.7)	外面ロクロケズリ。内面ロクロナデ。外面部分的にユビオサエ。	良	良	断面は灰色 釉は暗褐色

種類	器形	番号	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調
丹波	盤	101	23.2	6	ほぼ全面ヨコナデ。体部下部はヘラケズリ。	良	良	暗褐色
信楽	蓋	94	12.6	2.1	表面ロクロナデ。端面ヘラケズリ。裏面不調整。	良	良	淡褐色
伊万里	皿	114	8.6	2.3	ロクロナデ。ケズリ出し高台。見込みに「福」の字。	良	良	断面は乳白色 釉は乳青白色 絵は青色
		115	13.4	3.7	ロクロナデ。ヘラによる文様があり。削り出し高台。見込みに草花の青花。	良	良	断面は白色 釉は淡緑灰色 絵は淡青灰色
		116	8	2.4	同　上	良	良	断面は白色 釉は淡緑灰色 絵は青灰色
唐津	椀	117	11.2	5.3	ロクロナデ。ケズリ出し高台。全面ハケ塗り。	良	良	断面は暗褐色 釉は淡褐色
		118	11.5	6.1	同　上	良	良	淡褐色
	鉢	120	(18.6)	(9.6)	ほぼ全面ロクロナデ。ケズリ出し高台。上部は施釉。	良	良	暗褐色 釉は緑褐色
		121	29	(5.2)	口縁部ヨコナデ。体部上半ヘラケズリ。内面に印花。三島手。	良	良	断面は暗褐色 表面は淡緑灰色 掻き落とし印花の部分は白色
青磁	皿	107	14.6	3.2	ロクロナデ。ケズリ出し高台。竜泉窯系。	良	良	断面は淡灰褐色 釉は淡緑灰色
白磁	皿	110	6	(1.1)	ロクロナデ，型押しの花文。	良	良	断面は白色 釉は淡灰色
		111	9	2.7	ロクロナデ。削り出し高台。全面施釉。	良	良	釉は青白色 口縁端部は茶褐色
	椀	113	10.4	5.8	同　上	良	良	同　上
		119	13.4	8.1	ロクロナデ。削り出し高台。高台にも一部施釉。砂目積。	良	良	断面は白に近い淡褐色 釉は淡黄褐色
青白磁	壺	106	10	17	ロクロナデ。肩部にヘラによる文様。削り出し高台。全面施釉。	良	良	断面は白色 釉は淡緑青色
	蓋	105	7.8	3.9	ロクロナデ。外面施釉。106の蓋か。	良	良	断面は白色 釉は淡緑青色
焼塩壺		112	5.6	9	外面ナデ。口縁部ユビオサエ。	良	良	淡褐色
石製品	硯	103	たて 8.6 よこ 4.1	1	縁は半分破損。中央部が使用痕のためややくぼむ。	—	—	黒色
	碁石	86	2.1	厚さ 0.5	火を受けて変色。	—	—	茶褐色
		87	2.2	厚さ 0.5	同　上	—	—	同　上

表採

種類	器形	番号	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調
瓦	軒丸	122	—	—	単弁蓮華文。瓦当裏面ユビオサエ。輪郭線のみで表現。幡枝産か。	良 小砂含む	軟	淡褐色
精査中								
緑釉瓦		123	—	—	瓦当裏面は接合部で破損。単弁八葉蓮華文。幡枝産か。	良 小砂含む	軟	断面は淡黄淡褐色 釉は黄緑色

S X106

金箔瓦	軒平	124	たて 6.2 よこ (10.3)	厚さ 2.2～2.7	凸部に漆と金箔。漆は横方向にハケで塗る。	良	良	表面は黒～淡黒灰色
鉄製品	鉈	125	—	—	鍛造品。刃の先端は突出。背は凹凸あり。			
骨角製品	サイコロ	126	—	—	鹿骨製。真ん中を刳り抜く。	—	—	—

S X104

金箔瓦	方形飾瓦	127	よこ 21	厚さ 2.2～2.7	四七の桐文。釘穴4孔。凸面に漆と金箔。	良	良	断面は黄灰土色 表裏面共黒灰色
		128	たて 11.6 よこ 21	厚さ 1.8～2.8	五七の桐文。釘穴4孔。凸面に漆と金箔。葉脈2重のタイプ。	良	良	断面は淡黄灰土色 表面は黒色
	軒丸	129	直径 15		巴文。凸面に漆と金箔(遺存状況悪い)。	良	良	断面は暗灰色 表・裏面共黒色

注1　補助員及び協力者等(敬称略)
福富　仁・飛田浩一・中井英策・西川悦子・山尾　摂・平野仁佳子・長田康平・白石由香・湯浅研二・丸谷はま子・竹谷和子・針尾紀代・本田小百合・香西和子・長谷川聡・重松麻里子・高嶋登久子・北岡里絵・村本香奈子・峰　弥生・河野絹代・馬場里子・久住呂博信・森　圭子・蒲田高士・橋本陽子・和田里香・吉田喜美子・小野真知子・栃木道代

注2　財団法人京都市埋蔵文化財研究所には，平安京条坊復原案の最新資料を頂いた。なお，これに関連する国土座標点の設定は，当調査研究センターの竹井治雄が行った。

注3　「第3章　平安京の形成」(『京都の歴史』第1巻　京都市編)　1970

注4　「上京区概説」(『史料　京都の歴史』7，京都市編)　1980

注5　平尾政幸・本弥八郎「平安京左京一条二坊」(『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所)　1987

注6　「上京区　薮之内町」(『京都市の地名』　平凡社)　1979

注7　伊野近富・石井清司・松井忠春・黒坪一樹「平安京左京北辺三坊五町」(『京都府遺跡調査概報』第27冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988

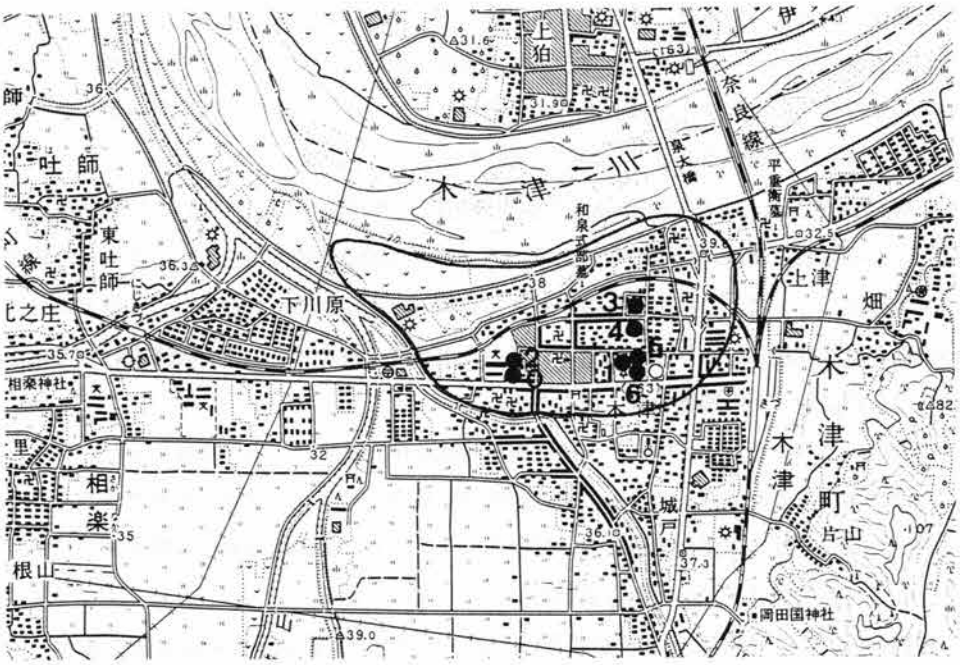
注８　大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」(『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館)　1984
注９　鈴木重治氏にも同様の指摘を受けた。
注10　金剌伸吾「どろめんこの話」(『どろめん』3 JICC 出版局)　1974
注11　財団法人京都市埋蔵文化財研究所の最新成果によると，１丈は2.984858m±0.000372mである。
　　辻　純一「平安京の条坊復原」(『京都府埋蔵文化財情報』第27号　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988
注12　秋山国三・仲村　研(『京都町の研究』法政大学出版局)　1975
注13　木崎清之助『我が町の歴史と町名の由来』上京区(下巻)　アート社出版　1979
注14　黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社　1986
注15　高橋康夫『洛中洛外―環境文化の中世史』平凡社　1988
注16　松田毅一・川崎桃太訳　ルイス・フロイス『日本史』
注17　注７文献の他，平良泰久・常盤井智行他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会)　1980
注18　「茶屋(武)家文書」(『史料　京都の歴史』７　京都市編)　1980
注19　『万民千代乃礎(天明八年刊)』(『新撰京都叢書』第十巻　臨川書店)　1985
注20　注10文献
※　なお，壁土(木舞)については関西大学山田幸一氏より教示を頂いた。

5. 木津遺跡第6次発掘調査概要

1. はじめに

木津遺跡は京都府相楽郡木津町に所在し，同町の市街地の大部分を占める遺跡である。木津町は奈良と京都を結ぶ交通の要衝として発展してきたが，奈良時代には平城京の外港として特に栄えた。当時，木津には，平城京に伴う官衙や諸大寺の木屋所が設けられ，木津川の水運を利用して物資が集積していた。また，天平12(740)年から同15年には恭仁京右京域が計画されたところでもある。木津遺跡には，これらの関連遺構が包蔵されているものと推測される。今回の木津遺跡の発掘調査は第7回目にあたるが，今までの調査では奈良時代～近世にわたる遺構・遺物を確認している(付表参照)。

今回の木津遺跡の発掘調査は大字木津小字南垣外にあたる。この地は大正8年から昭和15年にかけて綾部製糸・新綾部製糸工場があった。その後，第二次大戦中には畑となり，戦後新制木津中学校の校舎が建てられ，木津簡易裁判所は昭和29年に建てられた。発掘調査は木津簡易裁判所の改築工事に伴い，建設省近畿地方建設局京都営繕工事事務所の依頼を受けて実施したものである。調査は昭和63年8月10日～9月29日の間を要し，当調査研



第57図　調査地位置図(1/25,000)

付表4　調 査 次 数 一 覧

図番号	調査次数	調 査 地	調査主体	検 出 遺 構	出土遺物	時 代
0	欠 番	木津小学校	木津町教委	なし	軒丸瓦	奈 良
1	第1次	商 工 会 館	木津町教委	礎石建物	土器・瓦	奈 良
2	第2次	木津小学校体育館	木津町教委	土坑・溝	土器 陶磁器	中 世 近 世
3	第3次	木津警察署宿 舎	埋文センター	土坑・溝	土器	平 安 中 世
4	第4次	木津警察署	埋文センター	土坑・溝・池	土器 陶磁器	中 世 近 世
5	第5次	木津町役場	木津町教委	なし	なし	不 明

究センター調査第2課調査第3係長小山雅人，同調査員岩松保が担当した。調査面積は約420m²を測る。調査・整理に係る費用は全額，建設省京都営繕工事事務所が負担した。調査・整理には多くの方々の参加と関係各位の専門的な御教示を得た。ここに記して感謝の意に替える。(注1)

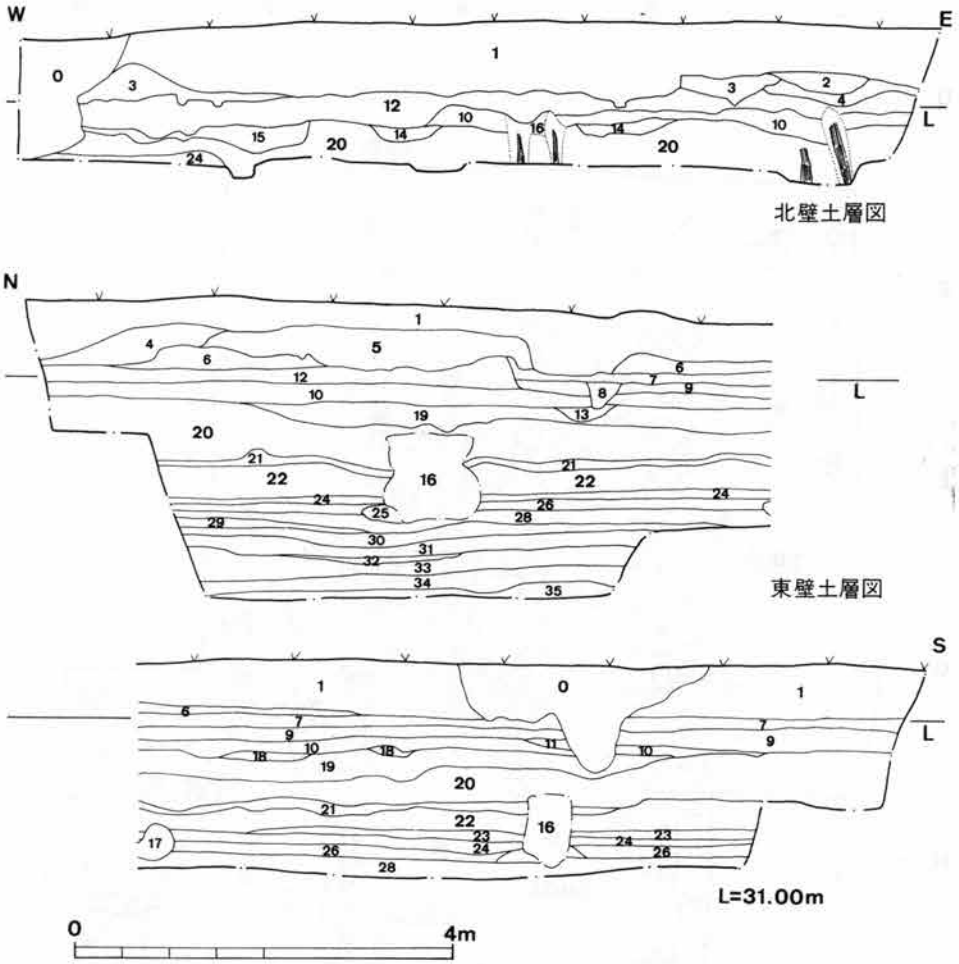
2. 調査の概要

調査は重機により遺構面までの掘削を行い，その後，手掘り作業に切り替えて遺構・遺物の検出に努めた。調査は，排土置き場が狭いことから，調査地を一部埋め戻して拡張を行った。地区割りは，任意の方角で5m毎の方眼を組み，南北ラインは東から西にアルファベットを付し，東西ラインは北から南に数字でライン名をつけた。各地区は東北隅の交点を作る各ラインを組み合わせて地区名とした。

土層(第58図)は，地表下約70cmまでが近代以降の整地層である。その下に畑耕作土・置き土がみられ，ほぼ，近世のものと考える。中世以前の遺物を包含している層は，10の淡灰色砂混じり土で，これより下の層からは遺物の出土は認められなかった。基本的には，砂の層が厚く堆積しており，その間に粘質土・土が薄く挟まれている。調査を行い遺構を検出したのは19・20の明褐色砂上面である。

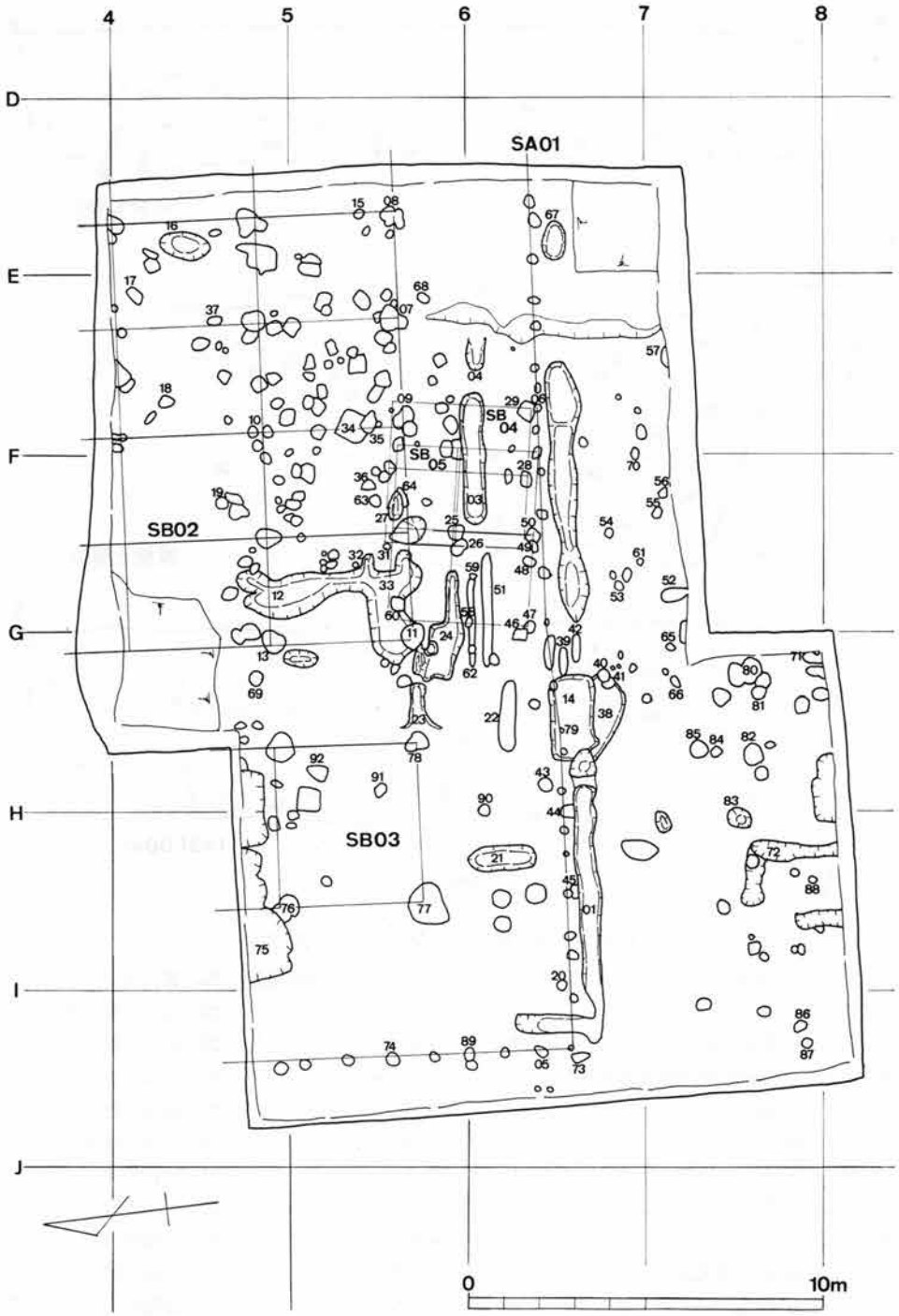
調査地の全域にわたって柱穴・土坑と奈良時代を中心とする土器片を検出した。しかし，この地が木津川の氾濫原にあたるため遺構の残り具合いは悪く，建物に復原できるものは少ない。ここでは，主要な遺構について概述する。なお，第59図の検出遺構平面図に番号が付してある遺構は，なんらかの遺物が出土したものである。

柵列(SA01)は，柱穴には木杭が残存しており，それらを結ぶと柵列に復原できる。木杭は打ち込んだもので，掘形はなかったが，便宜上周囲を掘りこんだ。東西24m・南北8.5

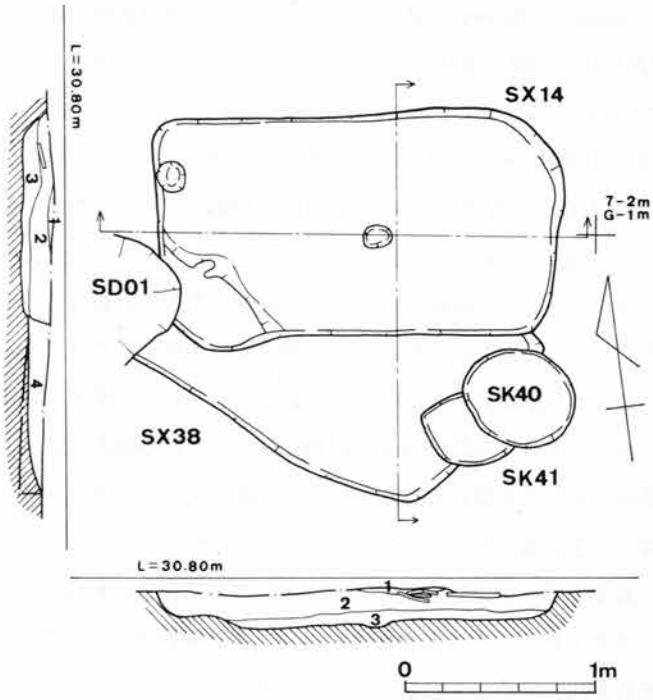


第58図　調査地土層断面実測図

1. おき土(暗灰色土～茶褐色土)
2. 基礎礫石
3. 炭混じり茶褐色土
4. 礫混じり茶褐色土(近代工場整地層)
5. 淡茶褐色礫混じり土(　〃　)
6. 黄灰色砂土
7. 淡青灰色砂混粘土(畑作土？)
8. 淡暗灰色砂土(汚れている)
9. 淡灰色砂質土(おき土？)
10. 淡灰色砂混土(褐色砂を含む)
11. 青灰色砂土(水のにじみか？)
12. 淡青灰色白砂混粘土(畑作土)
13. 淡灰色粘土混じり明褐色砂
14. 灰色土
15. 茶褐色砂混土
16. 青灰色変色砂
17. 青色変色土
18. 明褐色砂(汚れている)
19. 明褐色砂
20. 明褐色砂(かわくと白砂)
21. 暗茶褐色砂
22. 茶褐色粘質砂
23. 茶褐色砂混土
24. 茶褐色土
25. 黄白色変色土
26. 黄色砂混茶褐色土
27. 灰白色変色砂
28. 茶褐色粘質土
29. 淡茶褐色土
30. 茶褐色砂混土
31. 灰白色砂
32. 淡灰色砂
33. 茶褐色土
34. 茶褐色砂土
35. 黄色砂(かわくと白)
0. 攪乱



第59図　検出遺構平面図



第60図　SX14・SX38 実測図

1. 青灰色粘土混褐色砂　2. 青灰色粘土混明褐色砂
3. 青灰色粘土混淡褐色砂　4. 淡褐色砂

mにわたって確認した。東西柵列の南に平行してSD01等の東西溝を検出した。6G区ではこの溝が途切れている。この溝からはコンクリート片やレンガ片が出土している。SB02・03も柵列と同様に木杭が残存していた。SB02と03の間には廊下がある。正確にはこれらは建物跡ではなく，建物の基礎跡である。木杭は3本で一対をなしている。杭は穴を掘って埋めたものではなく，打ち込んで据えたため掘形はなかった。そのため，直接的に遺構の年代を示す遺物の出土はなかった。壁面での土層観察では，これらの3本の杭の頭部に幅1m・厚さ20cmの砕石を敷きつめていた。これは建物の重量による沈下を防いだ基礎と推測され，この木杭の直上に建物の柱が据えられたものと考える(図版第32-2)。このため，復原で示した建物配置が推測できる。この砕石より上の層はスレート・レンガ・ビンを含む整地層が見られる。これらの基礎・柵列・溝等は昭和5年の綾部製糸工場の売却図の建物配置から，同工場または新綾部製糸工場の建物(繭繰場・廊下等)に伴うものと考えられる。

SX14は6G区で検出した土坑で，SX38と重複して検出した。SX14が切り勝つ。この土坑では比較的多くの土器片を検出した(図版第31-1・第60図)。規模は2.25m×1.2m，検出高15cmである。SX38はSX14を切る土坑で，規模は2.1m以上×1.4mである。この土坑にはまとまった遺物の出土はなかったが，奈良時代の須恵器・土師器片が出土している。これらの土坑群はその性格についてはよくわからないが，規模やSX14の遺物出土状態から，土壙墓と考える。

検出した多くの柱穴跡のうち，掘立柱建物跡(SB04・05)に復原できるものがある。と

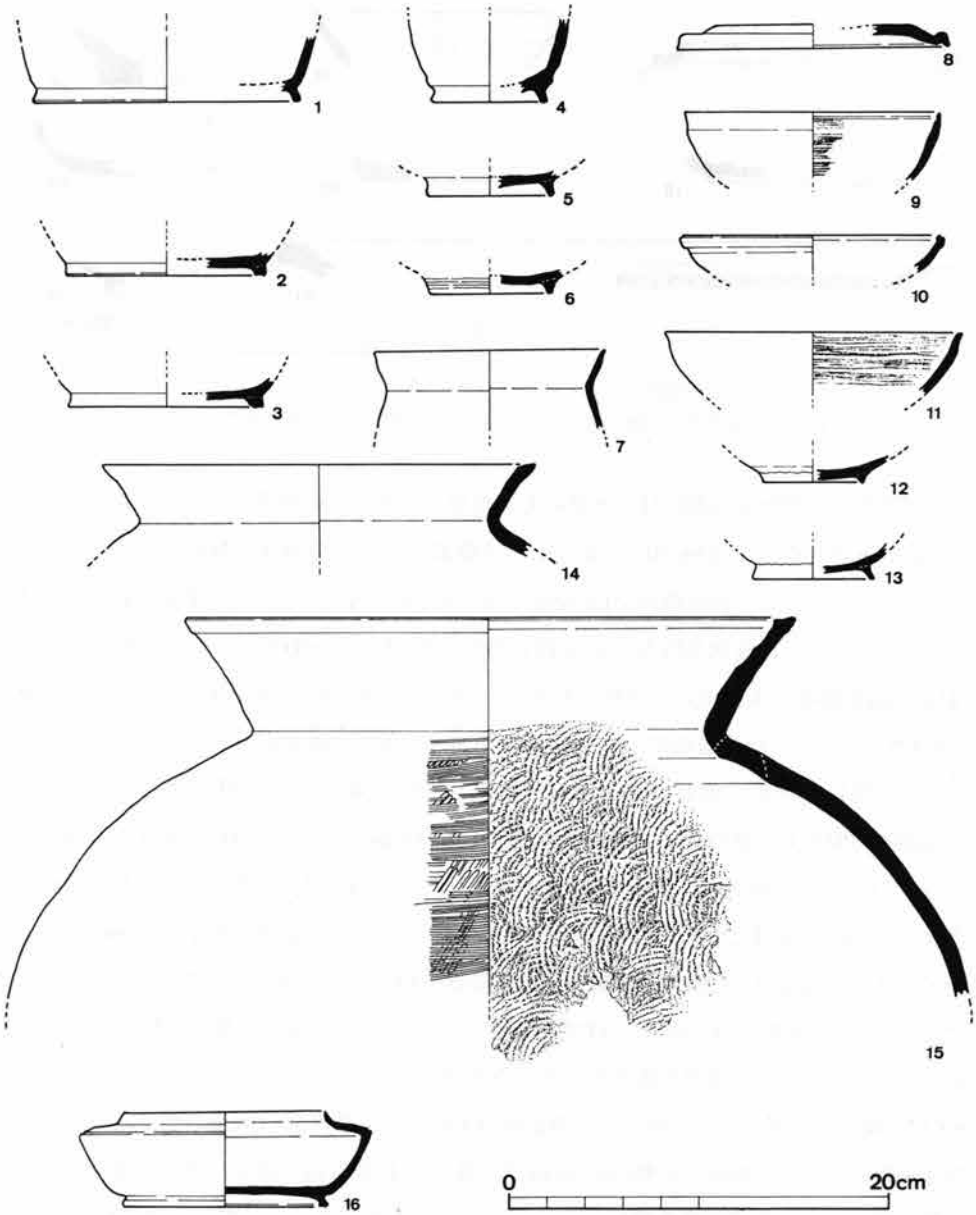
もに5E・F地区で検出した。SB04は方位をやや東にふれ，南北2間×東西2間の規模を持つ。SB05は南北2間×東西2間の規模を持ち，やや東に振れる。柱穴より出土した遺物から奈良時代の遺構と考えられ，なんらかの施設があったものと考えられる。

人為的な遺構とは別に，2条の地震跡が検出された(図版第30-2)。検出した位置は4H区の北壁近辺と7G区の東壁近辺である。前者は幅2～10cm，長さ1mにわたり，後者は幅2～8cm，長さ50mにわたって，砂が充満した「割れ目」である。大きな地震動に伴い，地中の砂が水とともに噴き上がったもので，噴砂(液状化)と呼ばれる現象の痕跡である。噴砂は第4次調査でも確認されている。断ち割りを行って下層の層位を確認したところ，下位から上位に向けて噴き上がる砂の筋が認められた。今回検出したものは，壁面では遺構検出面の直上で攪乱されていて，直接その時期を示す資料はなかった。木津町に残る古文書によると，木津町内で嘉永から安政年間に噴砂が起こった記録がある。(注2) 嘉永6年6月13日から15日にかけての地震で「木津梅谷ハ右三度之地震ニ水吹出申候」とある。この地震は伊賀上野地震と呼ばれ，震源地が伊賀上野付近でマグニチュード7前後の規模と推定されている。記録によると，伊賀上野を中心に大和郡山や奈良で人が地震で亡くなり，興福寺・東大寺の建物にまで被害が出ている。また，同年11月4・5日の地震では「此時ニ木津野色川田中辺ニテ水吹出ル外之所々ニても数多く水吹出ル」とある。この地震は南海地震と呼ばれ，太平洋プレートの移動による地震と考えられており，100～200年毎に起こっている。南海地震は広範囲に被害が生じ，東は三重から和歌山，兵庫，高知あたりまで及ぶ。この他に，今回の噴砂を生んだ可能性のある規模の地震は，明応3(1494)年，永正7(1510)年，慶長元(1596)年，寛文2(1662)年，各時期の南海地震(1361,1498,1605,1707)がある。

3. 出土遺物（第61・62図）

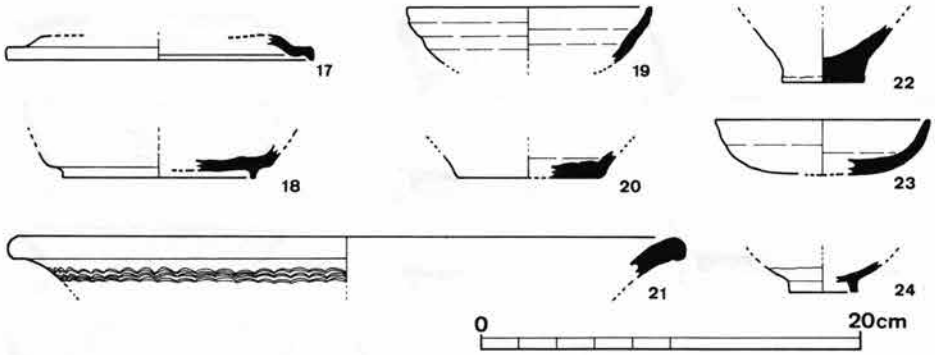
今回の調査では遺物の出土は少なく，整理用コンテナで約7箱分である。また，完形に近いものはなく，小さな破片が大多数である。単一の時代の包含層は確認できず，淡灰色砂混土層と明褐色砂層の間付近から弥生時代以降の遺物が出土している。また，第59図の検出遺構平面図の番号を付している遺構より，なんらかの遺物が出土した。

第61図は遺構内より出土した土器の実測図である。1～3は須恵器杯身片で，1はSD23，2・3はSK25より出土した。1は高台径が14.0cmに復原できる。2は復原高台径10.3cmを測る。3は復原高台径は10.2cmである。すべて貼り付け高台で，底部は回転ヘラ削り痕が見られる。1～3は底部のみしか残存していないが，高台が底端部に近いところに付されており，Ⅳ型式3・4段階のものと考えられる。4は長頸壺の底部と考えられる須



第61図　出土遺物実測図(1)
1～4・8・15・16：須恵器，　5・6：黒色土器，　7・10・14：土師器，　9・11～13：瓦器

恵器の破片である。底部径は6.0cmで，残存高は4.4cmである。5・6はSK71より出土した黒色土器である。5は内面のみが黒色を呈している。高台の外面に横方向のヘラ磨きを施している。高台内にヘラ状のもので平行な3条の沈線が刻まれている。内面には暗文が見て取れる。高台の復原径は6.6cmである。6はSK55より出土した。5と同じく内面



第62図　出土遺物実測図(2)
17～21：須恵器，　22：弥生土器，　23：土師器，　24：瀬戸美濃系陶器

のみが黒色で，高台部外面にはヘラ状のもので施した横方向の数条の筋が見られる。高台径は6.4cmである。7はSK29より出土した土師器である。色調は茶褐色を呈し，一部ススが付着している。口径は復原で11.9cm，残存高は4.2cmである。8は須恵器杯蓋で，Z状のカーブを描く口縁部を持ち，天井部はほぼ水平になる。SD21から出土した。復原径は14.2cmを測る。Ⅳ型式の3段階に相当し，実年代は8世紀の半ば頃が考えられる。9はSD21より出土した瓦器椀で，口縁端面の内面に1条の沈線を巡らす。内面はていねいに暗文を施している。復原口径13.4cmを測る。10は土師器椀で，SK27から出土した。口縁部は内面が丸く終わり，口縁端面外面に1条の沈線が巡る。口径は復原で13.6cmを測る。11～13は瓦器椀で，すべてSK80より出土した。11の外面は摩耗により暗文を見て取れないが，内面はていねいに横方向の暗文を施している。復原口径は15.5cmである。12・13は椀の底部で，12は高台が直下にのびるが，13は大きく外方にのびる。高台径は，12が5.4cm，13が6.4cmを測る。14はSX38より出土した土師器で，復原口径22.7cmである。口縁部内面がほぼ水平な端面をなす。内外面ともに横ナデで調整している。15・16はSX14の検出面の埋土中より出土した須恵器の実測図である。15は大型の甕で，全径の約20%を残している。復原の口径は32.0cmで，残存高は20.0cmを測る。体部外面はタタキの後に横方向のハケで調整を施している。16は高台を付した「壺」で，全体の約1/2が残存している。肩部のやや上に1条の沈線が巡る。高台は断面で観察すると，「ハ」の字形に開き，接地面はほぼ平らで中央部がやや凹む。口縁部径10.5cm，高台下部径10.6cm，器高4.9cmである。

第61図は重機掘削時に採集した土器の実測図である。17は須恵器杯蓋で，8と同じタイプのものである。口径は16.0cmに復原できる。19は須恵器杯身で口径13.0cmに復原できる。18は須恵器杯身で，高台径10.2cmである。20は須恵器の杯身底部で，高台を持たない

タイプである。底部径は7.6cmに復原される。21は須恵器甕の口縁部である。口径は34.8cmに復原される。2条1対の波状文が6条観察できる。22は弥生土器甕の底部である。底部中央が凹むもので，粘土をまわりに貼り付けている。23は土師器椀で，淡黄色を呈し，口径11.4cm，器高2.8cmである。24は瀬戸美濃系の陶器片で，内面全体と外面の一部に釉を施している。釉は淡黄褐色に発色しており，生地の色は白色である。底部径3.6cmである。

4. まとめ

周辺地の第5次調査では遺構面が確認できなかったが，今回遺構面を確認できた。しかも，奈良時代の土坑・掘立柱建物跡や遺物を検出し，実態のよくわからない木津遺跡の一端を窺える資料を得た。しかし，推定恭仁京右京域では，これらに直接関わる条坊跡等の遺構は確認できなかった。これは遺構面の残りが悪かったためとも考えられ，今後の調査に期待される。周辺地での詳細な発掘調査が必要であろう。

さらに，重機の掘削時であるが，弥生土器を採集し，周辺地に弥生の集落が包蔵されている可能性が指摘できる。

木津遺跡では4次調査[注3]に続いて，2例目の地震跡を検出し，広範囲に地震跡があることがわかった。残念ながら，生成時期については特定できなかった。今後の調査で詳細に検討を加えていく必要があろう。（岩松　保）

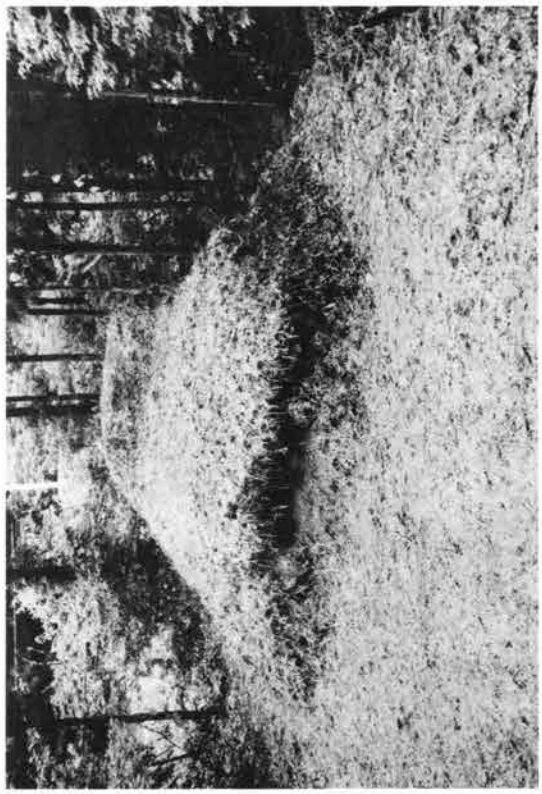
注1　調査・整理参加者，指導していただいた方（敬称略）
豊福　孝，鎌田敏史，井上直樹，中西　修，宮本久美，高橋和湖，和田里香，梶本真由美，辻道子，谷口ゆかり，篠原恵子
高橋美久二(京都府立山城郷土資料館)，松本秀人(木津町教育委員会)，森元文子(木津町史編纂室)，寒川　旭(通商産業省工業技術院)

注2　木津町史編纂室　森元文子氏の御教示による

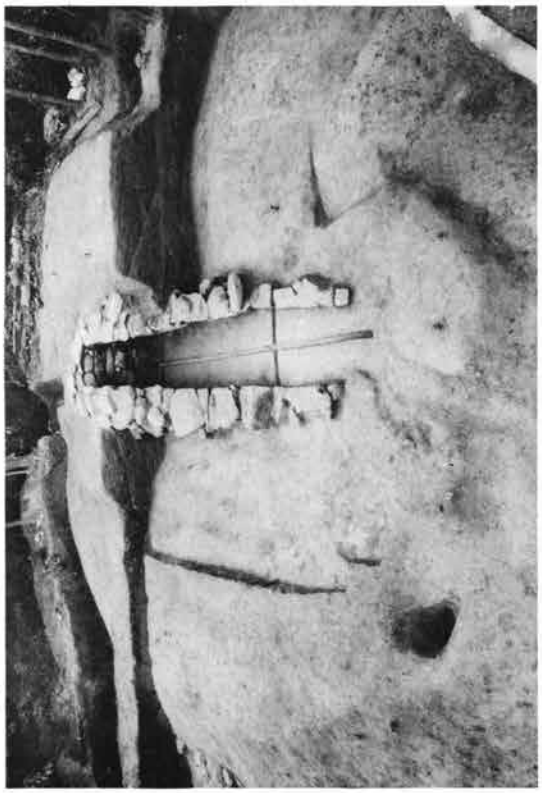
注3　小山雅人「木津遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986

図　　版

図版第1　休場古墳



(1) 調査前墳丘全景（西から）



(2) 調査後墳丘全景（南から）

(3) 横穴式石室天井石及び墳丘上部（西から）

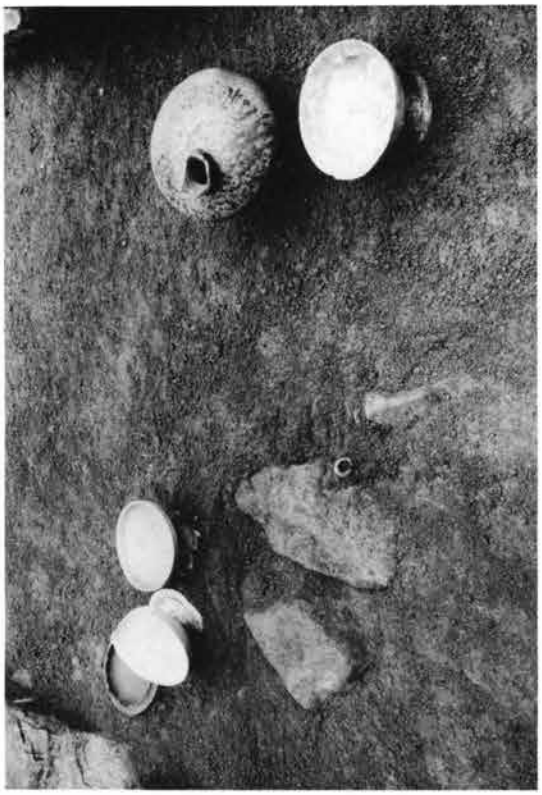
(4) 横穴式石室及び墳丘築成状況（南から）

図版第2　休場古墳

(1) 横穴式石室右側壁

(2) 横穴式石室奥壁

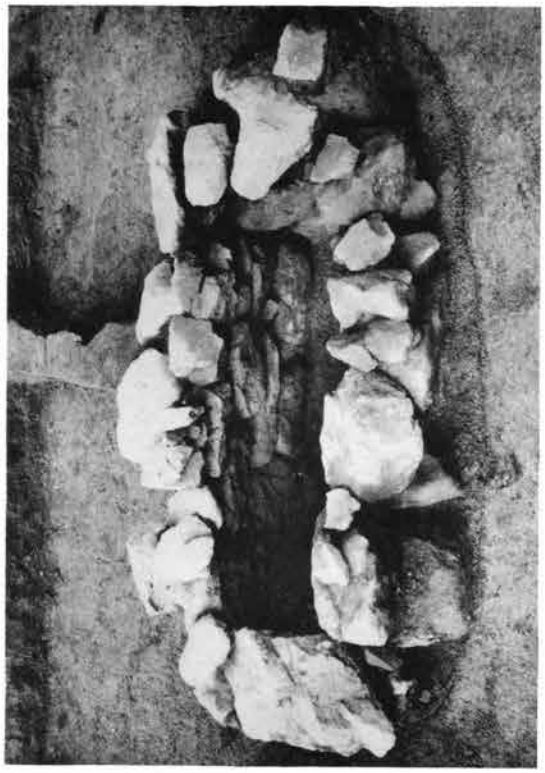
(3) 横穴式石室左側壁



(4) 遺物出土状況(1)

図版第3　休場古墳

(3)　小竪穴式石室検出状況（東から）



(4)　小竪穴式石室天井石除去後（東から）

(1)　遺物出土状況(2)

(2)　遺物出土状況(3)（紡錘車）

図版第4　休場古墳

1

10

2

11

3

12

6

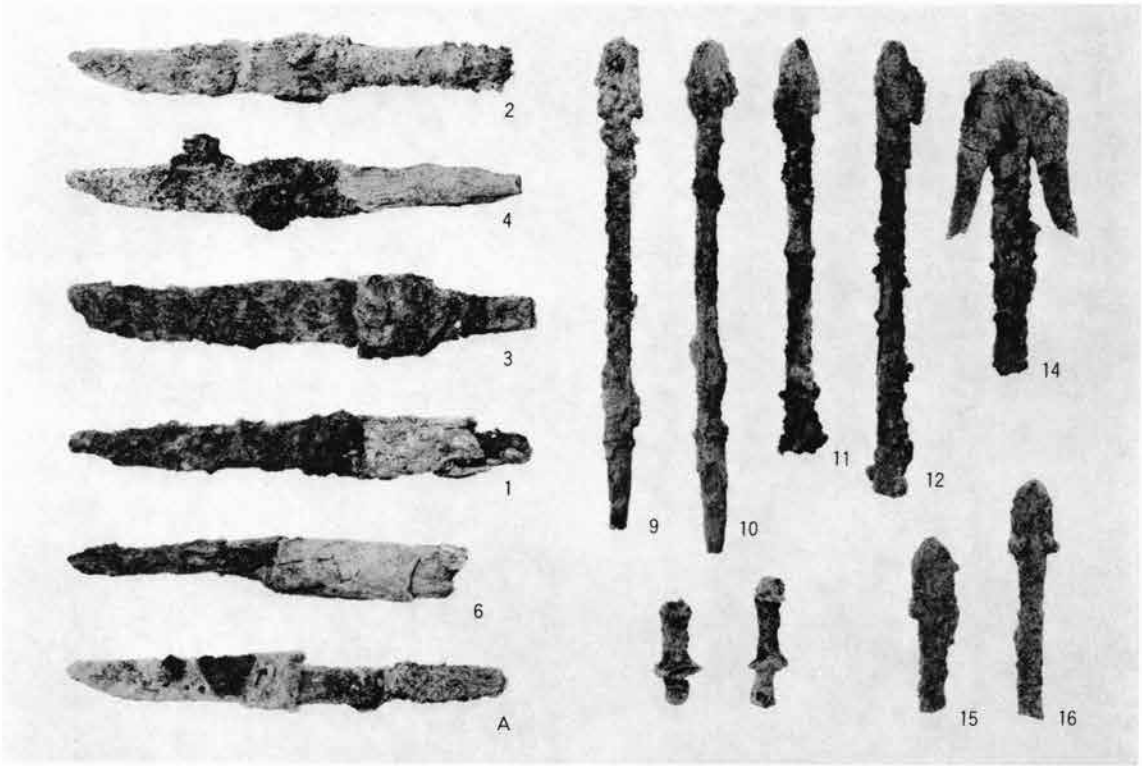
13

9

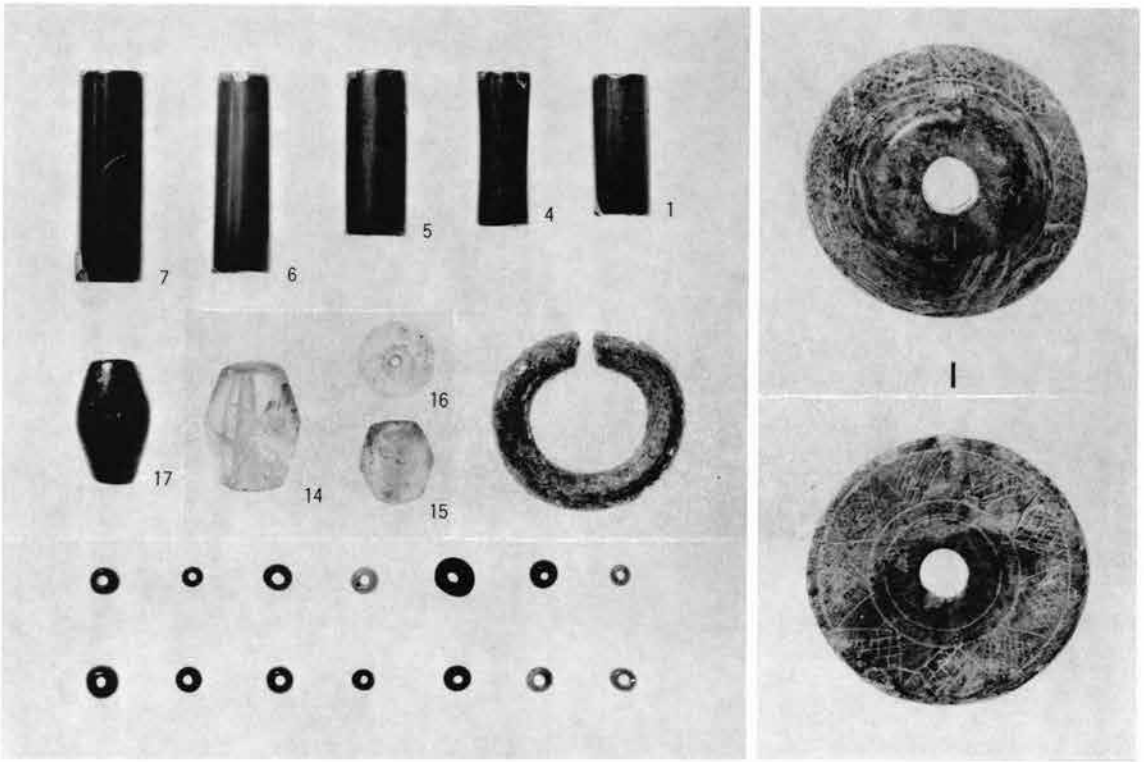
14

出土遺物(1)（土器）

出土遺物(2)（土器）　　（Aは攪乱土出土土師器）



(1) 出土遺物(3)（鉄製品）　　（Aは小石室出土）



(2) 出土遺物(4)（装身具・紡錘車）

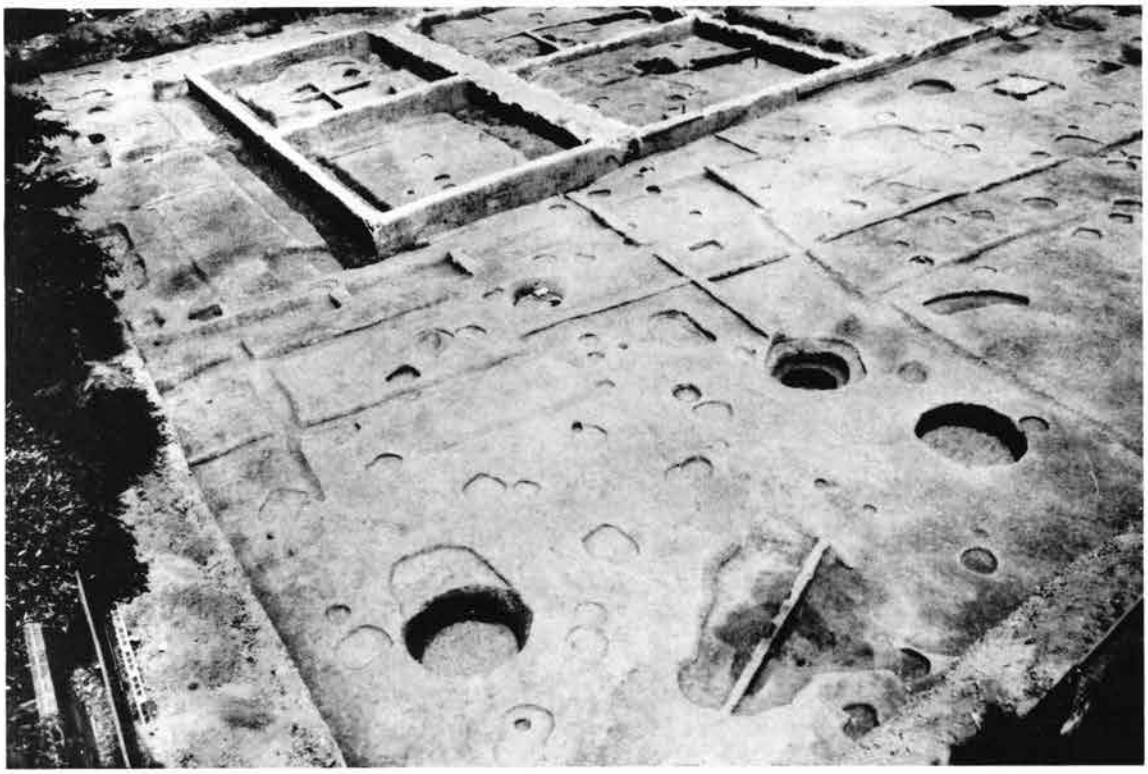
図版第7　下畑遺跡

(1) トレンチ全景（西から）

(2) 北東壁断面

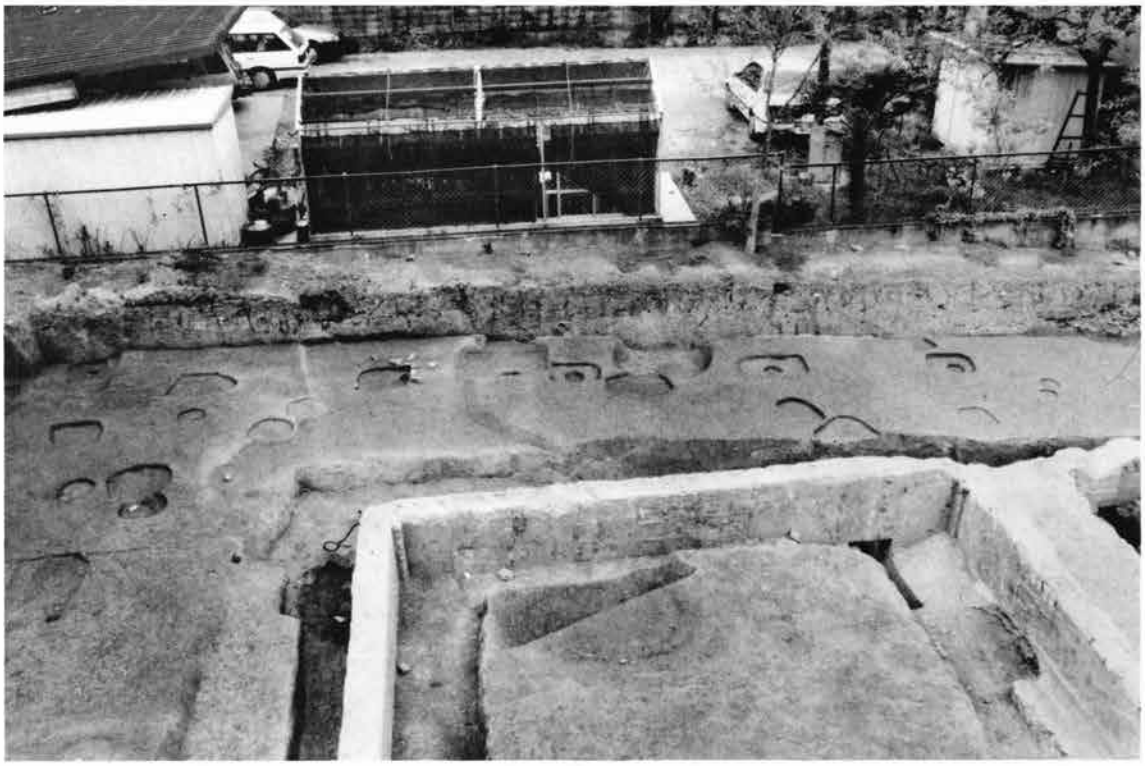
図版第８　　長岡宮跡第205次

(1)　調査前風景（東北から）

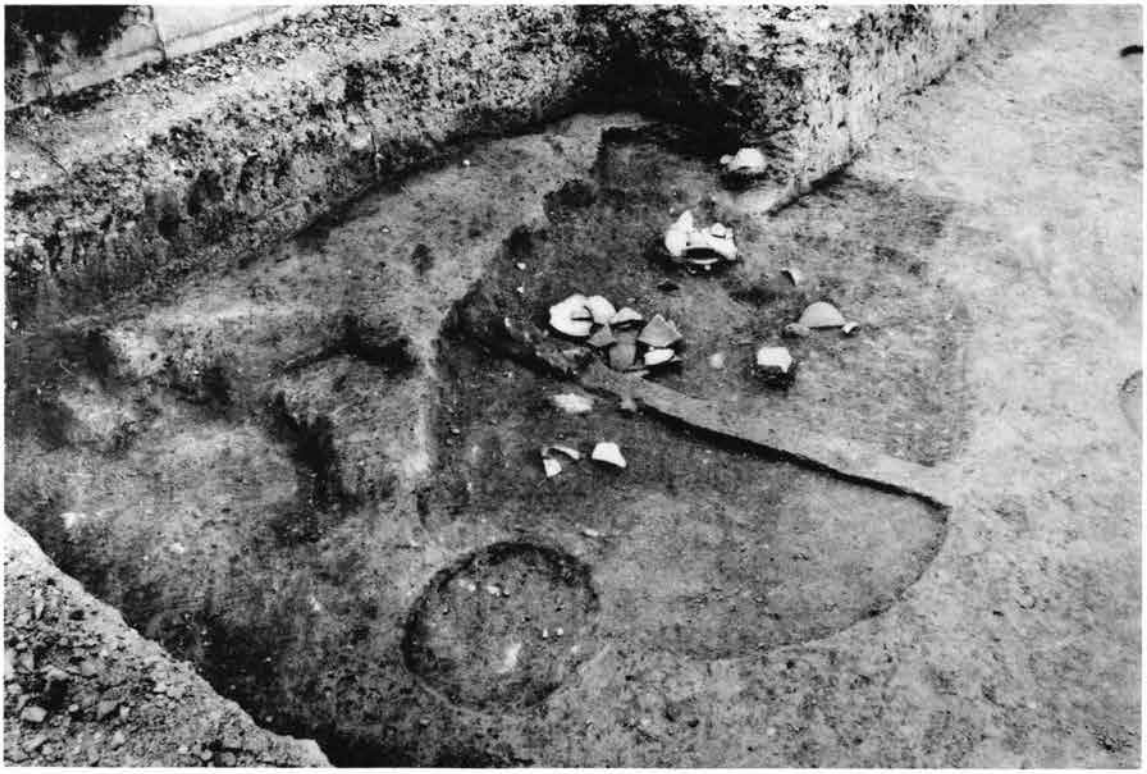


(2)　トレンチ全景（南東から）

(1)　溝ＳＤ205 01（東から）

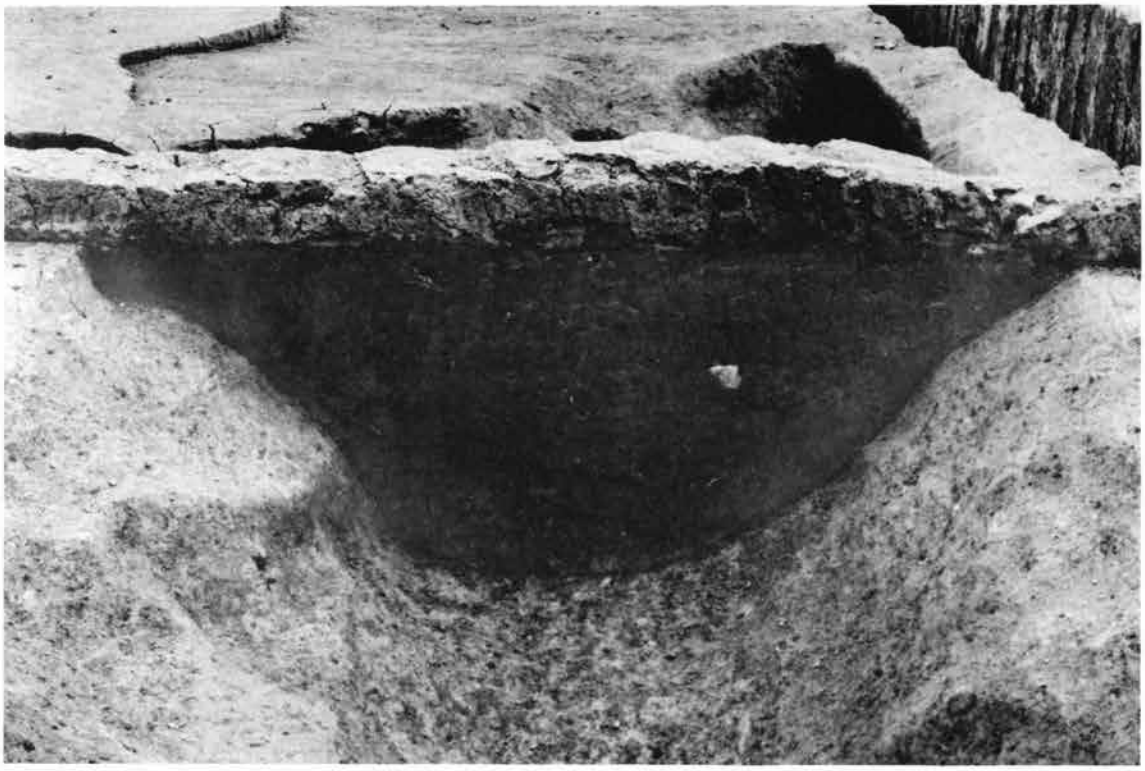


(2)　建物跡ＳＢ205 01（南から）

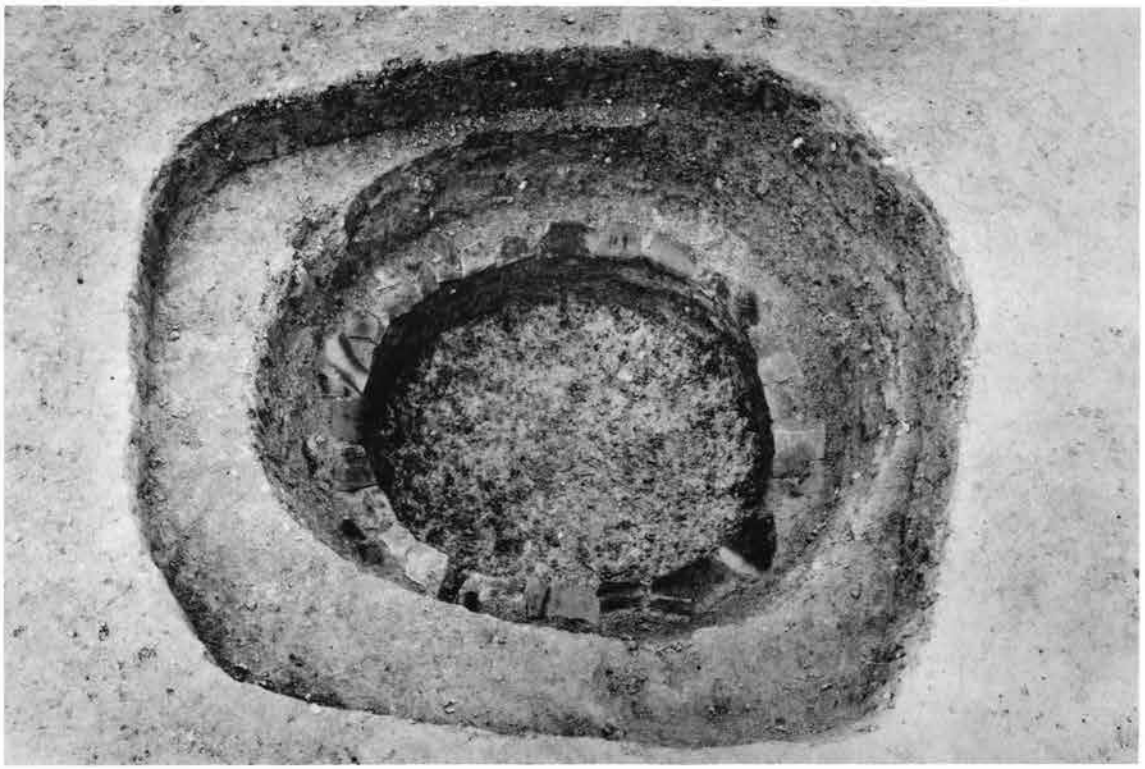


(1)　土坑ＳＫ20503遺物出土状況（南から）

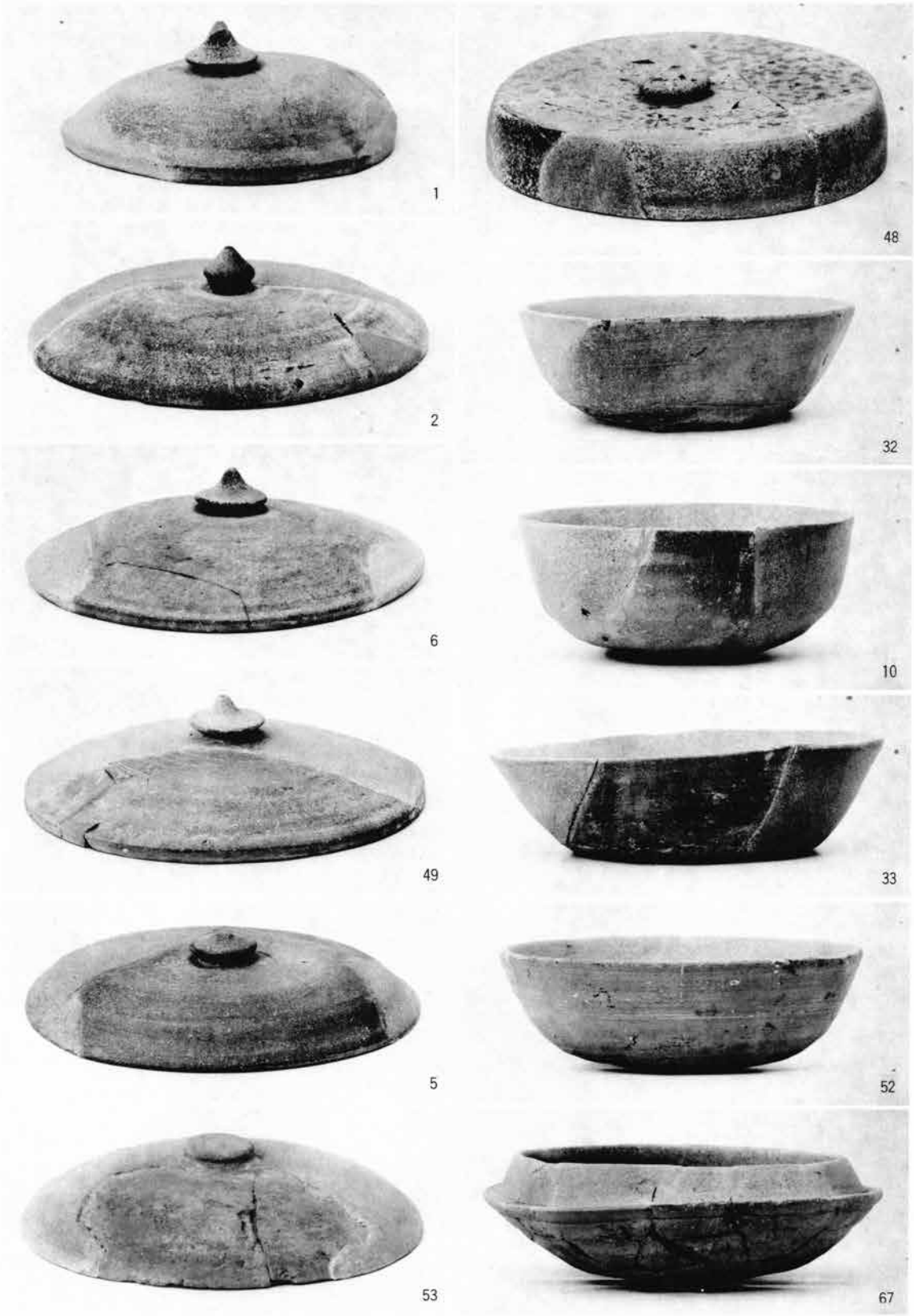
(2)　井戸ＳＥ20504（東から）



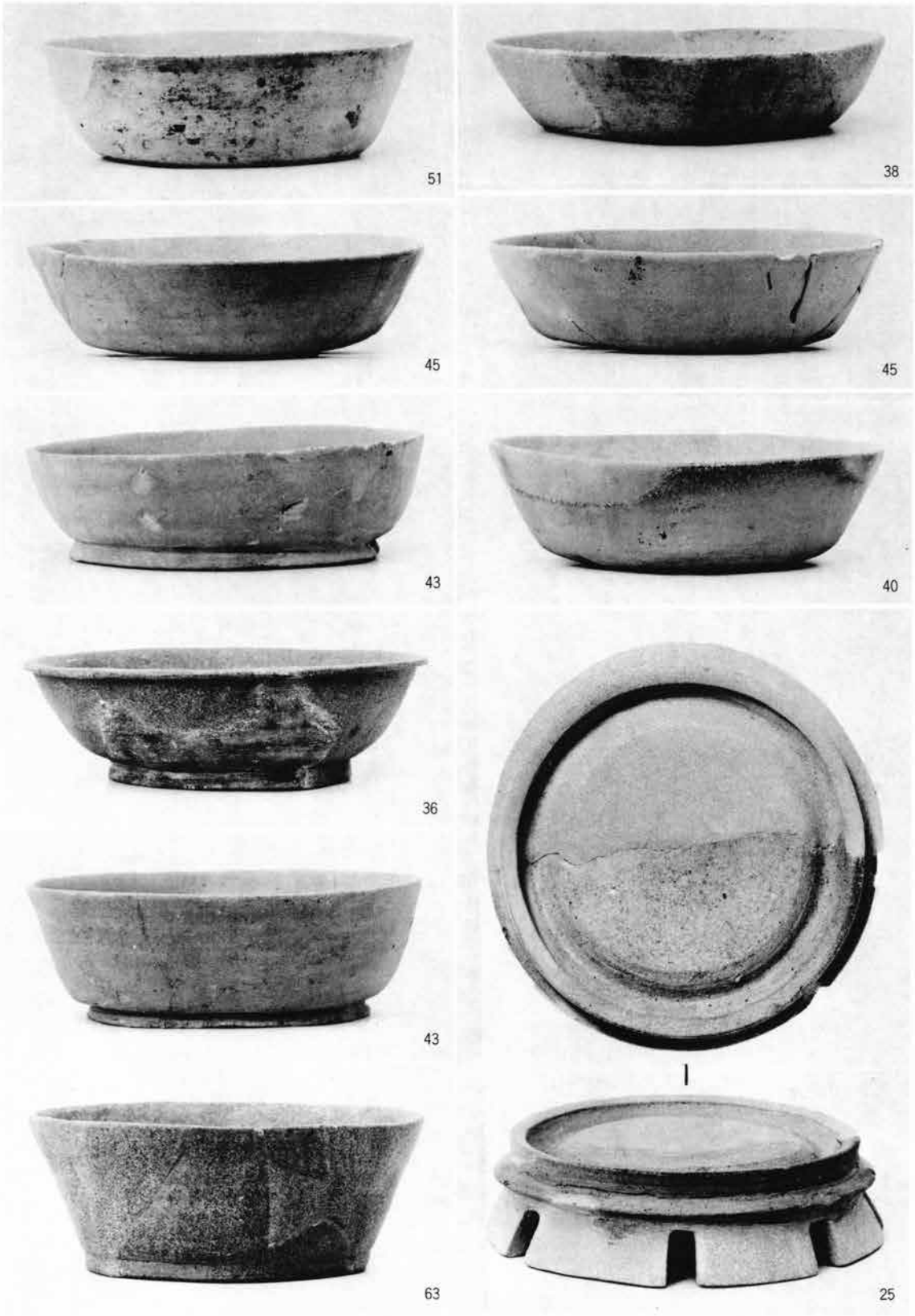
(1)　溝ＳＤ20501断面（西から）



(2)　井戸ＳＥ20505（西から）



出土遺物(1)



出土遺物(2)

57

58

62

61

70

71

72

73

68

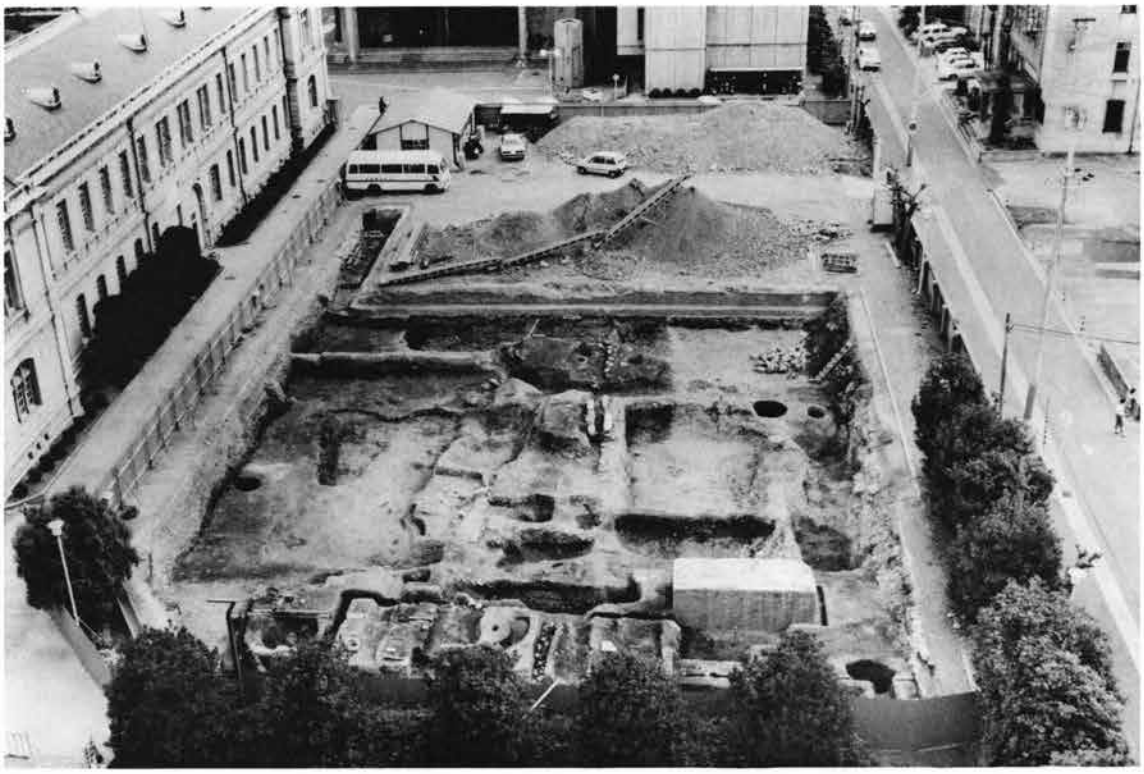
出土遺物(3)

図版第15　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

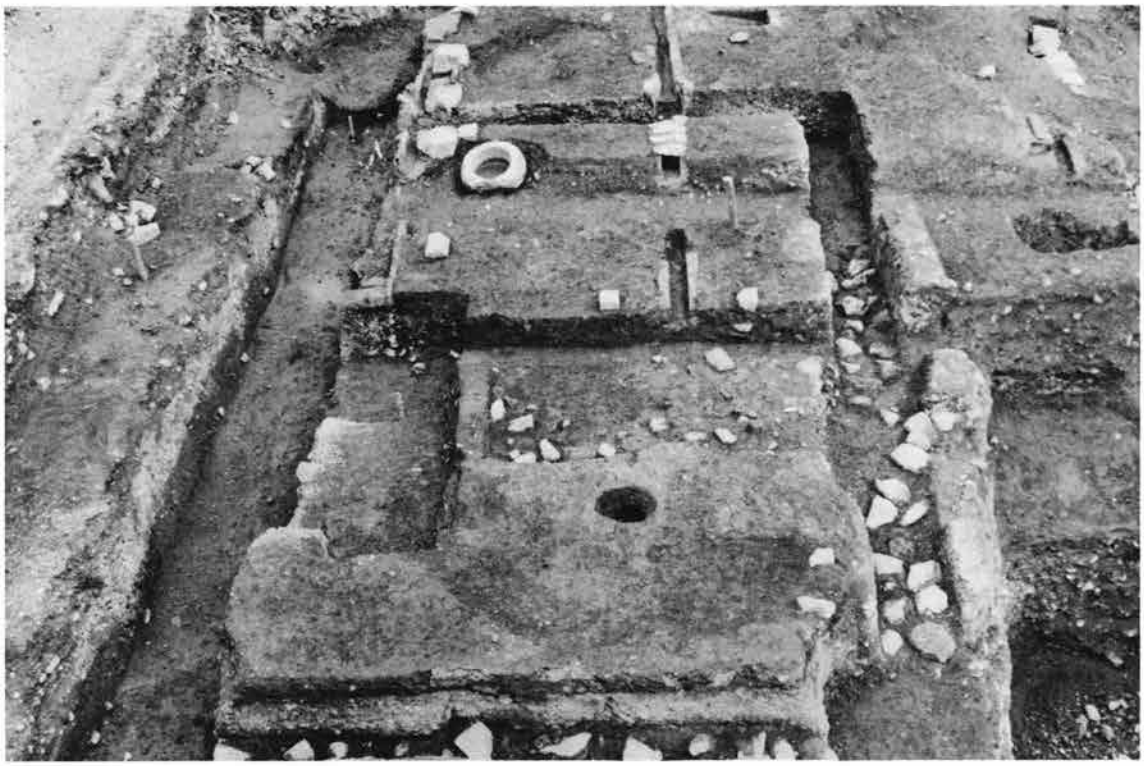
(1) 京都府庁旧館（北西から）

(2) 調査前風景（北から）

図版第16　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

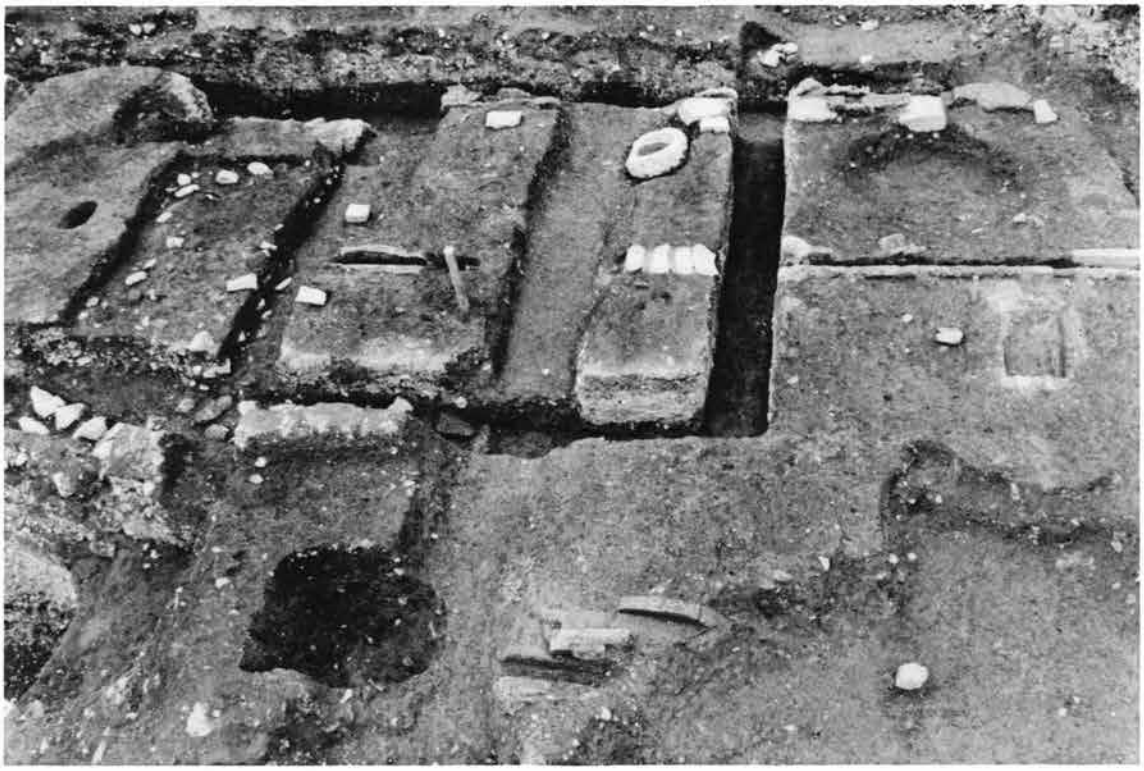


(1) 江戸時代の状況（北から）



(2) 幕末の倉跡？（西から）

図版第17　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）



(1) 江戸時代の北東部（南から）

(2) 漆喰の設備（北から）

(3) 漆喰溝の部分（北から）

図版第18　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

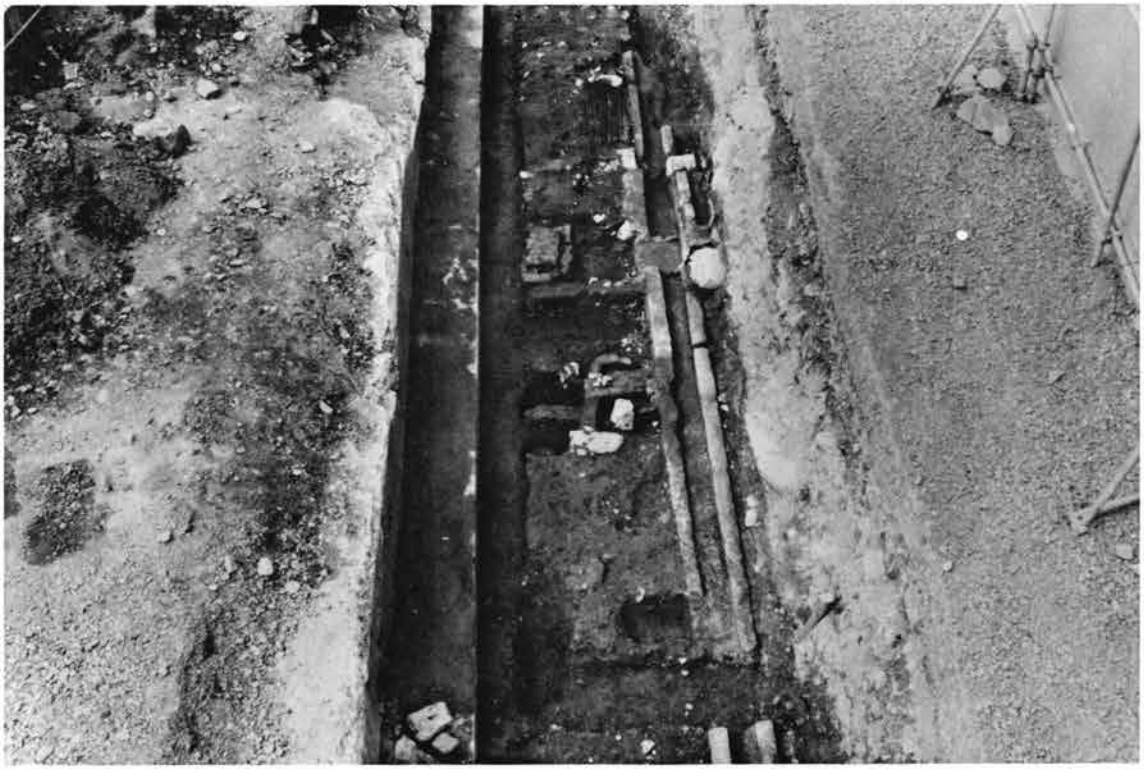
(1)　漆喰溝の断面a（東から）

(2)　漆喰溝の断面b（北から）

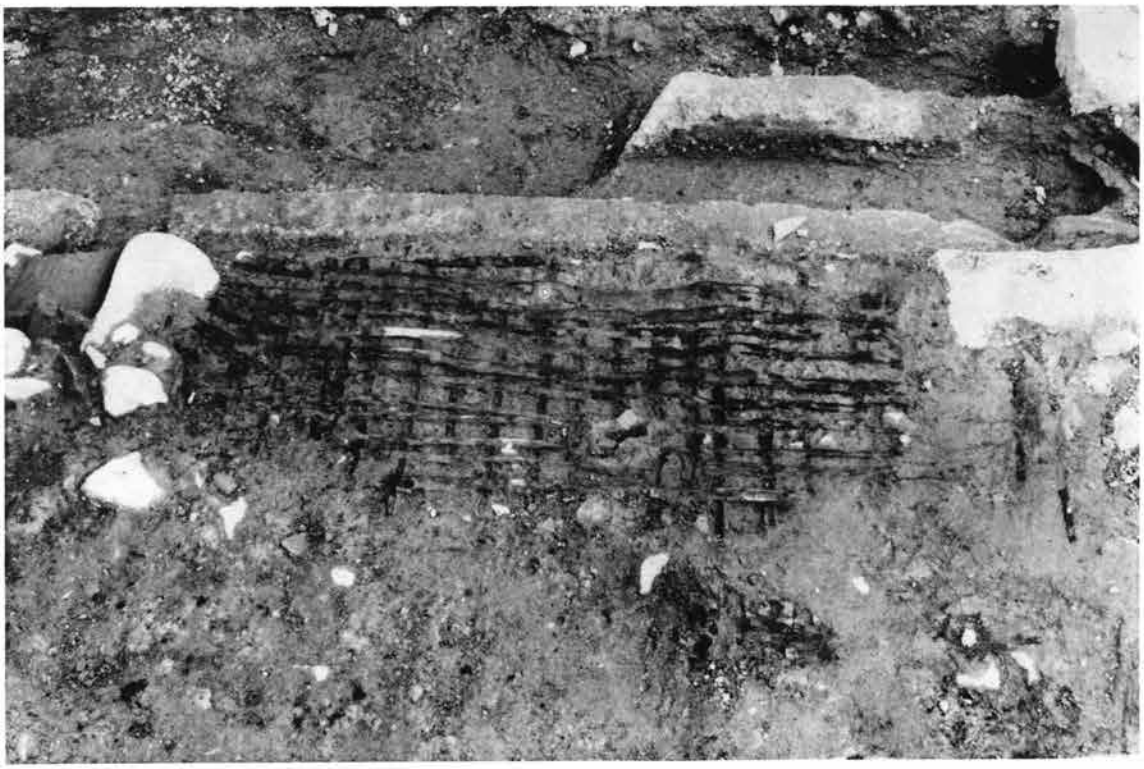
(3)　漆喰溝の断面c（東から）

(4)　漆喰溝の断面d（東から）

図版第19　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）



(1) 江戸時代の漆喰排水溝（南から）



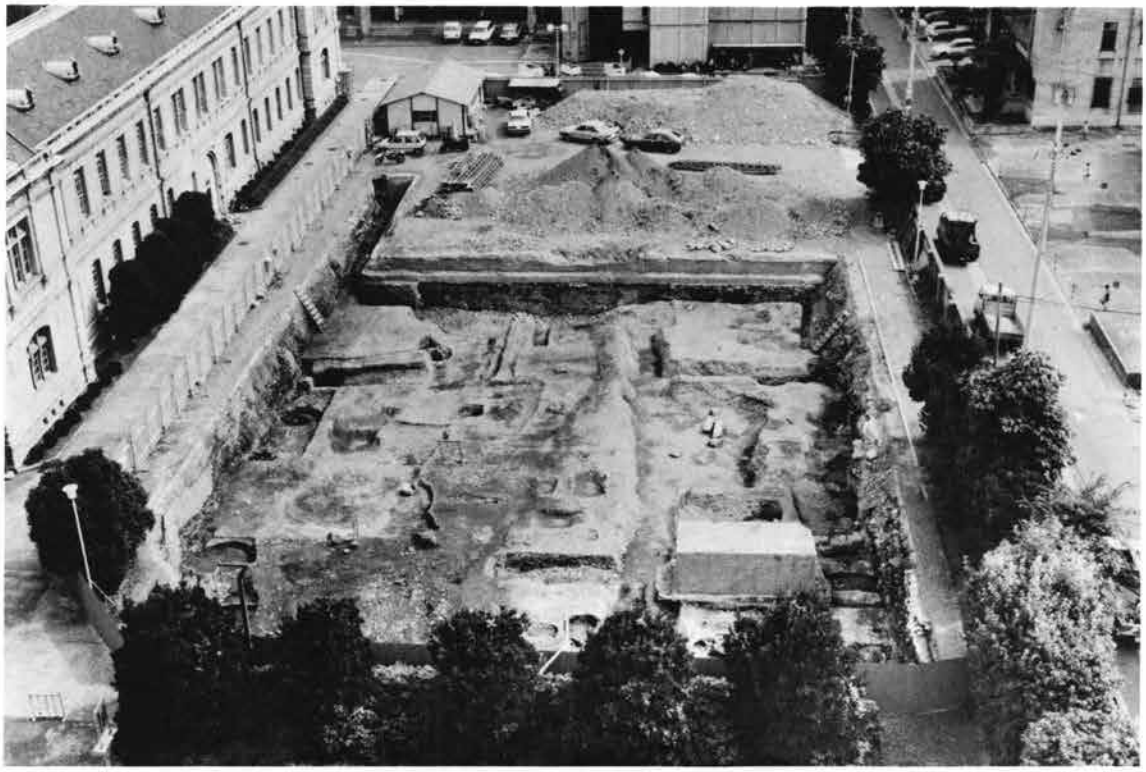
(2) 江戸時代の土壁・ＳＨ36（西から）

図版第20　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

(1) 近衛大路北側溝の断面（南東から）

(2) 瓦溜りＳＨ36下層の礎石（西から）

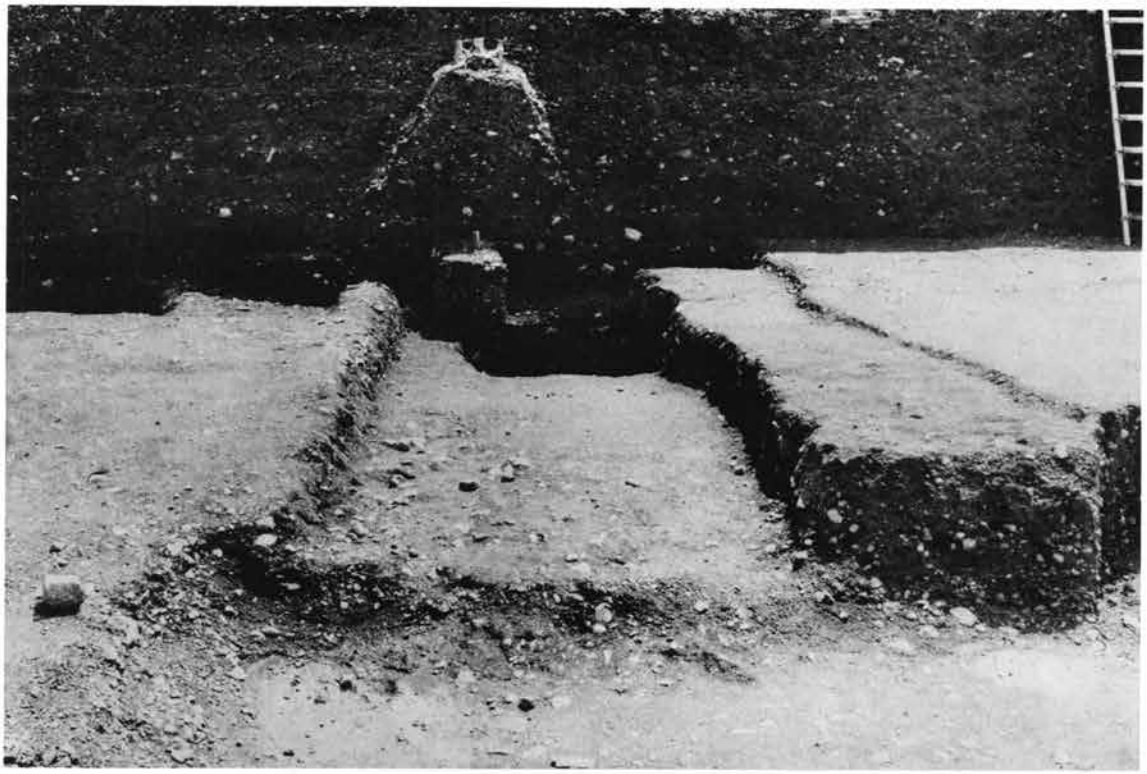
図版第21　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）



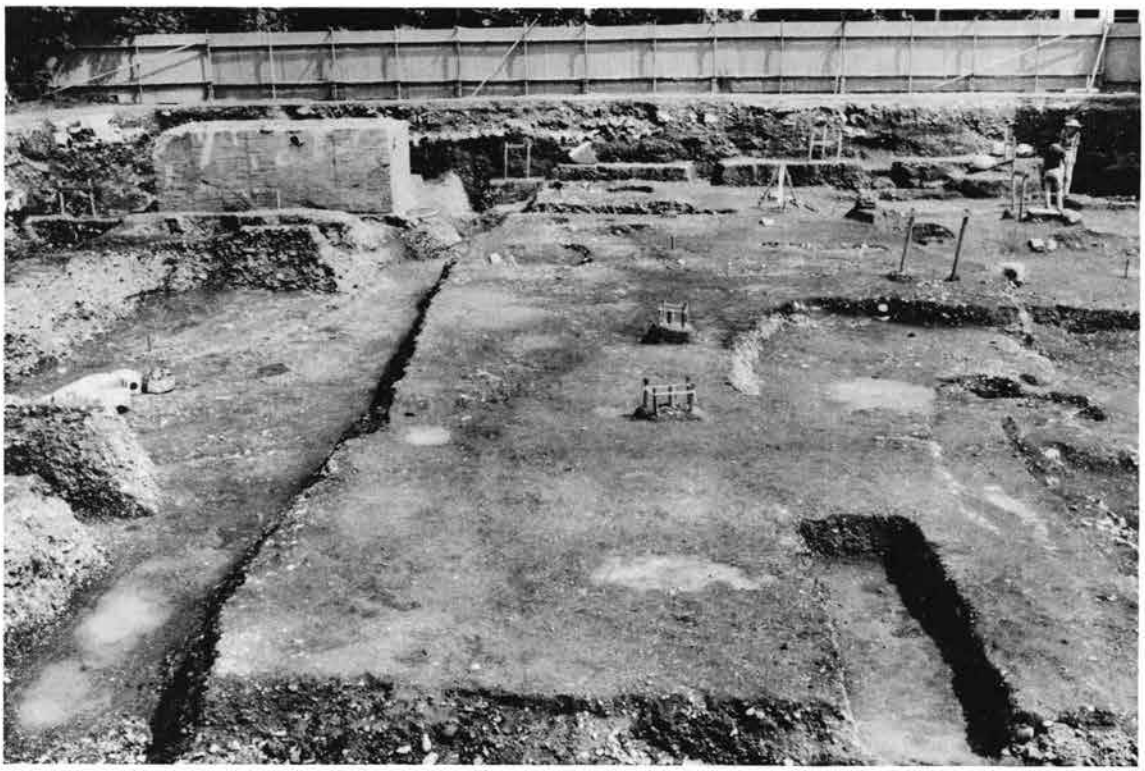
(1)　室町時代以前の状況（北から）

(2)　京都府庁新館と調査地

図版第22　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）



(1) 近衛大路南側溝ＳＤ135（西から）



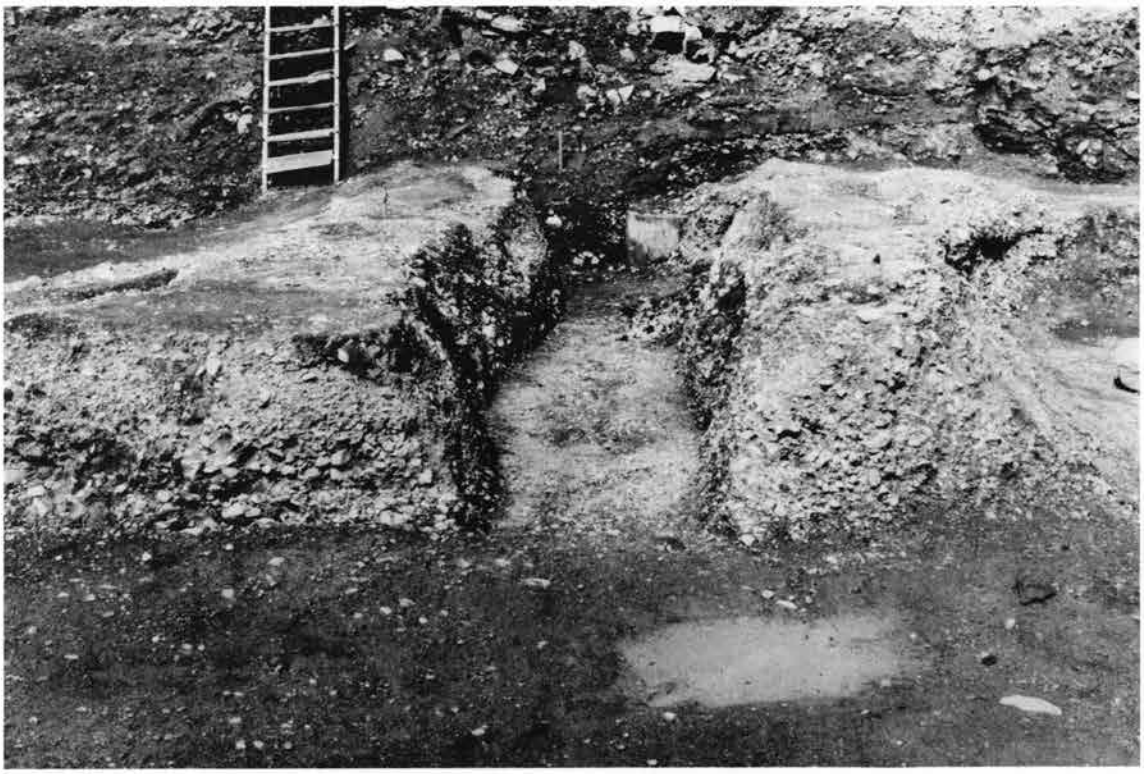
(2) 室町時代以前の西洞院大路（南から）

図版第23　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

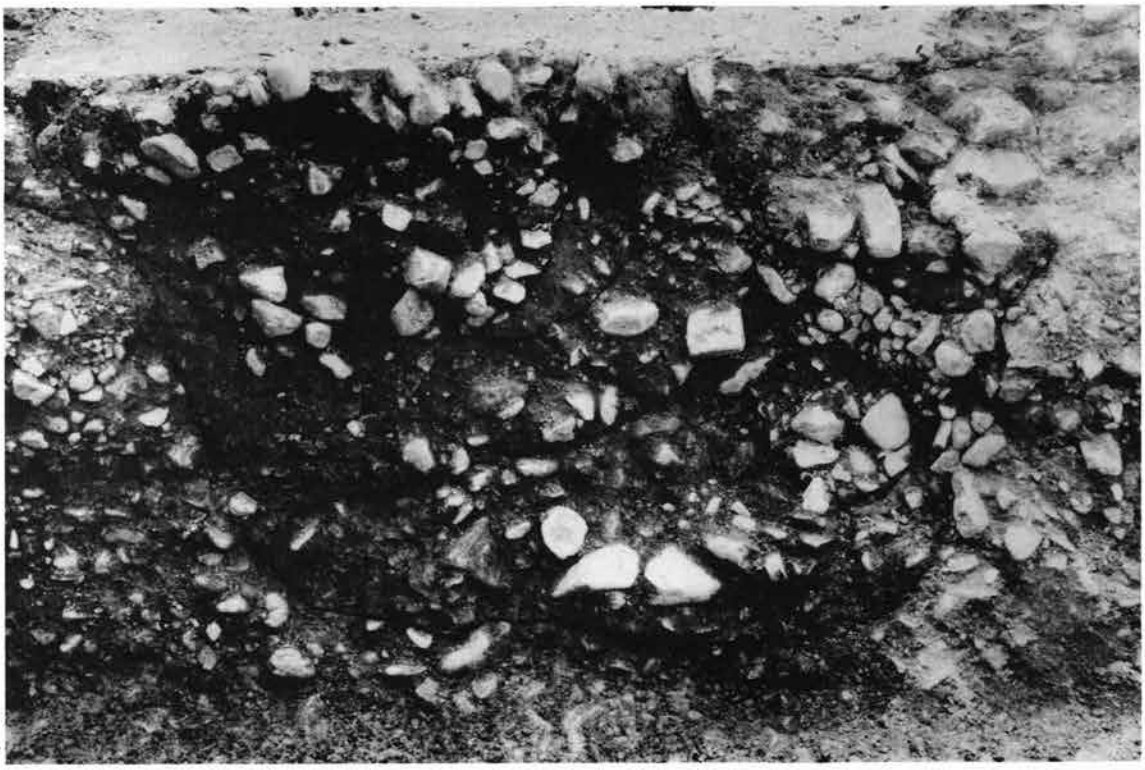
(1) 西洞院大路西側溝ＳＤ99（南西から）

(2) 同上断面（北から）

図版第24　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）



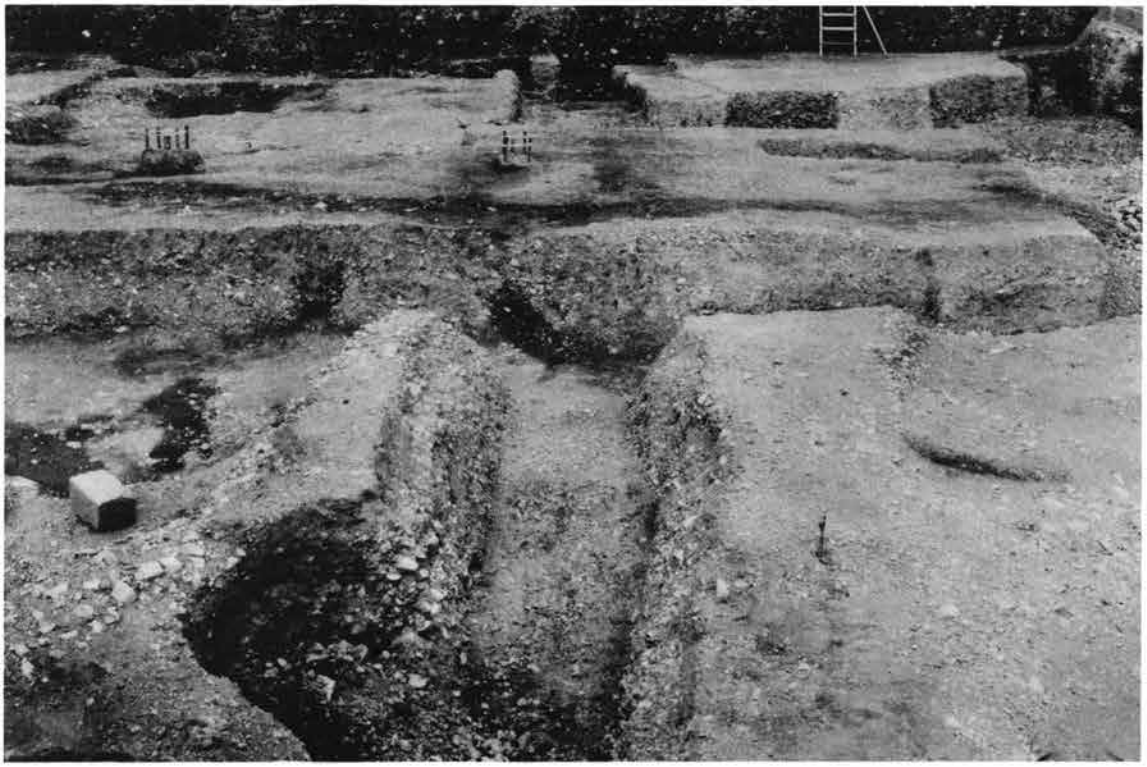
(1) 近衛大路南側溝ＳＤ108（東から）



(2) 同上断面（東から）

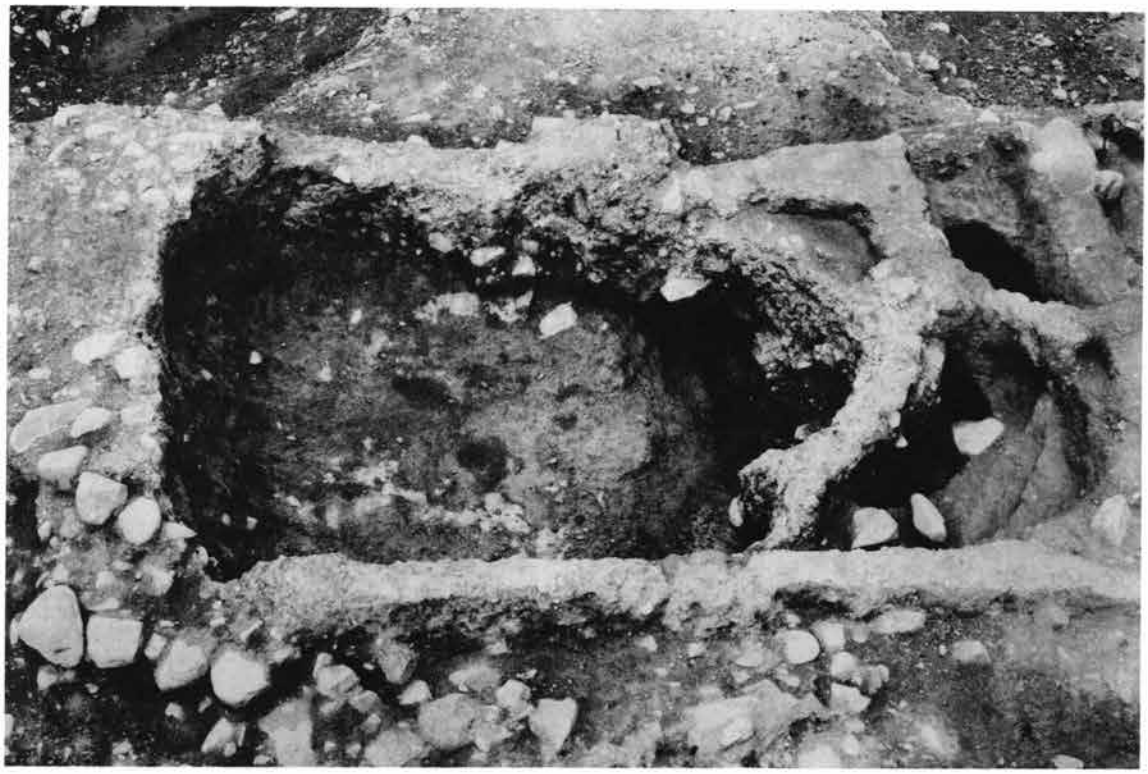
図版第25　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

(1)　西洞院大路西側溝ＳＤ99（北から）



(2)　近衛大路南側溝ＳＤ108・ＳＤ135（西から）

図版第26　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）



(1) 土坑ＳＫ134（東から）

(2) 同上（南から）

図版第27　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

(1) 土坑ＳＫ149掘削状況（西から）

(2) 同上完掘（西から）

図版第28　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

(1)　室町時代以前の北部調査地（西から）

(2)　ＳＡ119検出状況（南から）

図版第29　平安京跡（左京近衛・西洞院辻）

(1) 柱穴ＳＫ121（南から）

(2) 柵ＳＡ119（北から）

(3) 井戸ＳＥ147検出状況（東から）

(4) 祭祀跡ＳＸ154検出状況（東から）

第40図

123

122

28

85

58

67

55

出土遺物(1)

図版第31　平安京跡（左京近衛西洞院辻）

第49図

124

111

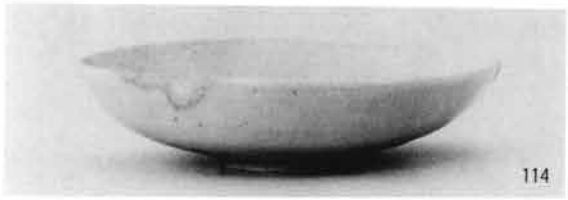
129

106

102

出土遺物(2)

図版第32　平安京跡（左京近衛西洞院辻）


114

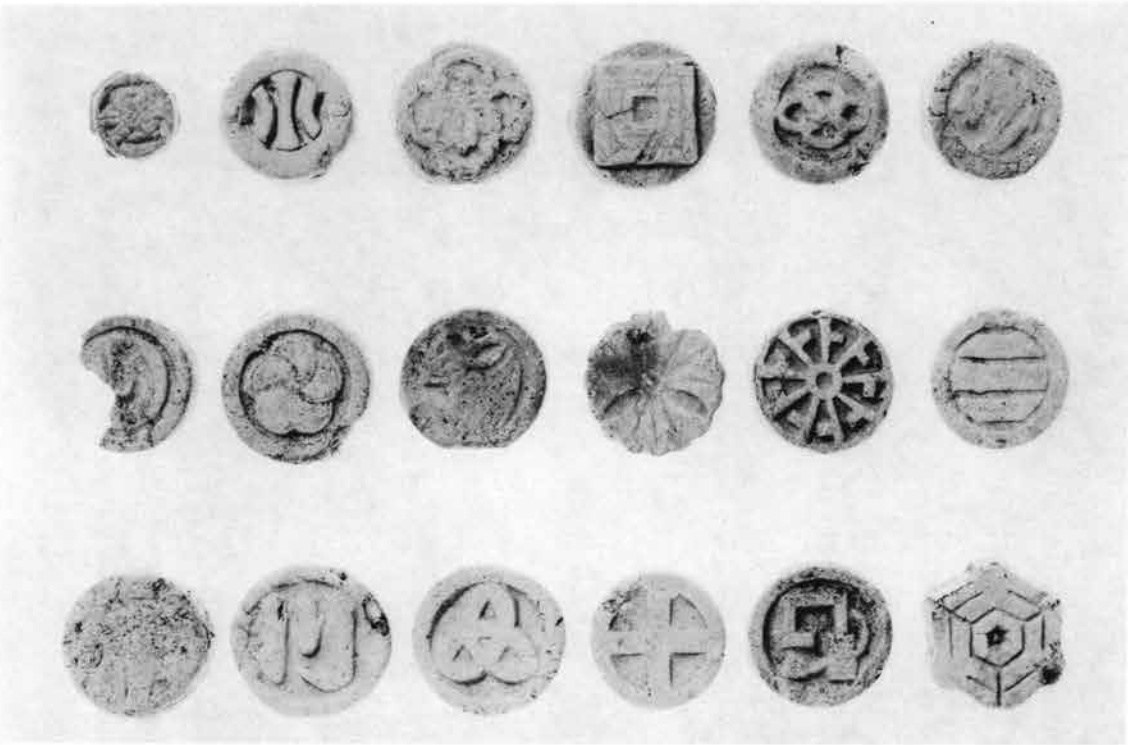
107

118

117

96

95



出土遺物(3)

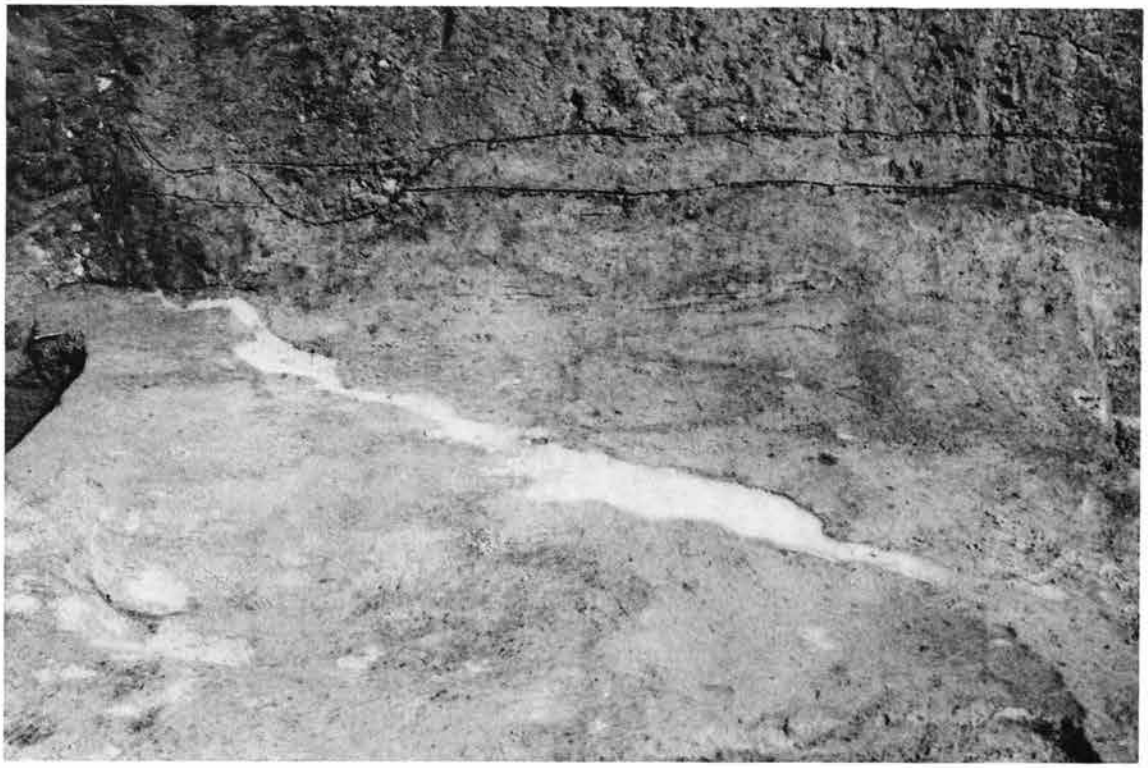
図版第33　木 津 遺 跡

(1) 調査地全景（西南から）：拡張前

(2) 調査地東半全景（東南から）

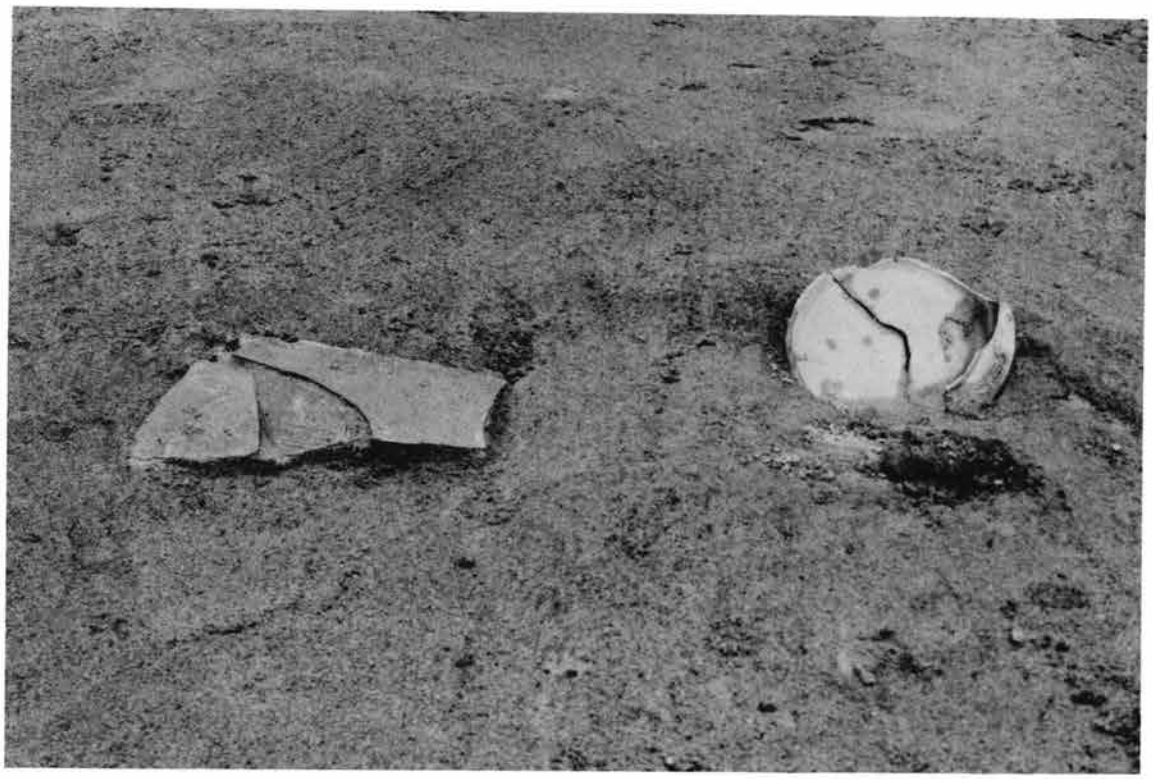
図版第34　木 津 遺 跡

(1) 調査地西半全景（西南から）：拡張後

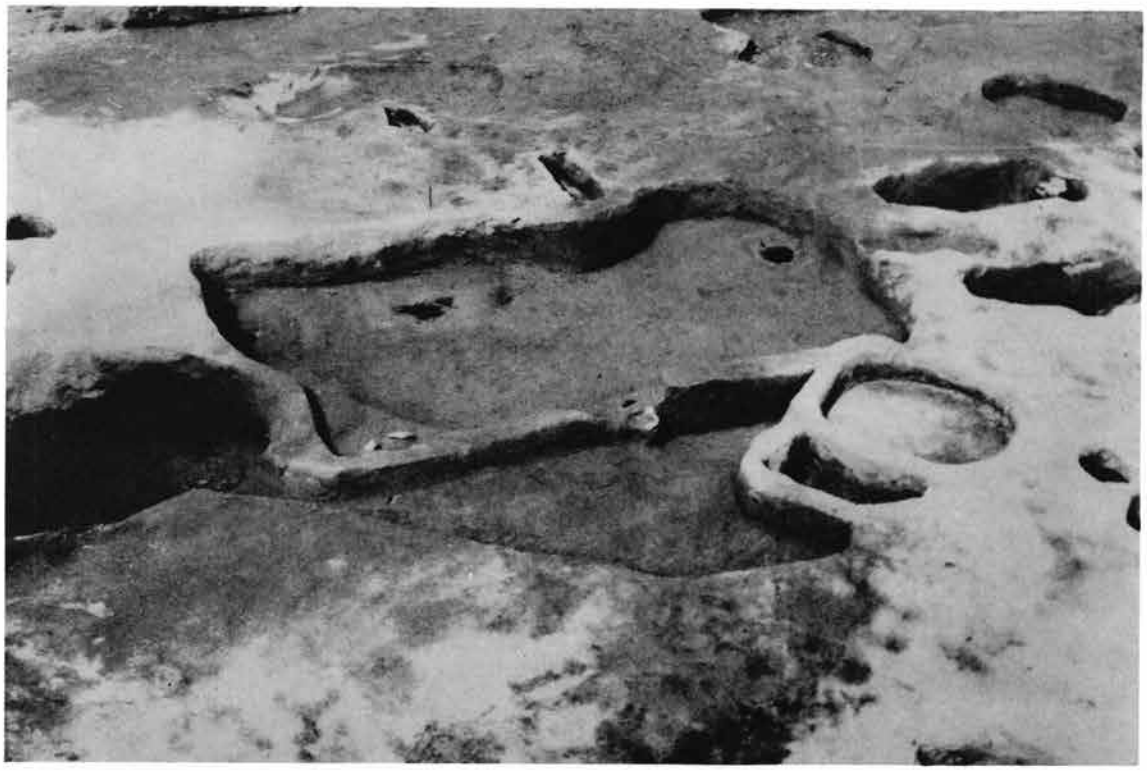


(2) 4 G区検出地震跡（南から）

図版第35　木 津 遺 跡



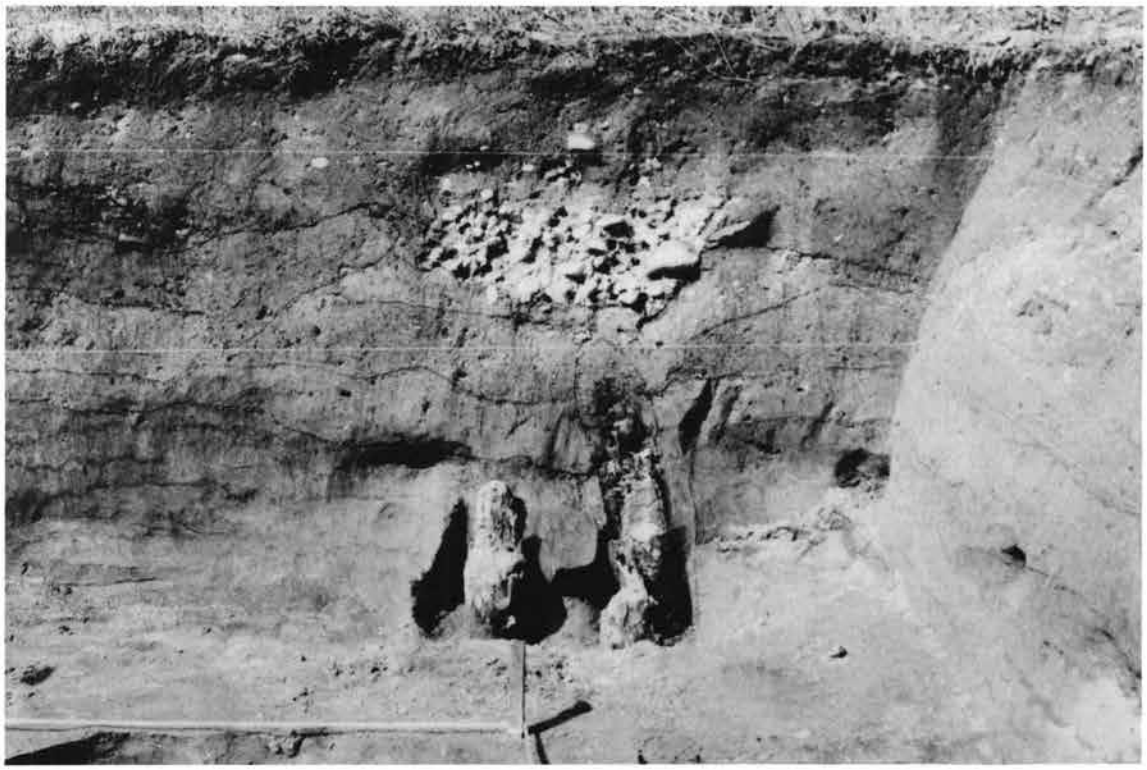
(1)　ＳＸ14検出面遺物出土状況



(2)　ＳＸ14・38全景

図版第36　木 津 遺 跡

(1) 断ち割りトレンチ全景（南から）



(2) ＳＢ02基礎跡上層面

京都府遺跡調査概報 第33冊

平成元年3月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）